

特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

特別史跡・特別名勝
鹿苑寺（金閣寺）庭園

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、便所改築計画に伴う特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

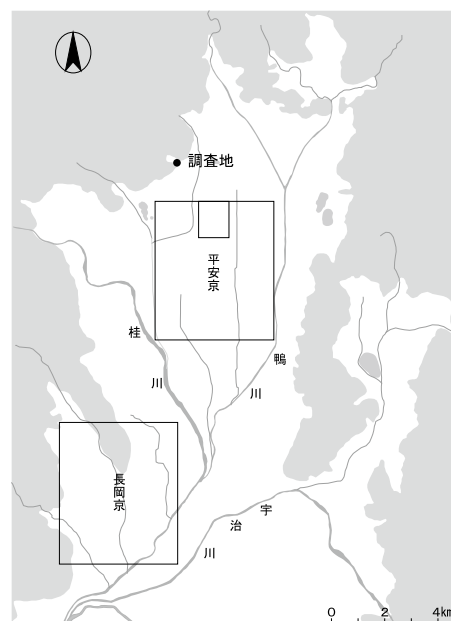
平成28年1月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 |
| 2 調査所在地 | 京都市北区金閣寺町1番地 鹿苑寺（金閣寺）境内 |
| 3 委 託 者 | 宗教法人 鹿苑寺 代表役員 有馬頼底 |
| 4 調査期間 | 12次調査：2012年12月17日～2013年2月1日
13次調査：2013年8月1日～2013年9月7日
14次調査：2015年4月1日～2015年7月21日 |
| 5 調査面積 | 12次調査：64㎡ 13次調査：65㎡ 14次調査：447㎡ |
| 6 調査担当者 | 12次調査：丸川義広 13次調査：小松武彦
14次調査：東 洋一・持田 透 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「衣笠山」「原谷」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 丸川義広・小松武彦・東 洋一・竜子正彦 |
| 14 執筆分担 | 丸川義広：第1章－1・3、第2章
小松武彦：第3章
東 洋一：第1章－2、第4章－1～3・5
竜子正彦：第4章－4 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに
本書作成には、調査業務職員および資料業務職員があたった。 |

（調査地点図）



目 次

第1章 調査経過	1
1. 調査の経緯	1
2. 歴史的環境と立地	2
3. 既往の調査	3
第2章 12次調査	8
1. 経 過	8
2. 遺 構	10
(1) 1区	10
(2) 2区	11
(3) 3区	12
(4) 4区	15
(5) 5区	15
(6) 6区	16
(7) 7区	16
(8) 8区	17
3. 遺 物	18
(1) 土器類	18
(2) 瓦類	21
(3) 銭貨・金属製品	24
(4) 石製品	24
(5) 壁土	25
(6) 木製品	25
4. ま と め	25
第3章 13次調査	27
1. 経 過	27
2. 遺 構	28
(1) 層序	28
(2) 遺構	30
3. 遺 物	34
(1) 土器類	34
(2) 瓦類	35
(3) その他の遺物	35

4. ま と め	36
第4章 14次調査	37
1. 経 過	37
2. 遺 構	39
(1) 層序	39
(2) 遺構	45
3. 遺 物	53
(1) 遺物の概要	53
(2) 土器類	53
(3) 瓦類	55
(4) 金属製品・木製品	59
4. 金属製品の分析	61
(1) 「宝輪」の分析	61
(2) 「賢瓶」について	61
5. ま と め	65

図 版 目 次

図版1	12次調査	遺構	1	1区全景（北東から）
			2	1区断割り（南から）
			3	1区断割り壁面（南西から）
			4	1区断割り壁面（北西から）
図版2	12次調査	遺構	1	2区全景（南東から）
			2	3区全景（拡張後、北から）
図版3	12次調査	遺構	1	4区全景（南西から）
			2	4区全景（北から）
			3	5区全景（南東から）
			4	5区全景（北西から）
図版4	12次調査	遺構	1	6区全景（拡張後、東から）
			2	6区落込み（拡張後、北から）
			3	7区全景（北から）
図版5	12次調査	遺構	1	7区井戸1 検出状況（北西から）
			2	7区石組検出状況（北から）
			3	7区井戸1（北西から）

- | | | | | |
|------|-------|----|---|---------------------|
| 図版6 | 12次調査 | 遺構 | 1 | 8区全景（南東から） |
| | | | 2 | 8区石組検出状況（南東から） |
| | | | 3 | 8区石組検出状況（拡張後、東から） |
| 図版7 | 12次調査 | 遺物 | | 土器類 |
| 図版8 | 12次調査 | 遺物 | | 瓦類 |
| 図版9 | 12次調査 | 遺物 | | 瓦類・銭貨・鉄釘・石製品・壁土 |
| 図版10 | 13次調査 | 遺構 | 1 | 第1面全景（北西から） |
| | | | 2 | 第2面全景（北西から） |
| 図版11 | 13次調査 | 遺構 | 1 | 第3面全景（北西から） |
| | | | 2 | 断割り2（北西から） |
| | | | 3 | 断割り3（北西から） |
| 図版12 | 13次調査 | 遺物 | | 土器類・瓦類 |
| 図版13 | 14次調査 | 遺構 | 1 | 1区全景（北西から） |
| | | | 2 | 7区全景（北西から） |
| 図版14 | 14次調査 | 遺構 | 1 | 2区全景（東から） |
| | | | 2 | 4区全景（北から） |
| | | | 3 | 3区全景（東から） |
| 図版15 | 14次調査 | 遺構 | 1 | 5区全景（南から） |
| | | | 2 | 6区全景（北東から） |
| 図版16 | 14次調査 | 遺構 | 1 | 土坑3 土師器出土状況（北西から） |
| | | | 2 | 土坑4（南南西から） |
| | | | 3 | 土坑5（南西から） |
| | | | 4 | 土坑6（北東から） |
| | | | 5 | 土坑7（北から） |
| | | | 6 | 土坑9（南西から） |
| 図版17 | 14次調査 | 遺構 | 1 | 落込み1（北東から） |
| | | | 2 | 礫敷1・高まり1（北東から） |
| 図版18 | 14次調査 | 遺構 | 1 | 高まり3（北西から） |
| | | | 2 | 高まり4（北西から） |
| | | | 3 | 池1・高まり2・溝2（北西から） |
| 図版19 | 14次調査 | 遺構 | 1 | 落込み3（北東から） |
| | | | 2 | 溝3 金銅製宝輪片出土状況（南西から） |
| | | | 3 | 溝4（南東から） |
| 図版20 | 14次調査 | 遺構 | 1 | 瓦窯1・2（西から） |
| | | | 2 | 瓦窯1・2（東から） |

			3 瓦窯 2 隔壁部窯内側 (東から)
図版21	14次調査 遺構	1 瓦窯 1・2 灰原断割 (北から)	
		2 瓦窯 3 (北から)	
		3 瓦窯 4 (東から)	
図版22	14次調査 遺物	土器類	
図版23	14次調査 遺物	土器類・金属製品	
図版24	14次調査 遺物	瓦類	

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査区及び既往調査区位置図 (1 : 1,500)	4
図 3	12次調査 調査前全景 (1区、北西から)	8
図 4	12次調査 調査前全景 (5区、北から)	8
図 5	12次調査 作業風景 (3区、北から)	8
図 6	12次調査 作業風景 (4区、南西から)	8
図 7	12次調査区配置図 (1 : 500)	9
図 8	1区遺構実測図 (1 : 50)	10
図 9	2区遺構実測図 (1 : 50)	12
図 10	3区遺構実測図 (1 : 50)	13
図 11	土坑 3 断面 (東から)	13
図 12	3区断割り断面 (北西から)	13
図 13	4区遺構実測図 (1 : 50)	14
図 14	5区遺構実測図 (1 : 50)	14
図 15	6区遺構実測図 (1 : 50)	14
図 16	7区遺構実測図 (1 : 50)	16
図 17	井戸 1 の石組石材 (北西から)	17
図 18	8区遺構実測図 (1 : 50)	18
図 19	土器実測図 (1 : 4)	19
図 20	瓦拓影及び実測図 (1 : 4)	22
図 21	銭貨拓影 (1 : 1)	24
図 22	鉄釘実測図 (1 : 2)	24
図 23	石材実測図 (1 : 4)	24
図 24	13次調査区配置図 (1 : 250)	27

図25	13次調査 調査前全景（北から）	28
図26	13次調査 埋め戻し作業風景（北から）	28
図27	調査区北壁・東壁・南壁断面図（1：60）	29
図28	第1面遺構平面図（1：100）	30
図29	第2面遺構平面図（1：100）	31
図30	第3面遺構平面図（1：100）	32
図31	土器実測図（1：4）	35
図32	14次調査 調査前全景（東から）	37
図33	14次調査 作業風景（北東から）	37
図34	14次調査区配置図（1：500）	38
図35	層序（1：80）	39
図36	調査区平面図1（1：150）	40
図37	調査区平面図2（1：150）	41
図38	1～3区断面図（1：80）	42
図39	4区断面図（1：80）	43
図40	5～7区断面図（1：80）	44
図41	高まり3・4実測図（1：40）	46
図42	土坑4～8実測図（1：40）	47
図43	礫敷1実測図（1：20）	48
図44	落込み3断面図（1：50）	50
図45	瓦窯1・2実測図（1：40）	52
図46	平安時代土器実測図（1：4）	54
図47	鎌倉時代土器実測図（1：4）	54
図48	室町時代土器実測図（1：4）	55
図49	鎌倉時代瓦拓影及び実測図（1：4）	56
図50	室町時代瓦拓影及び実測図1（1：4）	57
図51	室町時代瓦拓影及び実測図2（1：4）	58
図52	宝輪参考図	59
図53	金属製品実測図（金1は1：6、金2・3は1：4）	60
図54	金属製品・木製品実測図（1：2）	60
図55	宝輪の蛍光X線分析箇所	61
図56	賢瓶及び内容物	62
図57	北山七重大塔位置復元案	66
図58	高まり1建物復元案（1：200）	67

表 目 次

表 1	調査一覧表	5
表 2	12次調査 遺構概要表	11
表 3	12次調査 遺物概要表	19
表 4	13次調査 遺構概要表	28
表 5	13次調査 遺物概要表	34
表 6	14次調査 遺構概要表	45
表 7	14次調査 遺物概要表	53
表 8	賢瓶の蛍光X線分析表 1	63
表 9	賢瓶の蛍光X線分析表 2	64

特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園

第1章 調査経過

1. 調査の経緯

本調査は、特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園の現状変更に伴って実施したものである。調査原因は便所改築計画であり、対象は黒門の西側に設置されている便所と金閣寺第1駐車場の西側に設置されている便所の2箇所である。

平成24年度（12次調査）は、便所周辺で事前調査を実施した。調査区は、黒門西側の便所周辺に1～3区を、駐車場西側の便所周辺に4～8区を設定した。

平成25年度（13次調査）は、黒門西側便所の建物の設計と位置が確定されたことから、その箇所で調査を実施した。

平成27年度（14次調査）は、第1駐車場の西側に設置されていた便所跡とその周辺を対象とし、順次7箇所の調査区を設けて調査を実施した。

調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（2013年10月1日に財団法人から公益財団法人に

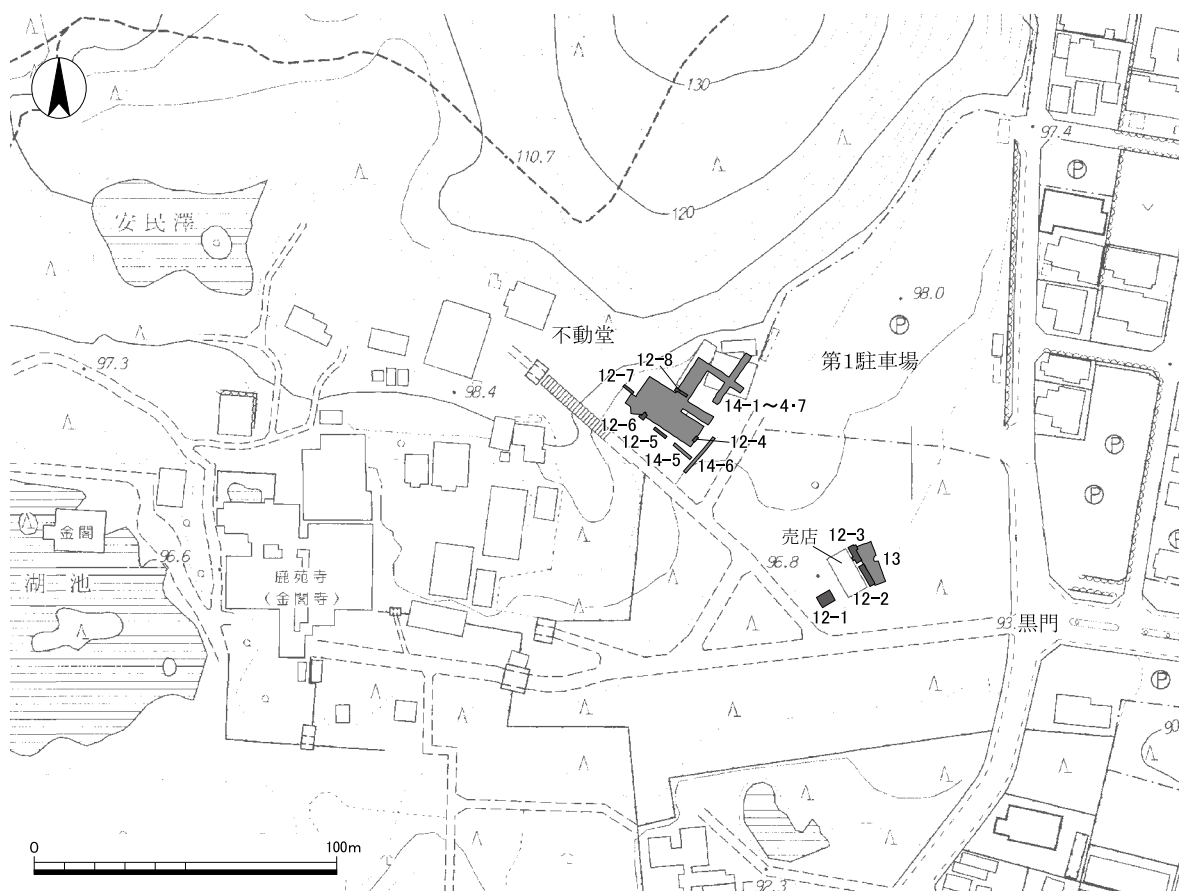


図1 調査位置図（1：2,500）

移行)が、鹿苑寺(金閣寺)から委託を受け、京都府教育庁指導部文化財保護課(以下「府保護課」という)と京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「市保護課」という)の指導のもと実施した。

各々の調査経過の詳細は第2～4章で記述している。

2. 歴史的環境と立地

調査地である鹿苑寺は足利義満によって建立された御堂御所である北山殿が前身であるが、彼の没後ほどなくして禅宗寺院鹿苑寺に改められ今日に至っている。義満時代の北山殿は現在の鹿苑寺境内より広く、北を大北山、東を紙屋川(荒見川)、西を衣笠山で囲われ、南限も一条大路にまで広がる小都市的な空間を形成していたことが、今日までの研究で明らかになってきている¹⁾。

この鹿苑寺の範囲は、平安時代前期に示された「北山野」の四至「東限園地司東大道、南限宮城以北、西限野寺東、北限靈巖寺」(『政治要略卷七十』弘仁五年十月十日条「禁制宮城以北北山野事」とほぼ一致している。平安時代前期にこの地域が皇室御料地であったことが想定できる。この「北山野」の「北限」とする「靈巖寺」の所在については諸説あるが、「北山靈巖寺」と呼称され、朝廷の年中行事の一つである「御燈」が献ぜられる「妙見堂」が存在した。「御燈」は灯を献じて北辰を奉る儀式で、「桓武遷都之後、登靈巖寺、供奉御燈」(『年中行事秘抄』三月三日条)とあり、日記などの記録(西宮記・権記・中右記など)では平安時代中期に多く「靈巖寺辺」に集中している。鹿苑寺西側には現代でも氷室町・氷室池などの地名が残り、『朝野群載』康和三年(1101)正月二十一日条『氷室目録』に「靈巖御室十合」とあることや、足利義満が後小松天皇を北山殿に招いた際の記録である『北山殿御幸記』応永十五年(1408)三月二十六日条に「靈巖寺跡御歴覽」をメニューに組み入れていることから、「靈巖寺」は金閣寺辺である可能性が高い。また、「靈巖寺」は『源氏物語』のクライマックスである『若紫卷』の「北山のなにかし寺」のモデルとなったとする説があり、北山は特に平安時代中期から後期にかけて天皇陵・火葬塚が集中して築かれ葬送の地でもあった。『源氏物語・明石卷』では、臣下に下った光源氏が父帝墓に参った場所を「石陰」とし、鹿苑寺北の大文字山東麓の鏡石町が「石陰」と呼ばれていた。「石陰」には一条・三条天皇比定火葬塚などがあり『源氏物語』と同期に記された藤原道長『御堂関白記』にも一条天皇を「石陰」に葬ったとある³⁾。

御料地であった「北山野」は平安時代末には花山天皇の孫系列(花山源氏)の神祇伯家の所領となっており、鹿苑寺の南東方向に花山天皇陵比定地が存在する。また、鎌倉時代初頭までは神祇伯を世襲した三位仲資王の所領となっていたが、承久乱後の朝廷で権勢を極めた藤原公経(西園寺公経)が尾張国松枝庄と交換して「西園寺」を建立したとされている。「西園寺」については建立の経過を記した『増鏡』に「公経のおほきおとと、其かみ夢みたまへることありて、源氏の中將わらはやみましなひ給ひし、北山のほとりに、世にしらすゆゆしき御堂を建てて、名をば西園寺といふめり」とあり、公経が『源氏物語』の「北山のなにかし寺」を夢見て西園寺を建立したとしている。

それに続けて「本堂」である「西園寺」の他に「せむしやく院」、「功德蔵院」、「池のほとりに妙音堂」、「たきのもとには不動尊」、「石橋の上には五たい堂。成就心院」、「ほす院。けす院。無量光院」、「北の寝殿」が存在したと述べ、藤原道長の御堂「法成寺」より素晴らしいと述べている。これらの御堂御所の位置関係などは不明な点が多いが、「もとは田畑などおほくて、ひたふるにみ中（田舎）めきたりしを、さらにうちかえし、くつして、えんなるそのにつくりなし」とあるように、平安時代の「北山野」には葬送地の他に田園風景が広がっていたことが推定できる。その後、西園寺の北山第（義満の北山殿と区別するために北山第とする）成立後の鎌倉時代末には、御宇多天皇の北山第御幸行路に「一条大路ヲ西へ、八町柳ヲ北へ、迄于彼第」（『勘仲記』弘安九年（1286）八月二十五日条）とあり、西園寺門前に町が成立していた可能性がある。現在も「衣笠惣門町」とその南に「八町柳町」が現存し、「八町柳町」には平安京右京の南北大路である道祖大路末に両側町であった痕跡を微かにとどめている。義満の北山殿はこの西園寺北山第を手に入れて建立されたが、その範囲は南限を衣笠惣門町より南の八町柳を超えた一条大路まで拡大している。また、西園寺時代の建物が義満の北山殿にも多く残存していたことが知られている。⁴⁾

平安京を一望の下に眺望でき、しかも、院政を敷くための御堂御所と小都市を造営できる広大な敷地は、鎌倉時代に権勢を極めた西園寺北山第跡が最も相応しく、後醍醐天皇に斬首された西園寺家の当主公宗の妻名子が「西園寺為、四神具足、諸仏遊地霊地、天下第一勝地是也」と『竹むきが記』（「康永元年（1342）」）に記したのも決して誇張ではないであろう。また、自ら源氏長者となり「日本国王源道義」を名乗り、若き日に関白二条良基から『源氏物語』を伝授され貴族的作法を身に着けていた義満にとって、源氏を輩出した平安時代の諸天皇が眠る源氏の故郷で、『源氏物語』の舞台である北山に、当初予定した院御所の伏見宮領地から変更したのも故あることかと考える。⁵⁾

3. 既往の調査

金閣寺の境内での調査は過去数多く実施しており、本報告の3箇年の調査を合わせて14件を数える。これまでに実施された調査については、5次調査までの成果を集約し1997年に刊行された報告書（表1の文献6）の中に既往調査の成果が一覧表の形で整理されている。また、それ以後に刊行された報告書においても、既往の調査区が配置図と一覧表のかたちで所収されている。今回はそれらの成果を踏まえ、既往調査区の位置と本調査区位置、並びに過去の調査一覧を掲載する（図2・表1）。

その中で近接する調査として、3次調査（W2～W5）と10次調査があげられる。3次調査のW4区西端で10世紀代の土師器皿を6枚重なった状態で検出している。W4区中央部東半では室町時代と考えられる幅9.5m、深さ0.5mの池を検出している。池からは多量の瓦が池を埋めたような状態で出土し、付近に瓦葺きの建物が存在した可能性が考えられる。また、W4区西半部中央で径0.2～0.4mの石からなる集石が検出されている。W4区池西肩付近から今回の調査区の間中部に設けた南北方向のW5区では全体に北が深くなる旧地形となっている。



図2 調査区及び既往調査区位置図 (1 : 1,500)

表1 調査一覧表

調査次数	調査区	面積	調査期間	調査概要	文献
1次	1-A～D	600m ²	1988.10.25 ～1989.04.03	室町時代の建物・廊・池・石組・溝・土坑、江戸時代の溝。 室町時代の土師器・陶器・輸入陶磁器。軒瓦・瓦。	1・6
2次	2-E～V	722m ²	1989.07.04 ～1990.03.13	平安時代の築地・建物、鎌倉時代の石組、室町時代の建物・石組・石列 ・溝。室町時代の土師器・輸入陶磁器、木製品、修羅。	2・6
3次	3-W1～ W5	148m ²	1990.05.24 ～1990.07.31	平安時代の土師器皿埋納、室町時代の建物・池。 室町時代の軒瓦・瓦。	3・6
4次	4-X	57m ²	1992.11.25 ～1992.12.18	平安時代中期の土坑・遺物包含層、室町時代の溝、江戸時代の溝・廃棄 土坑。平安時代中期の土師器、室町時代の土師器、江戸時代の陶磁器・ 瓦。	4・6
5次	5-Y	200m ²	1994.08.23 ～1994.10.21	室町時代の建物・柵列、桃山時代の整地層、江戸時代の石組溝・集石・ 落込み。室町時代の土師器・輸入陶磁器・石製香炉・軒瓦・瓦、桃山時 代の土師器・施釉陶器・焼締陶器・瓦、江戸時代の土師器・陶磁器・輸 入陶磁器・寛永通寶。	5・6
6次	6-1～9	42m ²	1997.11.07 ～1997.12.27	室町時代の井戸・池・整地層、江戸時代以降の整地層。 鎌倉時代の土師器・瓦、室町時代の土師器・瓦器・瓦、江戸時代以降の 土師器・陶器・磁器・瓦。	7
7次	7	115m ²	1999.03.03 ～1999.04.05	室町時代の礎石建物・溝・池、江戸時代の礎石建物・井戸・溝・暗渠。 室町時代の土師器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦・漆器、江戸時代の土師 器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦。	8
8次	8	64m ²	2001.04.23 ～2001.05.24	室町時代の柱列・柱穴・溝・土坑・堀、江戸時代以降の肥溜め・薬研堀 ・土塁。室町時代の土師器・輸入陶磁器・軒瓦・熨斗瓦・鉄製品、江戸 時代以降の土師器・施釉陶器・瓦・埴。	9
9次	9	25m ²	2002.01.25 ～2002.02.05	室町時代の土坑、江戸時代以降の柱穴・溝・土蔵基礎・廃棄土坑。 室町時代の土師器・輸入陶磁器・軒瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦。	10
10次	10-1～7	98m ²	2003.08.18 ～2003.10.10	平安時代の柱穴、鎌倉時代の柱穴・集石・溝・整地層、室町時代の礎石 建物・柱穴・土坑・溝・整地層、江戸時代以降の溝。 弥生土器、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・輸入白磁 ・軒瓦、鎌倉時代の土師器・須恵器・輸入白磁・軒瓦・瓦、室町時代の 土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入白磁・軒瓦・瓦、江 戸時代以降の土師器・瓦器・施釉陶器・磁器・軒瓦・瓦。	11
11次	11	300m ²	2005.08.03 ～2006.02.27	鎌倉時代の整地面、室町時代の礎石建物・柱穴・溝・集石・埋納土坑・ 整地面、江戸時代の礎石建物・蹲踞・石列・溝・集石・土坑・土器埋納 ・化粧面・整地面。平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器、 鎌倉時代の土師器・軒瓦、室町時代の土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶 器・輸入陶磁器・瓦・軒瓦・鬼瓦・埴・銭貨・金属製品、江戸時代の土 師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦・軒瓦・鬼瓦 ・埴・銭貨・金属製品・石製品・貝製品、近代の銭貨。	12
12次	12-1～8	64m ²	2012.12.17 ～2013.02.01	平安時代から室町時代の整地層、室町時代の井戸・土坑、江戸時代の道 路状高まり。平安時代の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器、室町時 代の土師器・瓦器・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・線刻石・釘・壁土・炭、江 戸時代の土師器・国産磁器・施釉陶器・焼締陶器・ガラス・軒丸瓦・軒 平瓦・軒棧瓦・道具瓦・寛永通寶。	本報告
13次	13	65m ²	2013.08.01 ～2013.09.07	平安時代の溝・土坑・ピット、鎌倉時代から室町時代の整地層、江戸時 代の土坑。平安時代の土師器・黒色土器・白色土器・須恵器・緑釉陶器 ・灰釉陶器・軒瓦・瓦・金属製品・壁土、鎌倉時代の土師器・瓦器・山 茶椀・輸入磁器、室町時代の焼締陶器・瓦器・軒瓦・瓦、江戸時代の瓦。	本報告
14次	14-1～7	447m ²	2015.04.01 ～2015.07.21	平安時代の土坑群、鎌倉時代の基壇状高まり・落込み、室町時代の高ま り・池・瓦窯。平安時代の土師器・緑釉陶器、鎌倉時代の土師器・瓦器 ・軒瓦・瓦、室町時代の土師器・瓦質土器・施釉陶器・軒瓦・瓦・金属 製品。	本報告

また、10次調査では整地層が厚く堆積することが判明しており、その整地の時期は、西園寺家の北山第及び足利義満による北山殿に伴うものであることが推定されている。いずれも、境内の東半には鹿苑寺以前の遺構が良好に遺存することを明らかにした成果として注目されるものであった。

註

- 1) 細川武稔「足利義満の北山新都心構想」『都市を区切る・中世都市研究15号』山川出版 2010年。他に岩崎小弥太「足利義満の北山第と金閣寺」『小林教授還暦記念史学論叢』東京堂 1938年。山田邦和『京都市史の研究』吉川弘文館 2009年参照。
- 2) 「御灯」については、赤松俊秀『鹿苑』鹿苑寺 1975年。福山敏夫「洛北の靈巖寺」『日本建築士研究続編』墨水書房 1971年。藪田嘉一郎「妙見寺と靈巖寺」『史跡と美術』第151号 史跡・美術同考会 1943年。金指正三『星占い星祭』青蛙房 1974年。山中裕『平安朝の年中行事』塙書房 1972年など参照。延命・病氣治癒を星に託す北辰・妙見信仰については、佐野賢治編『星の信仰・妙見・虚空蔵』溪水社 1994年収録の佐野賢治「日本星神信仰史概論―妙見・虚空蔵を中心にして」、田中君於「斎王郡行と北辰祭について」、廣畑輔雄「日本古代における北辰崇拝について」参照。妙見信仰と北斗尊星王法との関係については上野加代子『秦氏と妙見信仰』岩田書院 2010年他参照。なお、同じ北極・北斗信仰でも妙見菩薩は東密系、尊星王尊は台密系と考えられていた時もあったことは、速水侑『平安貴族社会と仏教』吉川弘文堂 1975年参照。
- 3) 「北山なにがし寺」について述べられた論文は多くあるが、特に永井義憲「源氏物語『若紫』の北山は靈巖寺か」『大妻国文・5』大妻女子大学国文学会 1974年。今西祐一郎「若紫巻の背景・源氏の中將わらはやまじなひ給ひし北山」『国語国文・597号』京都大学文学部国語学国文学研究室 1984年参照。
- 4) 西園寺の結構や北山殿が西園寺から引き継いだ建物群については、久垣秀治『京都名園記・中巻』誠文堂新光社 1968年と、川上 貢『日本中世住宅の研究・新訂』中央公論美術出版 2002年に詳しい。また、道祖大路末が衣笠惣門町南の八町柳町を貫いて直線の隘路が存在していたことを「明治17～32年官有地籍図」（京都府立総合資料館写真版）で確認することができる。直線道の地割が乱れるのは衣笠惣門町以北であることから西園寺門前町が形成されていた可能性が高い。
- 5) 義満は、後に豊臣秀吉によって伏見指月城が築かれた伏見宮領地に自らの院御所を建立しようとし、一旦伏見宮家から用地を収用したが、北山に変更している。白井信義『足利義満』吉川弘文堂 1960年。なお、神祇伯氏と源氏、義満と源氏の関係については岡野友彦『源氏と日本国王』講談社 2003年参照。

文献（表1 調査一覧表）

- 1 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 2 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 3 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年

- 4 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 5 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6 前田義明ほか『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 7 東 洋一「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 8 南 孝雄「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 9 東 洋一「第8次調査」『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 10 鈴木久男「第9次調査」『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 11 高橋 潔『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 12 小檜山一良『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年

第2章 12次調査

1. 経 過

調査区は、黒門西側の便所周辺に1～3区を、金閣寺第1駐車場西側の便所周辺に4～8区を設定した。

調査は2012年12月中旬、金閣寺第1駐車場西側の便所周辺の調査区から開始した。4・5区では遺構は認められなかったが、6区では無遺物層（以下、「地山」と表記）直上で焼土面を、7区では室町時代後半期に埋没したとみられる井戸を、8区では西端で池に伴うとみられる石組を、それぞれ検出した。これら調査区の進捗を見ながら、黒門西側の便所周辺に2・3区を設定し、4～8区と並行して調査を進めた。2013年1月中旬から同便所の西側で1区の調査を開始した。ここでは現地表付近の地層が堅固と予想されたため、小型のバックホーを用いて掘削した。1区では道路状の高まりを検出し、その下には平安時代後期以降の整地層が厚く堆積することが判明した。こうした堆積状況は2・3区においても同様で、さらに整地層が深いことが確認できた。2・3区では地山の確認に務めたが、一部しか確認できなかった。

全景写真は6～8区を1月中旬に、1～3区を1月後半に撮影した。4・5区の全景写真と部分写真は、調査担当者が適宜撮影した。



図3 12次調査 調査前全景（1区、北西から）



図4 12次調査 調査前全景（5区、北から）



図5 12次調査 作業風景（3区、北から）



図6 12次調査 作業風景（4区、南西から）

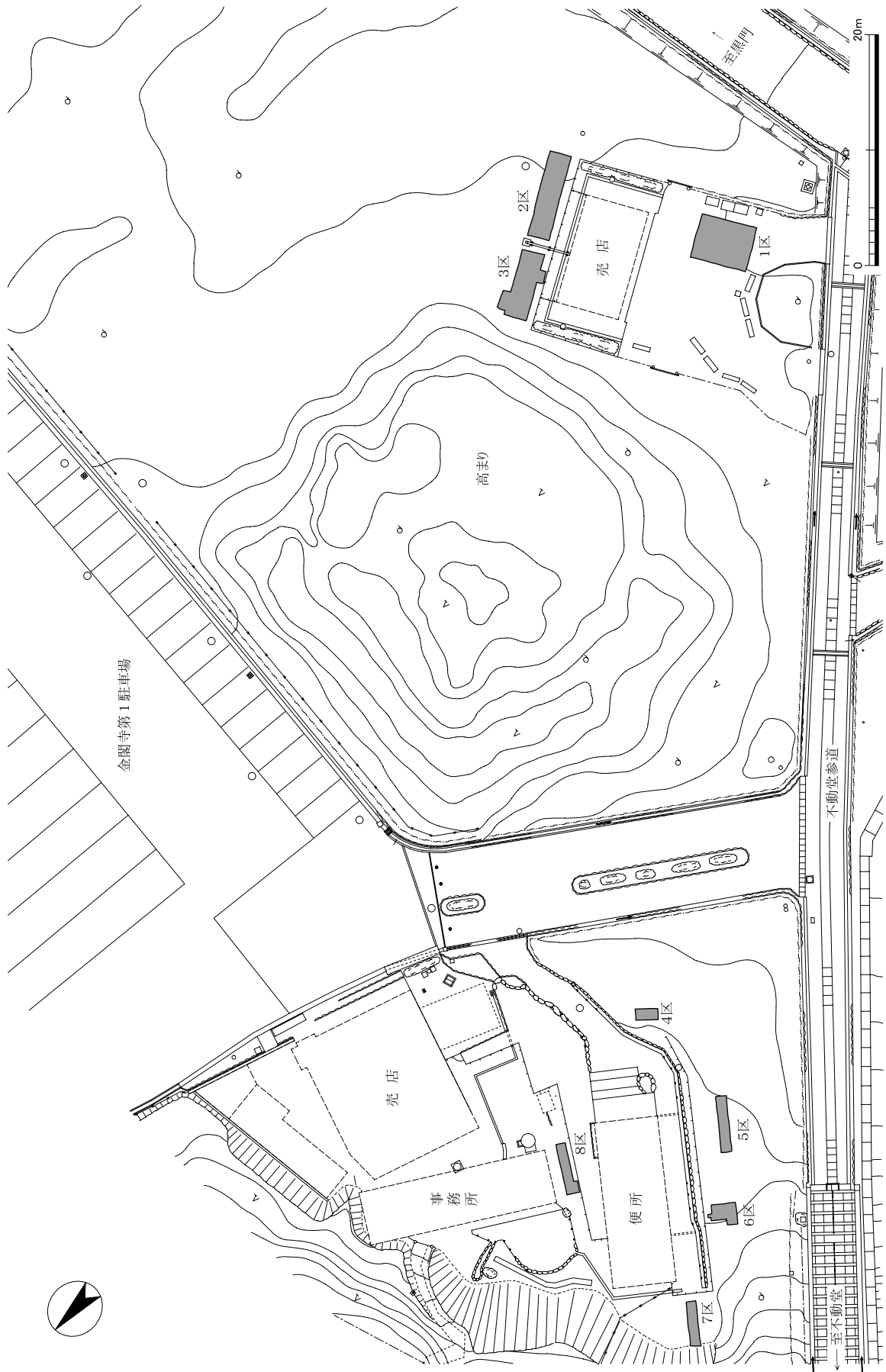


図7 12次調査区配置図 (1 : 500)

府・市保護課による臨検は随時、現地で実施され、層位と遺構の確認ならびに必要と判断された箇所では拡張などの指導があった。これらの作業を行い、許可が出たものから順次埋め戻しを行って、1月末にすべての作業を完了した。2月1日に機材などを撤去し、現地での調査を終了した。

2. 遺 構

(1) 1区 (図8、図版1)

黒門の西側に設置された売店・便所の表(西側)に設定した調査区である。幅3.9mで長さ5.0mあり、調査面積は19.5㎡である。

地表から0.35mで北東側に向かう高まりを検出した。高まりはすべて盛土で形成されている。江戸時代に作成された絵図には、当該地付近に道路が描かれているため、高まりは道路跡と想定でき

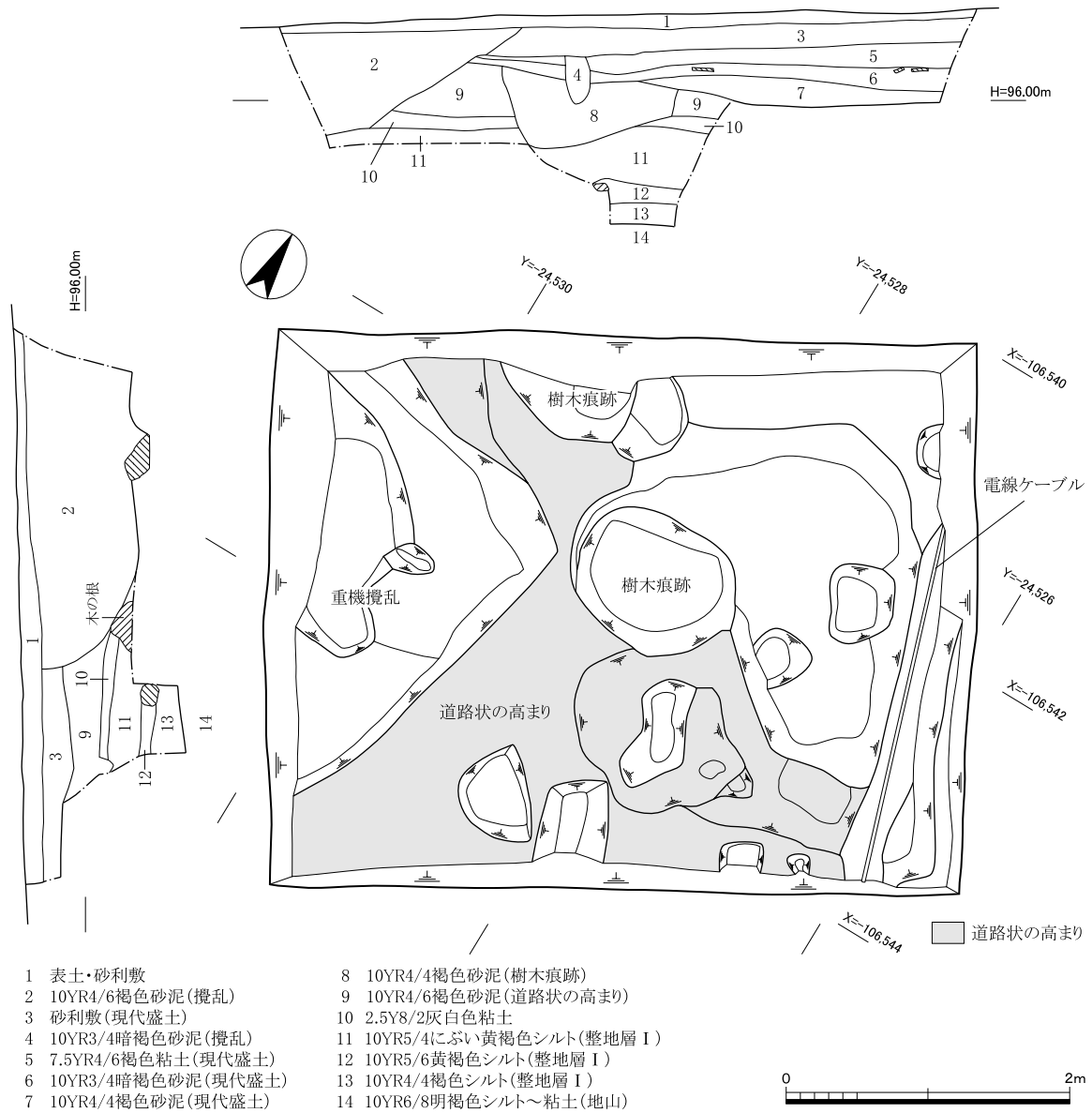


図8 1区遺構実測図(1:50)

た。しかし、道路面の砂利敷きや側溝などの施設は検出できなかった。高まり上部で樹木痕跡とみられる穴を2箇所以上検出した。これらは道路脇に植えられた樹木跡と想定できる。また、高まり上には小規模な穴があるが、これらはすべて最近の攪乱である。また、調査区西端の攪乱は重機によるものと判断できた。今回は攪乱の肩を利用するかたちで断割りを実施している(図版1-2)。高まりの東側は徐々に低くなり、現代盛土が東に下るかたちで堆積していた。高まりの東側が低い状況は、調査区北西壁で観察できる。

高まりの0.4m下には、灰白色粘土(図8の10層)が厚さ約10cmあり、高まりの東半にはこの粘土面の頭が水平に堆積する箇所が確認できた。この粘土はほぼ水平で層厚も一定しており、人工的に敷かれたと判断できる(図版1-3)。

灰白色粘土の下0.7mまでは、にぶい黄褐色シルト(11層)・黄褐色シルト(12層)・褐色シルト(13層)が堆積し、その下は固く締まった明褐色シルト～粘土層(14層)で、ここでの地山と判断できた。したがって、その上部に堆積した11～13層は「整地層Ⅰ」と一括してみることができ。灰白色粘土はその最上部に入れられた化粧土層とみてよいが、入れられた目的は明らかでない。

(2) 2区(図9、図版2)

黒門の西側に設置された売店・便所の裏(東側)に設定した調査区である。幅1.95mで長さ7.5mあり、調査面積は14.6㎡である。

この調査区では南半で下水管敷設に伴う攪乱、北半においても樹木による攪乱を検出した以外、顕著な遺構は検出できなかった、中央部において焼土層を検出した。焼土層はほぼ南北方向に残存しており、残存長1.2mで幅0.3m、厚さは0.1m程度であった。この焼土層は、黄褐色シルト質粘土(図9の4層)上面に堆積しており、中世とみられる瓦が出土したが、年代を確定するには至らなかった。

堆積層は1区と共通する部分が多い。まず現地表下1.4mで灰白色粘土(11層)を確認した。この粘土層は、1区で検出した灰白色粘土(図8の10層)と同じ層であるが、ここで検出した灰白色粘土層は厚さが0.5mあり、1区、並びに後述する3区では厚さ0.1m程度であったこととは大きく相違していた。灰白色粘土の下には褐色シルト(12層)が堆積する。1区で整地層Ⅰとして認識した層であり、ここでも同様に堆積することが判明した。しかし、地山はさらに深く、堆積位置は確認できなかった。

表2 12次調査 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代	1～3区：整地層(整地層Ⅰ)	灰白色粘土が水平に敷かれる。
鎌倉・室町時代	1～3区：整地層(整地層Ⅱ)、7区：井戸1、3区：土坑3・4、6区：焼土面。	土坑3・4は固く叩き締められ、礎石据付穴か？
江戸時代	1区：道路状の高まり	高まり上には樹木痕跡がある。

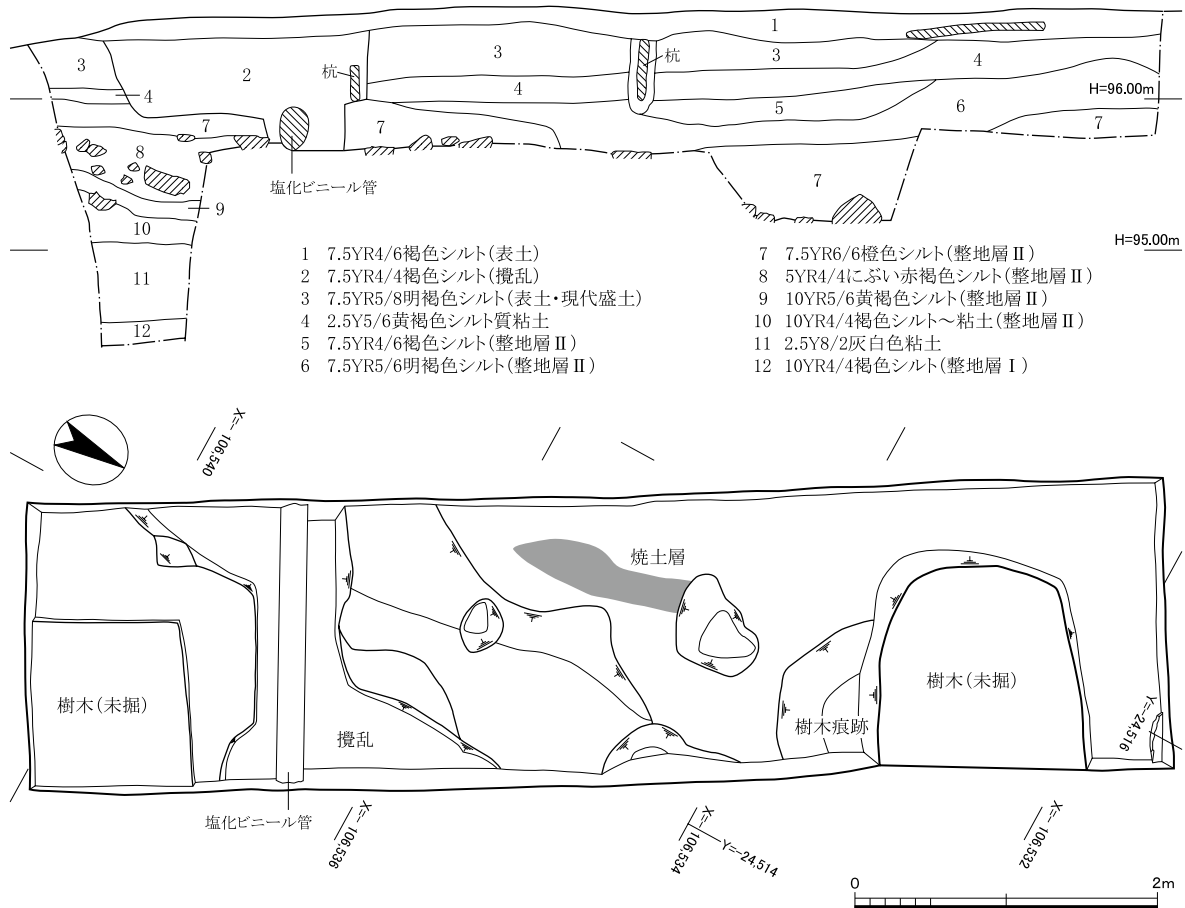


図9 2区遺構実測図(1:50)

灰白色粘土の上部には褐色シルト(5層)から褐色シルト～粘土(10層)までが、厚さは0.9mにわたり堆積する。このうちの特に橙色シルト(7層)、にぶい赤褐色シルト(8層)、黄褐色シルト(9層)には人頭大の礫が含まれ、土石流堆積のような様相がみられた。灰白色粘土の上部を形成するこれらの層を「整地層Ⅱ」として把握した。

整地層Ⅱの上にある黄褐色シルト質粘土(4層)は粘質が強く、内部には白色の礫が多く含まれていた。北西側の3区ではこの層の上面で土坑3・4を検出しているが、この2区では先述した焼土層を検出しただけで、顕著な掘り込みをもつ遺構は検出しなかった。黄褐色シルト質粘土は整地層Ⅱの最上部に貼られた層とみられる。

(3) 3区(図10～12、図版2)

黒門の西側に設置された売店・便所の裏(北東側)に設定した調査区で、幅2.0m、長さ5.9mあり、府・市保護課による指導を受けて北東と南西の一部を拡張した。調査面積は11.8㎡である。

この調査区では北東部で土坑3、南西部で土坑4を検出した。2つの土坑は、いずれも2区で先述した黄褐色シルト質粘土(図10の2層)の上面で検出したものである。土坑3は直径1.4m程あり、深さは検出面から0.25mある。東半部を完掘した。断面観察によると底部は丸く窪む。土坑内の堆積層は褐色粘土層で、非常に固く叩き締められていた。土坑4は、埋土は土坑3と同じ褐色粘

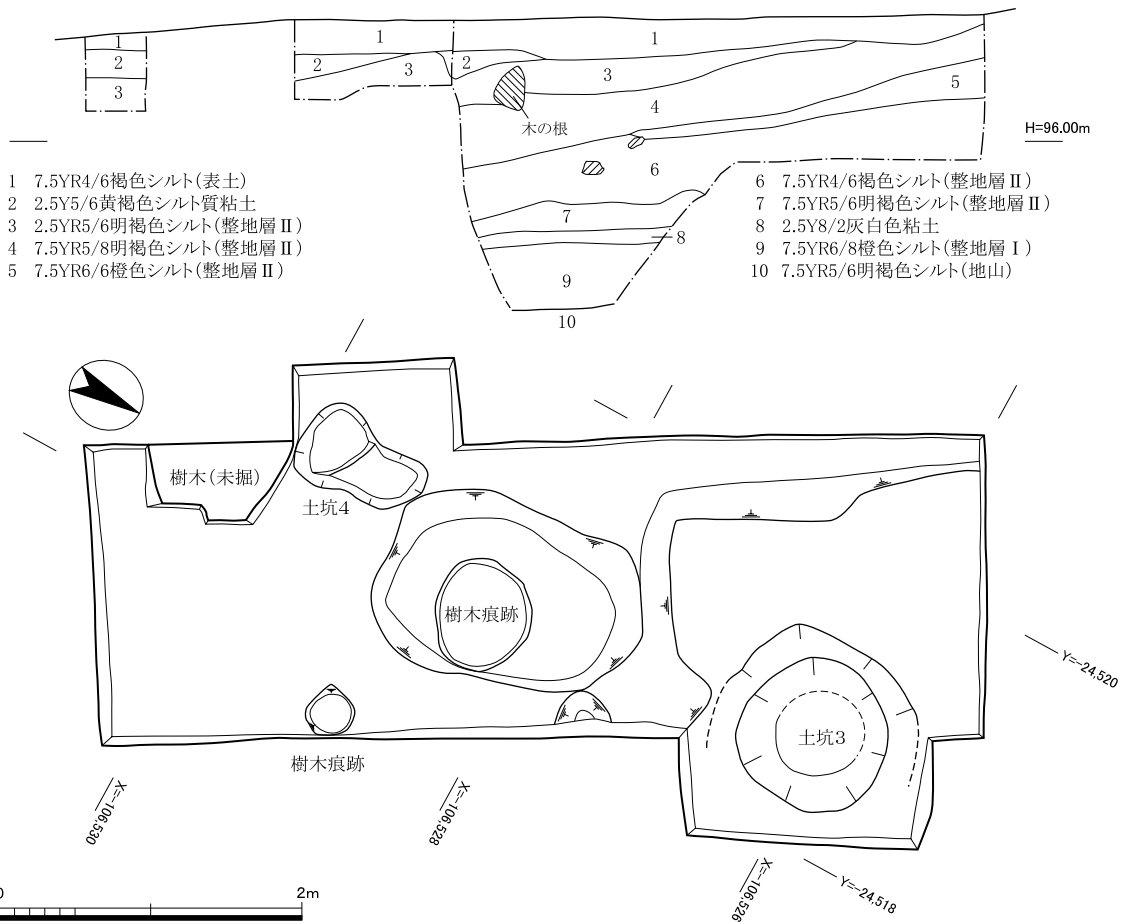


図10 3区遺構実測図(1:50)

土であったが、残存状態が非常に悪く、底部がわずかに残存するだけであった。両者は南北方向に並んでおり、芯々距離は3.3mある。両側にどのように展開するのかは、不明である。

現地表下1.4m下で、1・2区と同じく灰白色粘土(8層)を検出した。厚さは最も厚い部分で0.1m程であった。灰白色粘土の下には橙色シルト(9

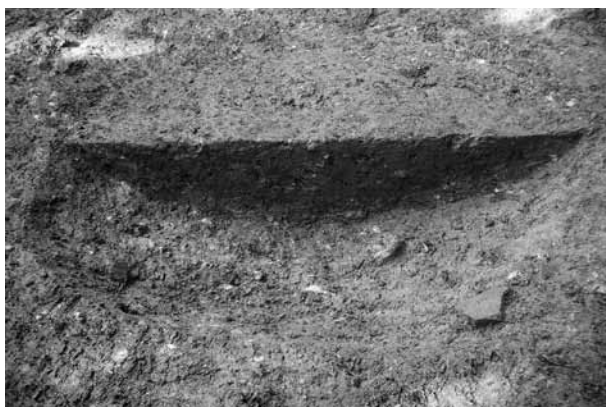


図11 土坑3断面(東から)



図12 3区断割り断面(北西から)

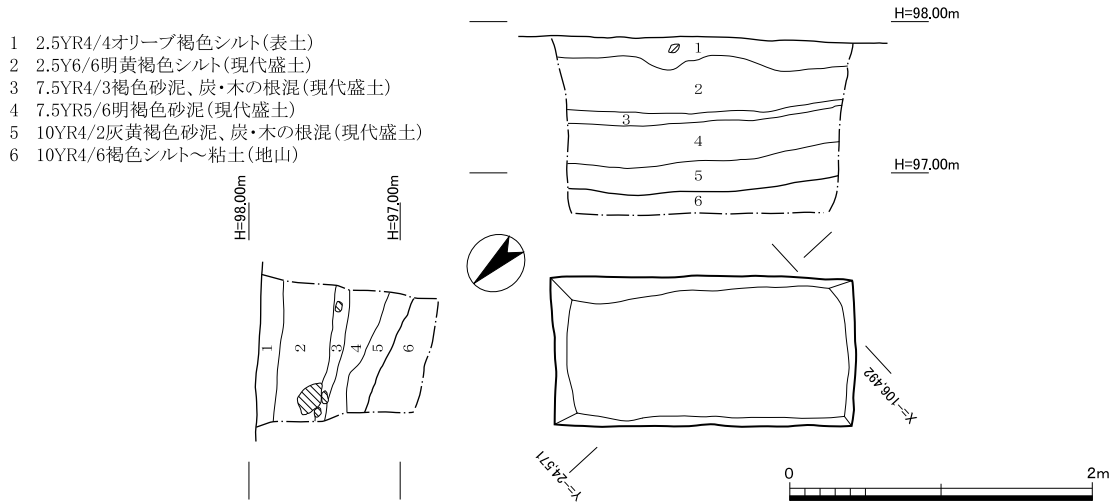


図13 4区遺構実測図 (1 : 50)

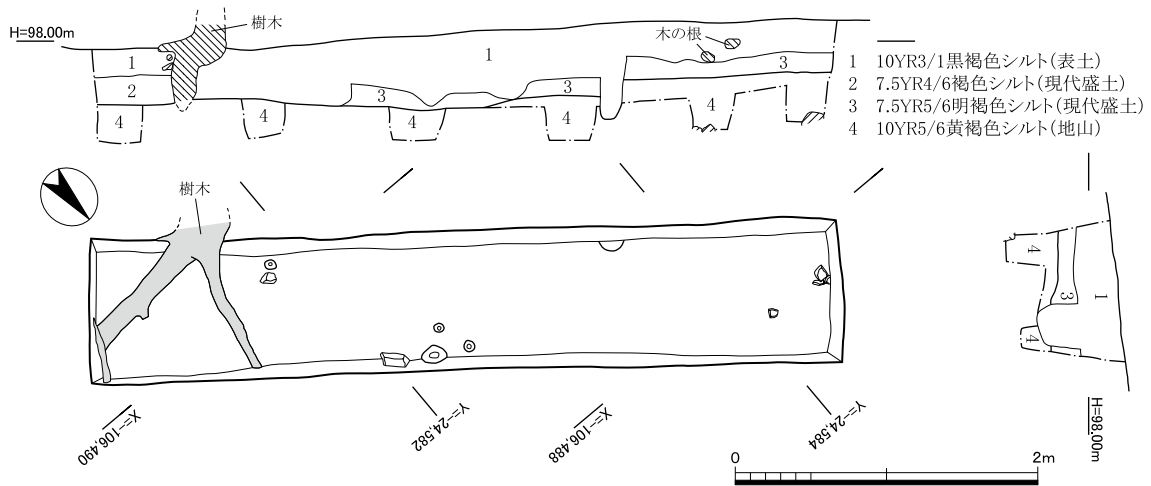


図14 5区遺構実測図 (1 : 50)

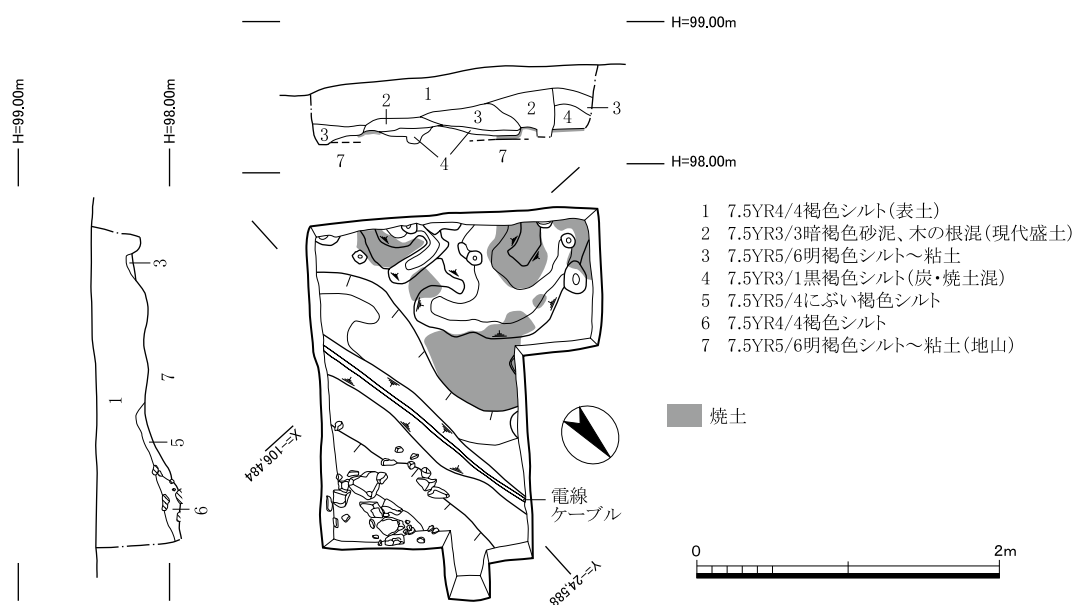


図15 6区遺構実測図 (1 : 50)

層)が厚さ約0.4m堆積し、その下は地山とみてよい明褐色シルト(10層)が確認できた。このため9層は、1・2区で確認した整地層Ⅰに該当することが判明した。なお、2・3区で地山が確認できたのはこの部分のみで、ここでは現地表から2.1m下で地山が確認できた。

灰白色粘土の上部では、明褐色シルト(3層)～明褐色シルト(7層)が堆積する。これらの厚さは約1.1mあり、2区と同じく整地層Ⅱとして把握できた。これらは南東側に低く傾斜しており、特に橙色シルト(5層)は北西側が厚く南東側に薄くなる状況が見られた。この橙色シルトは黄色味が強く、他よりも識別が容易であり、調査区の北西側には土壇状の高まりがあるため、そこから流れ込んだ層と判断できた。先述した黄褐色シルト質粘土(2層)は、これらの上部を整地するかたちで貼られており、整地層Ⅱの最上部に入れられた層と判断できる。

(4) 4区(図13、図版3)

金閣寺第1駐車場の西側に設置された便所の南東側に設定した調査区である。幅1.0mで長さ2.0mあり、調査面積は2㎡である。

この調査区では顕著な遺構は確認できなかった。地山は褐色シルト～粘土(図13の6層)であるが、西側が高く東側に低い。調査区内での地山の高低差は約0.15m西側が高い。地山上に堆積した層はすべて近代以後のものであった。地山直上の灰黄褐色砂泥(5層)は小礫が主体で炭や木の根が多く含まれる。それより0.2m上に堆積した褐色砂泥(3層)も同様に炭を多く含む。この2つの層からは瓦や陶磁器類が比較的多く出土しており、日常生活で使用したものをここに廃棄したことが想定できた。以外の明黄褐色シルト(2層)と明褐色砂泥(4層)は、地山の褐色シルト～粘土を主体とする層であった。

この4区は、西から東に傾斜する地形の変換点に当たっており、東側はかつて谷状の地形があったこと、これらを埋めて現在の生活面が形成されたことなどが判明した。さらに落込みの肩口には木の根や炭・礫とともに瓦や陶磁器、金属製品、銭貨などが廃棄されていた。銭貨は、5層から「一銭」・「十銭」、2層から「半銭」・「一円」が出土しており、整地時期が明治時代以降であることが確認できた。

(5) 5区(図14、図版3)

金閣寺第1駐車場の西側に設置された便所の南側に設定した調査区である。幅0.95mで長さ5.0mあり、調査面積は4.7㎡である。

この調査区では顕著な遺構は確認できなかった。地山は黄褐色シルト(図14の4層)であるが、さほど締まりがなく、上部に堆積した明褐色シルト(3層)との区別も判然としなかったため、全体を少し掘り下げた状態でようやく地山と確認した。最終的には、壁沿いを壺掘り状に断割りし、この認識で誤りないことを確認した。5区における地山面は、北西端が南東端よりも0.2m高い。

(6) 6区 (図15、図版4)

金閣寺第1駐車場の西側に設置された便所の南側に設定した調査区である。当初、幅1.0m、長さ2.0mで設定したが、府・市保護課の指導を受けて北東部を大幅に拡張した。最終的な調査面積は3.6㎡である。

この調査区では顕著な遺構は確認できなかったが、地山直上の焼土面と東側に落ち込む肩部を検出した。東側に落ちる肩部は直線的で、方位は南北方向である。東側の低い部分には石材が落ち込んでおり、この中には焼けた壁土も含まれていた。焼土面は部分的にしか残存していなかったが、焼土と炭が薄く堆積しており、火災によって旧地表が焼けた痕跡とみられた。

この調査区は地山の検出面が最も浅く、現地表下0.35m付近で検出した。また、南西壁面にみられた明褐色シルト～粘土 (図15の3層) は固く締まったシルトであり、その下には炭・焼土を含む黒褐色シルト (4層) が堆積する。土質からみて、この両層は火災後に堆積した比較的古い地層と判断できた。地山は明褐色シルト～粘土 (7層) であるが、焼土面を保護したため断割りが実施できず、部分的に確認するにとどまった。

(7) 7区 (図16・17、図版4・5)

金閣寺第1駐車場の西側に設置された便所の北西側に設定した調査区である。幅0.9mで長さ4.0mあり、調査面積は3.6㎡である。

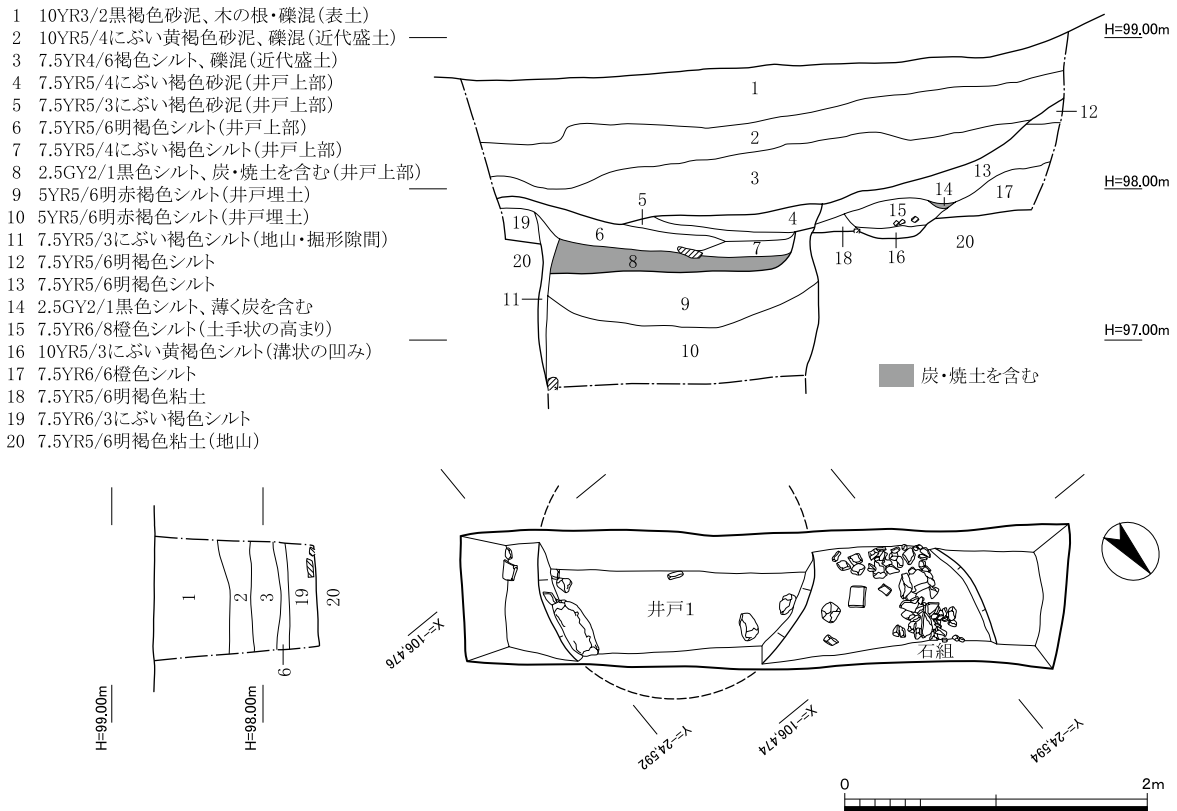


図16 7区遺構実測図 (1 : 50)

この調査区では中央やや南東寄りで円形の井戸（井戸1）を検出した。井戸1は掘形が円形を呈し、直径1.9mの石組井戸であったと推定される。石組に伴う石材はほとんど取り外されていたが、検出面から約1m下の東壁際で1石のみ原位置をとどめる状態で残存していた（図17）。井戸内は検出面から約1m下、現地表からすると約2m下まで掘り下げたが、底部には達しなかった。井戸内埋土である明赤褐色シルト（図16の10層）・明赤褐色シルト（9層）は、ともに丘陵を形成する比較的均質なシルト質粘土であり、選択・使用されたものとみられる。また、井戸埋土の上部には焼土・炭を含む黒色シルト（8層）が堆積していたが、この層は6区で検出した焼土層と同じもので、この井戸に入り込んだとみられる。その上にはにぶい褐色シルト（7層）～にぶい褐色砂泥（4層）までが順次堆積している。特に明褐色シルト（6層）は明褐色を呈し、一見すると地山と見誤るほど均質性が高い層で、東側から井戸を整地するかたちで丁寧に入れられていた。



図17 井戸1の石組石材（北西から）

井戸1の北西側では橙色シルト（15層）が土手状を呈する部分があり、この層を掘り下げたところ小規模な礫が積まれたような状況がみられた（図16では「石組」と表記）。南西壁に沿って礫を外したところ、底部が溝状を呈することが判明した。この結果、溝状に掘り窪めた内部に礫を積み、さらに上を土で盛った遺構が存在したことが想定でき、層位からみて井戸1に先行する遺構と判断できた。

井戸1の北西側は丘陵裾にあたるため、断面層序も東下りの傾斜がみられた。さらに南西壁のにぶい褐色シルト（19層）～明褐色シルト（12層）までは井戸1が掘られる前にすでに堆積していた層と判断できた。なお、現地表付近に堆積した褐色シルト（3層）、にぶい黄褐色砂泥（2層）、黒褐色砂泥（1層）は木の根・瓦・礫などを多く含む。この3層は厚さが0.95mあり、江戸時代になって盛られた層であることが想定できた。このことも7区の遺構面が深い原因となっている。

（8）8区（図18、図版6）

金閣寺第1駐車場の西側に設置された便所と北側の建物との間に設定した調査区である。幅0.8m、長さ4.5mで設定したが、府・市保護課による指導を受けて西端を一部拡張した。調査面積は4.1㎡である。

この調査区では西端で石組の遺構を検出した。この遺構は人頭大の比較的平坦な石材が、平坦面を上に向けて面を揃えるかたちで並べられていた。また、石材は上下方向には積まれておらず、石

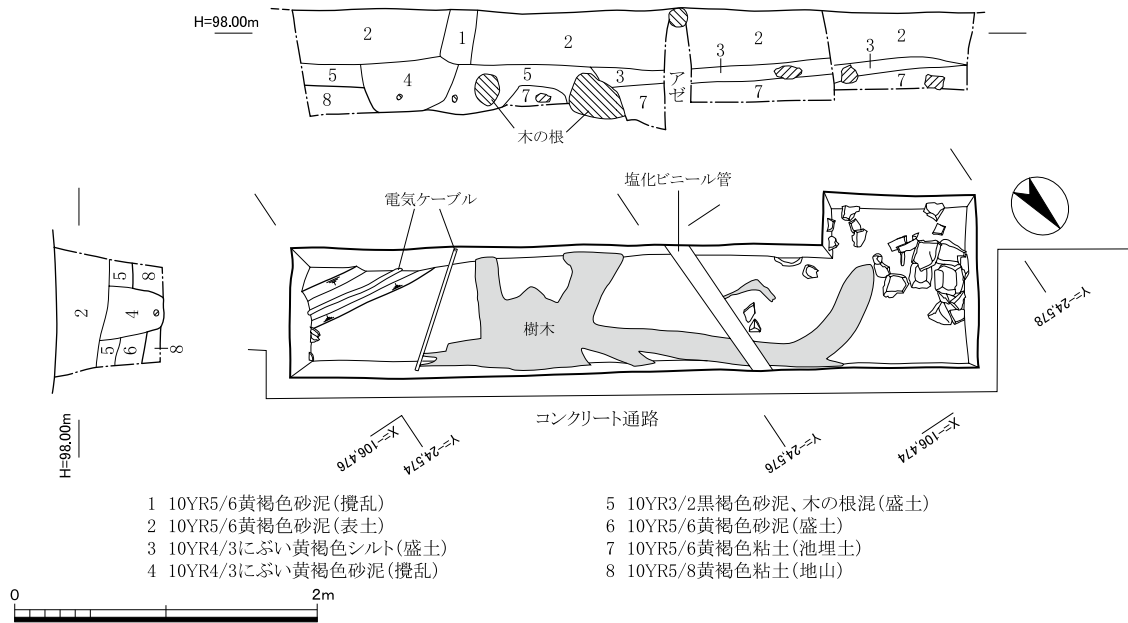


図18 8区遺構実測図(1:50)

と石の間には瓦が含まれていた。この調査区の北側には現在も小規模な池が存在しており、かつてはさらに南側にも池が広がっていた可能性がある。この8区で検出した石組遺構は、かつて池が南側に及んでいた際の護岸の一部とみることもできる。石組周囲の土層は黄褐色粘土(図18の7層)であるが、この層は粘性が強く、瓦が多く出土した。

この調査区における地山は黄褐色粘土(8層)で、4~7区で確認された層と同じであった。東端では現地表下0.5mで地山を確認したが、西側に行くほど深くなり、中央以西では湧水が激しいこともあって堆積位置は確認できなかった。

3. 遺物

遺物整理箱に13箱出土した。内訳は土器類・瓦類・銭貨・金属製品・石製品・壁土・木製品などである。出土遺物の約7割は瓦類が占める。次いで土器類が多く、その他の遺物は少ない。以下、項目ごとに解説する。出土土器の時期は、平安京・京都I期~XIV期の編年案に準拠する¹⁾。

(1) 土器類(図19、図版7)

平安時代から江戸時代までであるが、量は乏しい。種類としては、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、国産陶器、国産磁器、施釉陶器、焼締陶器、軟質施釉陶器などがある。

平安時代前期から後期の土器は主に1~3区の整地層から出土しているが、量は少なく、いずれも小片である。鎌倉・室町時代の土器は1~3区の整地層と7区井戸1から少量出土している。井戸1から出土した土器は15世紀後半頃が下限で、木炭・焼けた壁土が含まれることから、応仁の乱による火災との関連性が想定される。江戸時代以降の土器は各調査区から出土しているが、これ

らも量は少ない。また、今回は小片が大多数を占めるため、断面形を図示することに重点を置き、縮尺も2分の1を採用した。以下、1区(1~6)、2区(7・8)、7区(9~25)から出土した遺物を、年代順に解説する。

1区出土土器(1~6) 1は土師器皿Ac。口縁端部は短く内側に立ち上がり終わる。端部の形状から、京都V期に属し、実年代は12世紀後半頃とみられる。1区整地層I(13層)出土。2は土師器皿N。外上方に延びる口縁部をもつが、口径は復元できない。外面には二段ナデの痕跡がある。京都IV期に属し、11世紀頃とみられる。1区整地層I(12層)出土。3は緑釉陶器椀。口径10cmに復元できる。体部は浅く、口縁端部は緩く外反して終わる。内・外面ともヨコ方向のナデで仕上げる。ヘラミガキは施されない。緑釉は光沢があり美しい。京都III期以降に属し、10世紀代以降とみられる。1区整地層I(12層)出土。4は黒色土器椀。底部の小片である。内・外面とも黒色に見えるが、器表は磨滅が著しい。1区整地層I(12層)出土。5は須恵器壺。底部から体部下半が残存する。底部径7.5cmに復元できる。内・外面はヨコ方向のナデ、底部はヘラ切りの後、平坦に調整する。京都II期に属し、9世紀頃とみられる。1区整地層I(11層)出土。6は土師器皿S。深めの体部をもつ。口縁端部は欠損する。内・外面ともヨコ方向のナデで仕上げたとみられるが、磨滅が著しい。白色系の胎土をもつ。京都VI~VII期に属し、13~14世紀代とみられる。1区道路状の高まり(9層)と灰白色粘土(10層)の境界から出土。

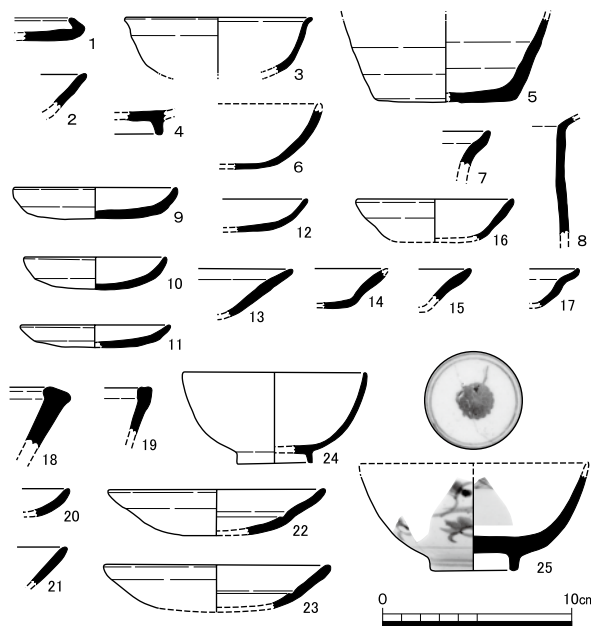


図19 土器実測図(1:4)

表3 12次調査 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
平安時代前期~後期	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器	0箱	土師器3点、黒色土器1点、須恵器2点、緑釉陶器1点	0箱	0箱
鎌倉・室町時代	土師器、瓦器、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、石製品、鉄釘、壁土、漆器椀、炭	5箱	土師器12点、瓦器1点、軒丸瓦3点、軒平瓦1点、熨斗瓦1点、平瓦1点、鉄釘7点、石製品1点、壁土10点	3箱	0箱
江戸時代	土師器、国産陶器、国産磁器、施釉陶器、焼締陶器、軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、道具瓦、銭貨	10箱	土師器3点、国産磁器2点、軒丸瓦2点、軒平(棧)瓦6点、銭貨1点	10箱	0箱
合計		15箱	58点(2箱)	13箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、掲載遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

2区出土土器（7・8） 7は須恵器壺。口縁端部は厚みがあり、内弯して終わる。器形は壺とみられる。京都VI期に属し、13世紀頃とみられる。2区整地層I（12層）出土。8は土師器甕。体部上半の破片で、口縁部を欠く。頸部の屈曲角度からみて、先端は急角度に折れていたとみられる。外面には汚れ分が付着するが、煤とは断定できない。内面に内容物の付着はない。体部径30cm程度に復元できるが、不確実なため、断面形のみを図示した。2区整地層II（10層）出土。

7区出土土器（9～25） 9～11は土師器皿N。9は体部の約半分が残存する。器表は磨滅が著しく、調整は観察できない。口径8.5cm、器高1.7cmある。胎土の色調は白色系に属する。端部の特徴から京都VI期に属し、13世紀前半頃とみられる。10は4分の1が残存する。口径7.5cm、器高1.7cmに復元できるが、口縁端部は残存状態が悪い。胎土の色調は白色系に属する。11は口径8cm、器高1.2cmに復元できるが、器表の残存状態はさらに悪い。胎土の色調は赤色系に属する。10・11は京都VII期に属し、14世紀頃とみられる。3点とも7区井戸1内部（10層）出土。12は土師器皿N。器表は磨滅が著しく、調整手法はまったく観察できない。胎土の色調は赤色系に属する。京都VI期に属し、13世紀前半頃とみられる。残存状態は悪いが、堆積層の年代を推定する資料として貴重である。7区西端（17層）出土。13は土師器皿S。大皿の口縁部であるが、小片のため口径は復元できず、傾きも正確さを欠く。胎土の色調は白色系に属する。京都IX～X期に属し、15～16世紀頃とみられる。7区井戸1内部（10層）出土。14・15は土師器皿N。ともに器表は磨滅が著しい。胎土の色調は赤色系を呈する。京都VIII～X期に属し、15～16世紀頃とみられる。7区井戸1内部（10層）出土。16は土師器皿S。体部は4分の1程度残存し、口径8.4cmに復元できる。器表は磨滅が著しい。底部を平坦とみて皿Sの小皿と推定できる。胎土の色調は白色系に属する。京都VIII期に属し、15世紀頃とみられる。7区井戸1内部（10層）出土。17は土師器皿Sh。体部の弯曲が強く、皿Sh（ヘソ皿）とみられる。胎土の色調は白色系に属する。京都VIII～IX期に属す。7区井戸1内部（10層）出土。18は土師器盤。口縁端部は肥厚し、内側に突出して終わる。内・外面はヨコ方向のナデで仕上げる。京都VI期に属し、13世紀頃とみられる。7区井戸1内部（10層）出土。19は瓦器鍋。口縁端部は肥厚気味に終わる。内・外面はヨコ方向のナデで仕上げる。別の破片には端部を片口に加工したのがある。京都VII期に属し、14世紀頃とみられる。7区井戸1内部（10層）出土。20は土師器皿Sb。小皿の口縁部で、端部は内弯気味に終わる。京都XII期に属し、17世紀後半頃とみられる。7区井戸1を整地した（6層）から出土。21は土師器皿N。直線的に外上方に延びる口縁部をもつ。器表の保存状態は比較的良好で、ナデとオサエの痕跡が観察できる。京都VII～VIII期に属し、14～15世紀頃とみられる。7区井戸1を整地した（6層）から出土。22は土師器皿S。口径11.5cm、器高2.4cm以上あり、底部は比較的丸く復元できる。内面は体部と底部の境に沈線がめぐる。口縁部はヨコ方向にナデで仕上げる。京都XII～XIII期で17～18世紀頃とみられる。7区井戸1を整地した（6層）から出土。23は土師器皿S。口縁部・体部の破片で、口径12cm、器高2.2cm以上あり、底部は比較的丸く復元できる。内面は体部と底部の境に沈線がめぐる。口縁部のみヨコ方向のナデで仕上げる。京都XII期に属し、17・18世紀頃とみられる。7区近世盛土（3層）から出土。24は白磁椀。体部は薄手で、端部は丁寧に処理している。残存部分には文様は見られない。全

面に白磁釉がかかる。高台端部のみ露胎である。口径9.8cm、器高4.9cm、底部径2.0cmに復元できる。7区近世盛土（3層）から出土。25は染付椀。口縁端部を欠く。白磁の上に呉須で草本の文様を描く。推定口径12cm、高台径2.6cmある。内面は見込みに二重の圏線、中央に草本を描き、口縁部下にも斜格子の文様がある。17世紀代とみられる。7区近世盛土（3層）から出土。

（2）瓦類（図20、図版8）

鎌倉・室町時代に属するもの（瓦1～4、13・14）と江戸時代以降に属するもの（瓦5～12）がある。瓦の種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、鬼瓦、道具瓦で、江戸時代以降では軒棧瓦、棧瓦などが加わる。全体では丸瓦・平瓦が大半を占める。3区（瓦3）、7区（瓦1・5～13）、8区（瓦2・4・14）から出土した軒丸瓦、軒平瓦、熨斗瓦、平瓦について解説する。

瓦1は巴文軒丸瓦。右巻き三巴文を配する。頭部、尾部は離れる。文様上部は丸く盛り上がる。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に溝を掘り、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面下半は横ナデ、裏面はナデを施す。胎土は砂粒を多く含む。色調は灰色で表面は黒色を呈し、やや軟質である。7区井戸1上部の炭・焼土を含む（8層）から出土。

瓦2は巴文軒丸瓦。右巻き三巴文を配する。頭部は離れる。尾部はやや長く、圏線と接しない。文様上部は丸く盛り上がる。外区は圏線が巡り、珠文が密に巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に溝を彫り丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面下半は横ケズリ、裏面は不定方向のナデを施す。胎土は砂粒を多く含む。色調は黄灰色で表面が黒色を呈し、やや軟質である。8区西端（3層）出土。

瓦3は巴文軒丸瓦。左巻き巴文を配する。頭部は離れる。尾部はやや長く、尾に接する。文様上部は丸く盛り上がる。外区は圏線が巡り、珠文が密に巡る。周縁は素文である。瓦当部の成形は不明。瓦当部側面下半は横ナデ、裏面は不定方向のナデを施す。胎土は砂粒を多く含む。色調は黄灰色で、表面は黒色を呈し、軟質である。3区中央部の樹木痕跡出土。

瓦4は唐草文軒平瓦。中心飾りは半截菊花文で、唐草文は両側に五回反転する。主葉は離れ、緩やかに反転し、先端は巻き込む。外区に圏線が巡る。周縁は素文である。段顎。瓦当部の成形は不明。瓦当部上縁は横ケズリを施し、下縁も横ケズリを施す。顎部下面・裏面は横ナデを施す。顎と平瓦の境に凹型台の痕跡が残る。胎土は砂粒を少量含む。色調は暗灰色で、硬質である。相国寺創建瓦（1382～1394）と同範である²⁾。8区西端（3層）出土。

瓦5は巴文軒丸瓦。右巻き巴文を配する。頭部は離れ、尾部も離れる。文様上部は丸く盛り上がる。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上端に丸瓦を当てて粘土を付加して接合する。瓦当部側面上半は横ナデ、裏面もナデを施す。丸瓦凸面は縦ナデ、凹面は布目である。胎土は砂粒を含む。色調は灰白色で表面は黒色を呈し硬質である。7区西端（1層）出土。

瓦6は巴文軒丸瓦。右巻き巴文を配する。頭部は離れ、尾部は尾に接する。文様上部は丸く盛り上がる。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上端に丸瓦を当てて粘土

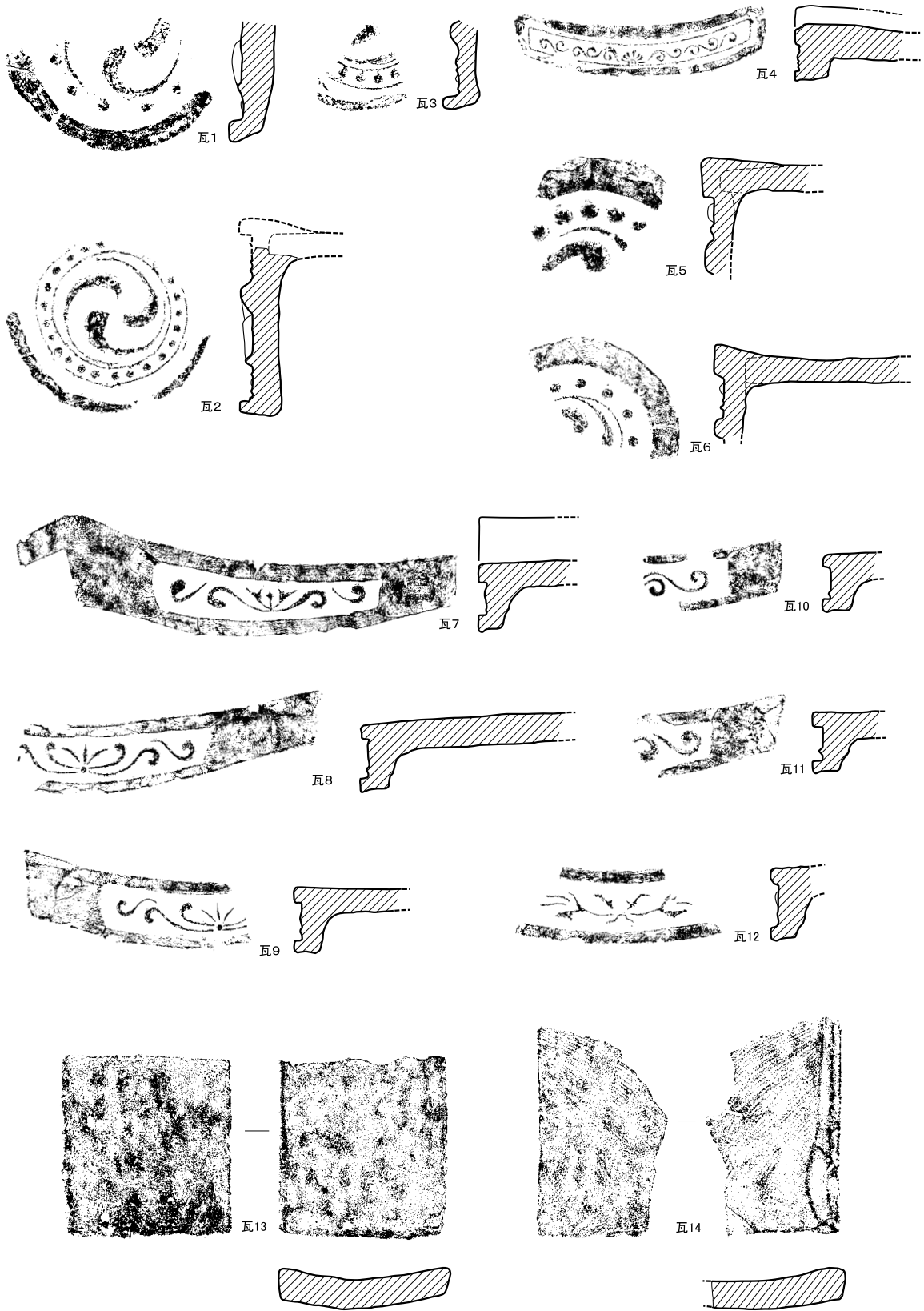


图20 瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

を付加して接合する。瓦当部側面上半はナデ、裏面もナデを施す。丸瓦凸面は縦ヘラミガキ、凹面は布目、側面はタテケズリを施す。胎土は砂粒を少量含む。色調は灰色で表面は黒色を呈し硬質である。7区西端（1層）出土。

瓦7は唐草文軒平棧瓦。中心飾りは三葉文で、唐草文は両側に二回反転する。主葉は離れ、緩やかに反転し、先端は巻き込む。周縁は素文である。段顎。瓦当部成形は不明である。左側面を折り曲げ棧とする。瓦当部凹面は横ナデ、顎部下面・裏面も横ナデを施す。瓦当面上・下縁は削りで面取りする。平瓦凹面はナデ後ミガキ、凹面は粗い横ナデで側面は縦ナデを施す。胎土は砂粒を含む。色調は黄灰色で、表面は燻して黒灰色を呈し硬質である。7区東端（3層）出土。

瓦8は唐草文軒平瓦。中心飾りは三葉文で、唐草文は両側に二回反転する。主葉は離れ、緩やかに反転し、先端は巻き込む。周縁は素文である。周縁右端をケズリで面取りする。瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部を貼り付ける。平瓦凸面にヘラカキ目を施す。瓦当部凹面は横ナデ、顎部下面・裏面も横ナデを施す。瓦当面上・下縁は削りで面取りする。平瓦凹面はナデ後ミガキ、凹面は粗い横ナデで側面は縦ナデを施す。瓦当面にキラコが付着する。胎土は砂粒を含む。色調は灰白色、表面は燻して黒灰色を呈し硬質である。7区（3層）出土。

瓦9は唐草文軒平瓦。中心飾りは三葉文で、唐草文は両側に三回反転する。主葉は離れ、緩やかに反転し、先端は巻き込む。周縁は素文である。周縁左右端をケズリで面取りする。瓦当部の成形は、平瓦凸面に顎部を貼り付ける。平瓦凸面にヘラカキ目を施す。瓦当部凹面は横ナデを施し、顎部下面・裏面も横ナデを施す。平瓦凹面はナデ、凹面も粗い縦ナデ、側面は縦ナデを施す。胎土は砂粒を含む。色調は黄灰色で表面は燻して黒灰色を呈し硬質である。7区（3層）出土。

瓦10は唐草文軒平瓦。唐草文は両側に反転する。主葉は緩やかに反転し、先端は巻き込む。周縁は素文である。瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部を貼り付ける。平瓦凸面にヘラカキ目を施す。瓦当部凹面は横ナデを施し、顎部下面・裏面も横ナデを施す。瓦当面上縁は削りで面取りを施す。胎土は砂粒を含み、色調は灰色で表面は燻して黒灰色を呈し硬質である。7区（3層）出土。

瓦11は唐草文軒平瓦。唐草文は両側に展開する。主葉は離れ、緩やかに反転し、先端は巻き込む。周縁は素文である。周縁右側に「平」のスタンプがあり、右端をケズリで面取りする。段顎。瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部を貼り付ける。平瓦凸面にヘラカキ目を施す。瓦当部凹面は横ナデ、顎部下面・裏面も横ナデを施す。顎下縁はケズリで面取りを施す。胎土は微砂を含む。色調は灰色で表面は黒色を呈し硬質である。7区東端（3層）出土。

瓦12は唐草文軒平瓦。中心飾りは花文で、唐草文は両側に展開する。主葉は連続して緩く反転し、子葉が付く。周縁は素文である。瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部を貼り付ける。瓦当部凹面は横ナデで、顎部下面・裏面はヨコナデを施す。胎土は砂粒を含む。色調は灰色で表面は燻して黒灰色を呈し硬質である。

瓦13は熨斗瓦。現存長12.5cm、幅11.5cm、厚さ2.0cmある。凸面はナデ・オサエ、凹面には布目が残る。側面・端面はヘラケズリで整える。7区井戸1西側の地山直上（18層に相当）出土。

瓦14は平瓦。現存長14.2cm、現存幅8.9cm、厚さ2.0cmある。凸面・凹面とも糸切り痕跡をとど

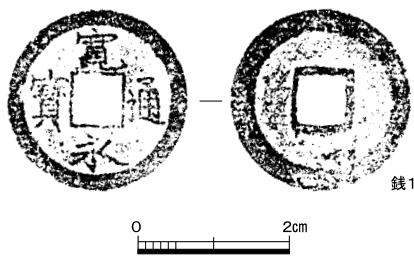


図21 銭貨拓影（1：1）

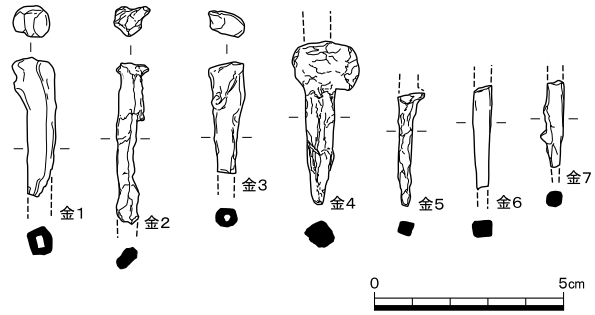


図22 鉄釘実測図（1：2）

め、側面・端面はヘラケズリで整える。平瓦として報告するが、熨斗瓦として使用された可能性もある。8区西端（7層）出土。

（3）銭貨・金属製品（図21・22、図版9）

江戸時代の銭貨として、7区（3層）から「寛永通寶」が1枚出土した（銭1）。直径2.44cmで、重量は2.06gある。裏面は無文。いわゆる新寛永銭で、元文元年（1736）以降の製品とみられる。この他、明治時代から昭和時代の銭貨として4区（1・2層）から「半銭 明治十九年」1枚、（2層）から「一円 昭和三十六年」1枚、（5層）から「一銭 大正七年」1枚、「十銭 大正十一年」1枚、「十銭 昭和二年」1枚が出土しており、それぞれ調査区の堆積年代を知る資料である。

金属製品は釘がある。

釘は1・3・7区から合計7点出土している。1区では道路状の高まり（9層）から1点（金1）、断割り時に（11層）から1点（金6）出土している。金1は幅と厚みがあり、頭部は折り曲げて処理している。金6は頭部と先端が欠損する。3区では黄褐色シルト質粘土（2層）から1点（金7）出土している。金7は頭部と先端が欠損する。7区では井戸1上部の炭・焼土を含む（8層）から2点（金2・5）、井戸1内部（10層）から1点（金4）、北壁沿いの地山直上（18層に相当）から1点（金3）出土している。金2・3は先端が欠損する。金4は頭部を欠損する。身の中位に金具が巻き付いた状態で残存する。金5は頭部が欠損し、身は扁平である。

（4）石製品（図23、図版9）

表面に線刻をもつ石材を7区の排土中で確認している（石1）。長さ16.5cm、幅12cm、厚さ9.1cmある。材質は砂岩に似るが多孔質であるため、火山岩系の石材とみられる。平坦な一面に弧線が5本以上線刻されており、裏面にも一条、線刻されている。不動堂の内部で確認されている石

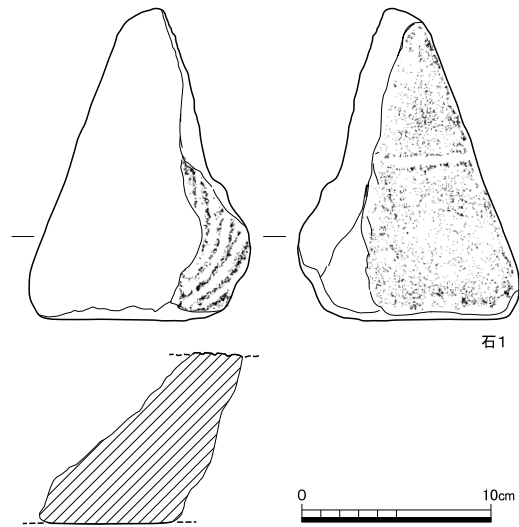


図23 石材実測図（1：4）

材に類似する。不動堂は7区上方に位置するため、上方から転落したものであろう³⁾。

(5) 壁土 (図版9)

6・7区から合計10点出土した。6区では東側への落込みから8点出土した。被熱の程度は弱く、変色具合は赤色・黒色にとどまる。写真左上の1点は平坦な面をもつが、これが上塗り面は明らかにできない。左下の大きい破片は長さ8.5cm、幅4.5cmあり、指ナデの痕跡が顕著である。直角に剥離した痕跡があるため、木舞からはずれた壁土の一部とみられる。灰色で須恵質を呈する。

7区井戸1上部の炭・焼土を含む(8層)から2点出土している。還元色に変色し、堅く変質するため、強い熱を受けたとみられる。

(6) 木製品

漆器製品の朱色の漆膜が出土している。椀あるいは皿とみられるが木質は完全に腐植しており、図示できない。器表面に塗られた漆膜が残存したものである。7区井戸1内部(10層)出土。

4. ま と め

今回の調査地である金閣寺境内の東半部は調査事例が乏しく、遺構・遺物については従来から不明な部分が多かった。今回の調査によって、黒門西側便所の周辺に設置した1～3区と、金閣寺第1駐車場西側便所周辺に設置した4～8区では、遺構の様相が大きく異なることが明らかとなった。以下、要点をまとめておく。

金閣寺第1駐車場西側便所周辺に設置した調査区では、6区で焼土面を検出し周囲から壁土が出土したことから、かつてこの場所に建物が存在し、火災によって焼失したことが推定できた。さらには、7区で検出した井戸1上部には炭や焼土が含まれおり、井戸埋没後に火災が発生したことが想定できた。井戸1埋土からは15世紀後半を下限とする土器が含まれており、6区で検出した火災痕跡は応仁の乱で鹿苑寺が焼亡した際のものである可能性が指摘できる。

次に、7区で井戸1を検出したことから、現在の山際が比較的古い時代に削平されたことが明らかとなった。そうすると、丘陵裾には建物(6区)と井戸(7区)が配置されていたことになり、現在の不動堂と独鈷水に類似した施設が丘陵裾にも存在したことが想定できるようになった。井戸1内部の埋土は比較的混じりのないシルト層が入れられており、埋め戻しに際しては清浄さを意識したように判断できた。このことも建物・井戸が信仰の対象となるような施設であったことをうかがわせる要素といえる。

井戸1埋土から出土した土器には、応仁の乱が起こった15世紀後半よりも古いものが含まれていた(図19の9～12・18・19)。これらは西園寺邸(13世紀前半～)や足利義満による北山殿(14世紀末～)にまで遡るものであり、実際の遺構としても、7区井戸1北西側で石を詰めた溝状の遺構(図16で「石組」と表記)があり、層位的にみて井戸1に先行するものであった。また西端の

(17層)からは、西園寺邸の時期に該当する土師器片(図19の12)も出土しており、鹿苑寺造営以前の遺構・遺物として注目できる。

黒門の西側に設定した1・2・3区は、整地層が厚く堆積しており、4区～8区の様相とは大いに異なるものであった。両者の境界については、4区で東に下る肩部を検出し、金閣寺第1駐車場に至る北東方向の通路付近を境に、それより南東側は地形が低かったことは確実にみられる。2003年8月から10月にかけて、金閣寺総門の北東部、築地で囲われた一角を調査したが、この時も厚い整地層の存在が確認されており、西園寺邸や北山殿の時期に造成されたことが報告されている。1～3区はこうした様相に類似するものであったが、1～3区の整地がいつ、いかなる目的で実施されたものか、今回の調査では明確な所見は得られなかった。しかし、整地の状態は大規模であることから、西園寺邸か、北山殿の造成に伴う整地である可能性が高いといえる。なお3区の北西には方形の高まりがあり、築山や建物基壇が想定されてきたが、今回の所見からすると、厚さ約2mにわたる整地層の上に高まりが築かれたことは確実にいえる。

金閣寺が所蔵する『北山鹿苑寺絵図』(寛政二年作、1790)には黒門から不動堂に至る道路が二筋描かれており、このうち短い方の道路は1区付近を通過していたとみられる。今回検出した道路状の高まりは、北東側が下がることや上部に樹木痕跡があることから、絵図に描かれた道路の遺構と考えられるが、出土遺物から江戸時代以降の盛土であることを積極的に証明することはできなかった。

以上、今回は小面積の調査であったが、北西側と南東側で遺構の様相を異にすることが明白となった。とくに南東部の所見は、調査事例が乏しかった境内東半の様子を明らかにした点で意義深いものとなった。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年。なお、「平安京Ⅰ～Ⅴ期」「京都Ⅵ～ⅩⅣ期」を「京都Ⅰ～ⅩⅣ期」で統一した。

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080～90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580～90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃										
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV										
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

- 2) 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所 2000年 P146
- 3) 鈴木久男「不動堂石室の文字」『鹿苑寺と西園寺』 思文閣出版 2004年
- 4) 高橋 潔『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003 - 6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年

第3章 13次調査

1. 経 過

今回の調査は、建物の設計と位置が確定されたことから、その箇所で実施した。

調査は2013年8月1日から前年調査の2・3区の東側に設定し、前年の調査成果を踏まえて室町時代整地層の上面と下面の2面の調査を行うことになった。

第1面は、室町時代から江戸時代の遺構面で、顕著な遺構が検出されなかった。第2面は、第1面から約1m掘り下げた灰白色粘土層の上面とした。この面でも遺構が検出されなかった。この整地層の時期・性格については前年の調査でも確定することができなかったため、整地層の時期と

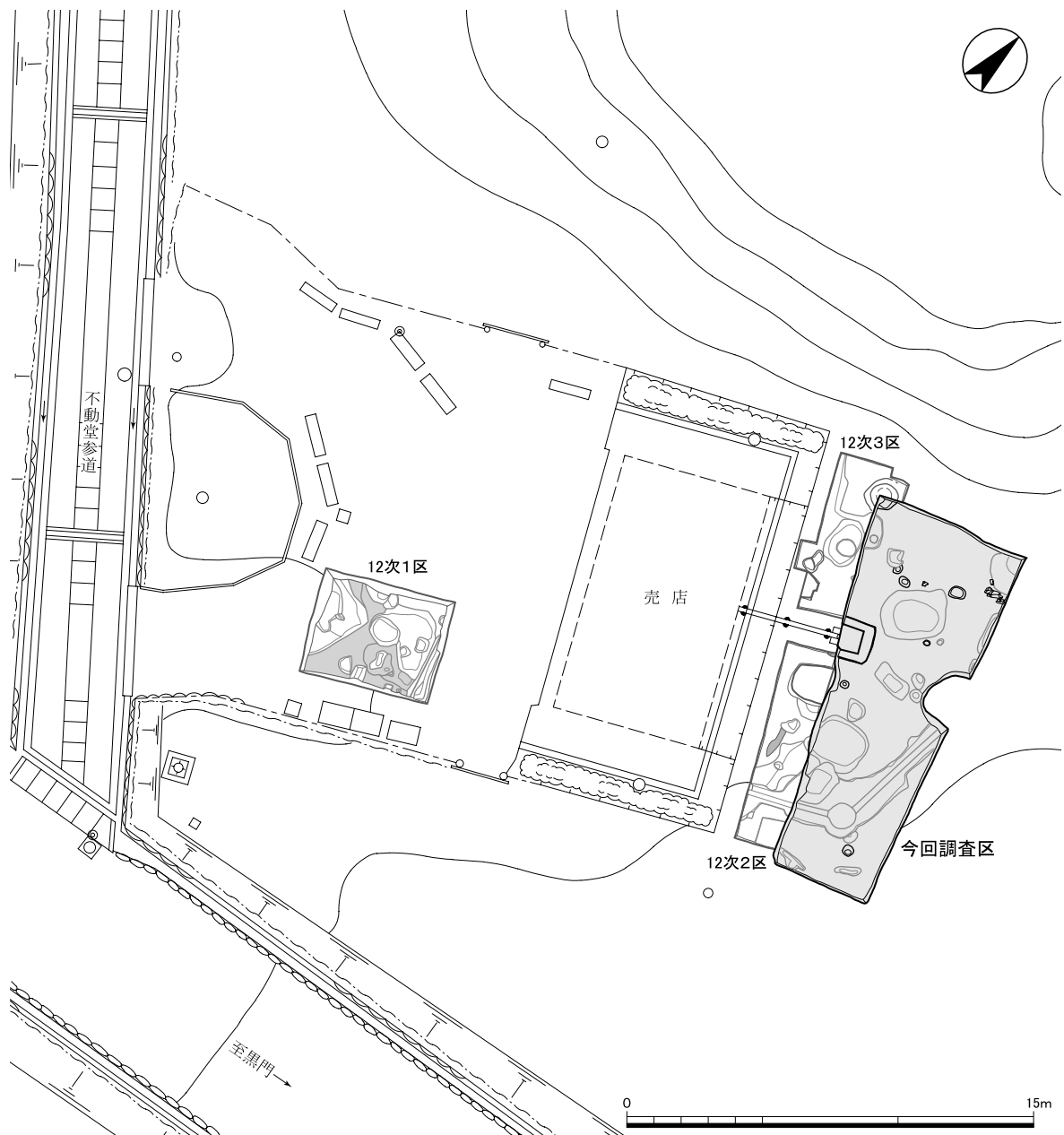


図24 13次調査区配置図（1：250）



図25 13次調査 調査前全景（北から）



図26 13次調査 埋め戻し作業風景（北から）

目的を明らかにすること、地山および下層遺構の状況を確認することを目的として、断割り調査を行った。その結果、地表下1.6m（標高94.9m）の地山面で平安時代の柱穴・ピット、土坑、溝、小溝などが検出された。その間の整地層は約0.6mの厚さがあり、平安時代から鎌倉時代の遺物が出土した。調査区の北と南で地山面の高低差約0.4mあった。なお、検出した遺構は時代を確定するため、半分のみ掘り下げ、遺物の採集につとめた。平面図、断面図など実測図作成と写真撮影による記録作業を行った後、遺構・整地面の保護のため砂で養生し、土嚢を置いて残土で埋め戻し、9月7日に調査を終了した。

2. 遺 構

（1）層序（図27）

調査地は、東側と南側に緩やかに下がる傾斜地である。層序は表土層・盛土の下に、近世以降の整地層（1層、黒褐色砂泥）が厚さ約0.2m、整地層Ⅱ（2～5層、褐色砂泥・灰褐色砂泥・褐色泥砂・明赤褐色砂泥など）が厚さ約1m、整地層Ⅰ（6～8層、灰白色粘土・褐色粘質土・明黄褐色粘土など）が厚さ約0.6m、にぶい黄褐色泥砂（9層）が厚さ約0.1mあり、地山（13層、橙色粘質土）となる。

整地層Ⅱは出土遺物から金閣寺期の造成に伴うものと思われる。整地層Ⅰの最上層である6層の上面は南西方向に下がり、調査区内での高低差0.4mある。出土遺物から平安時代後期から鎌倉

表4 13次調査 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	溝、土坑、ピット	
鎌倉時代	整地層Ⅰ	
室町時代	整地層Ⅱ	
江戸時代	土坑	

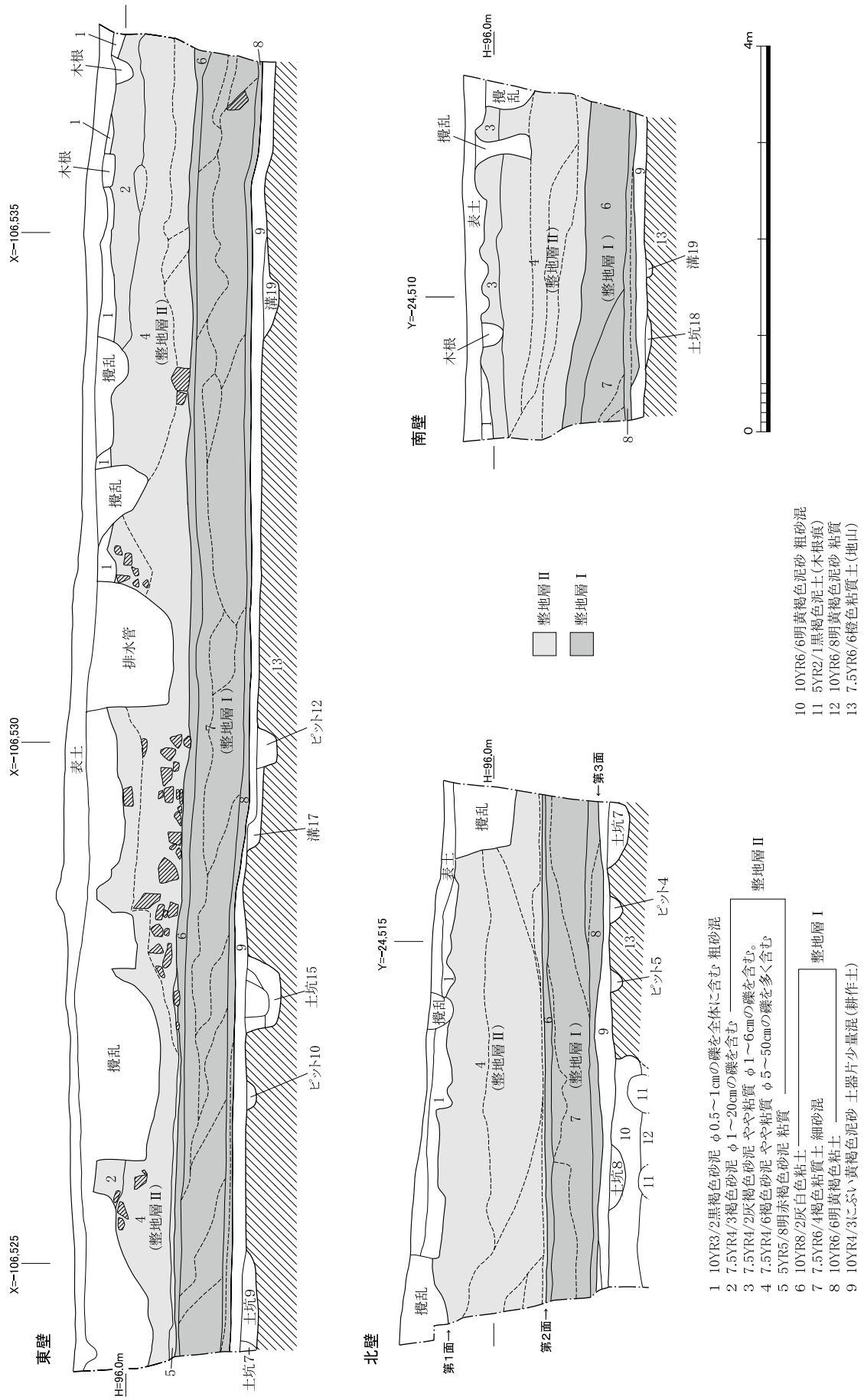


図27 調査区北壁・東壁・南壁断面図 (1:60)

時代前期の整地層と思われる。9層は堆積状況や土質から耕作土と思われ、出土遺物から平安時代後期と推定される。地山も北と南では40cmの高低差がある。なお、整地層Ⅱの上面を第1面。整地層Ⅰの上面を第2面、地山の上面を第3面とした。

(2) 遺構 (図28～30)

遺構は、断割りを含み3面の調査を行い、平安時代から江戸時代の土坑、溝、ピット、整地層などを検出した。

第1面 (図28)

表土および江戸時代から近代の盛土を掘り下げた、室町時代の整地層Ⅱの上面である。この面で江戸時代の土坑と木根痕などを検出した。

土坑1 調査区北側で検出した。一辺が0.4～0.6mの方形で、深さ約0.2mである。埋土は炭混

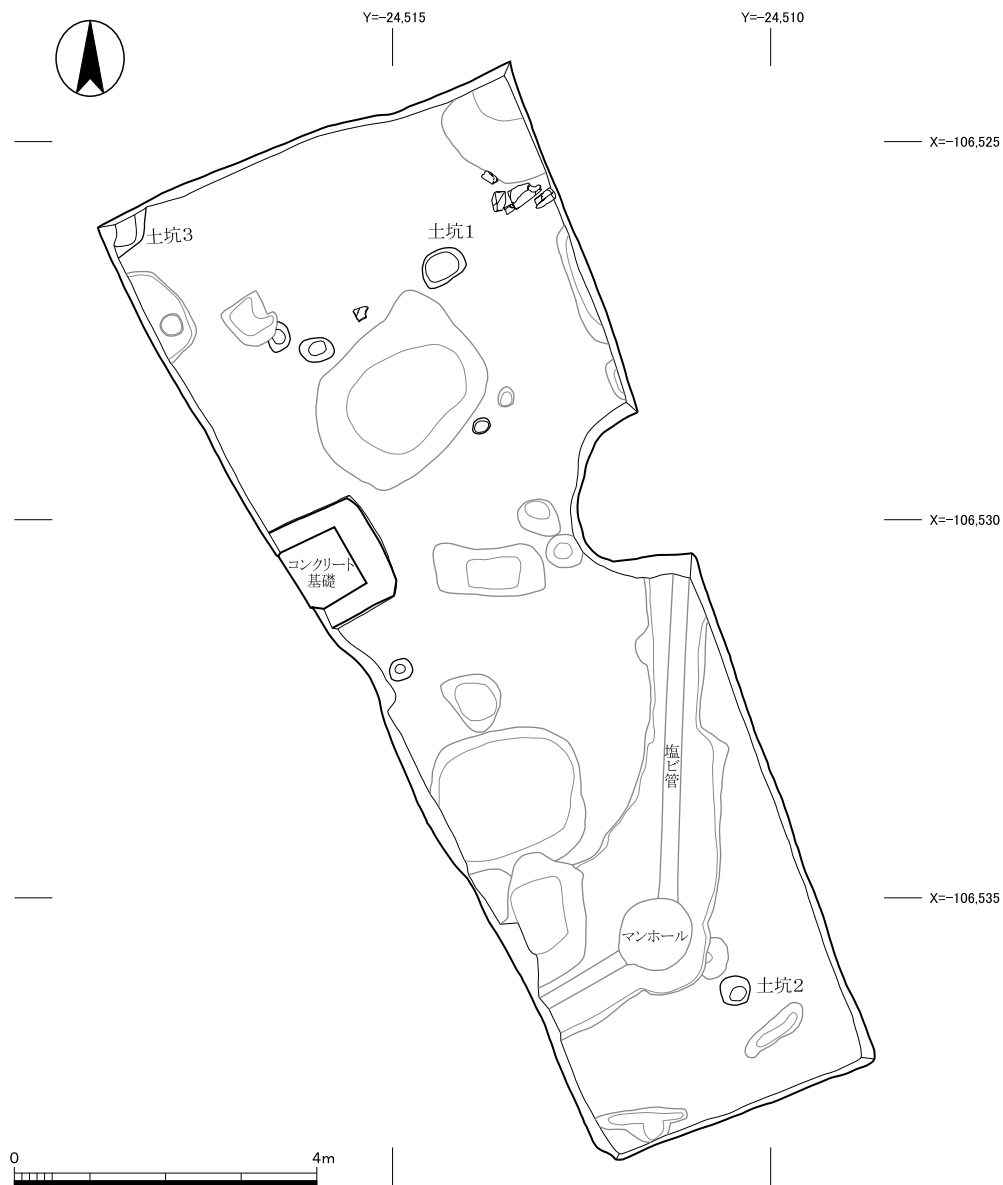


図28 第1面遺構平面図 (1:100)

じりである。

土坑2 調査区南側で検出した。一辺が0.4mの方形で、深さ約0.2mである。埋土は炭混じりである。

第2面 (図29)

整地層Ⅱを掘り下げた、平安時代から鎌倉時代の整地層Ⅰの上面である。この面では遺構は検出されなかった。

整地層Ⅱ 検出範囲は調査区の全域で確認した。厚さ1～1.2mあり、調査区中央部の東西方向に0.2～0.6m大の石が集中しており、意図的に置かれた可能性がある。

第3面 (図30)

北・東・南壁沿いに5箇所トレンチ(断割り1～5)を設けて整地層Ⅰの断割りをを行い、北西側以外で地山を検出した。この面で平安時代中期から後期の溝、土坑、ピットなどを検出した。検出

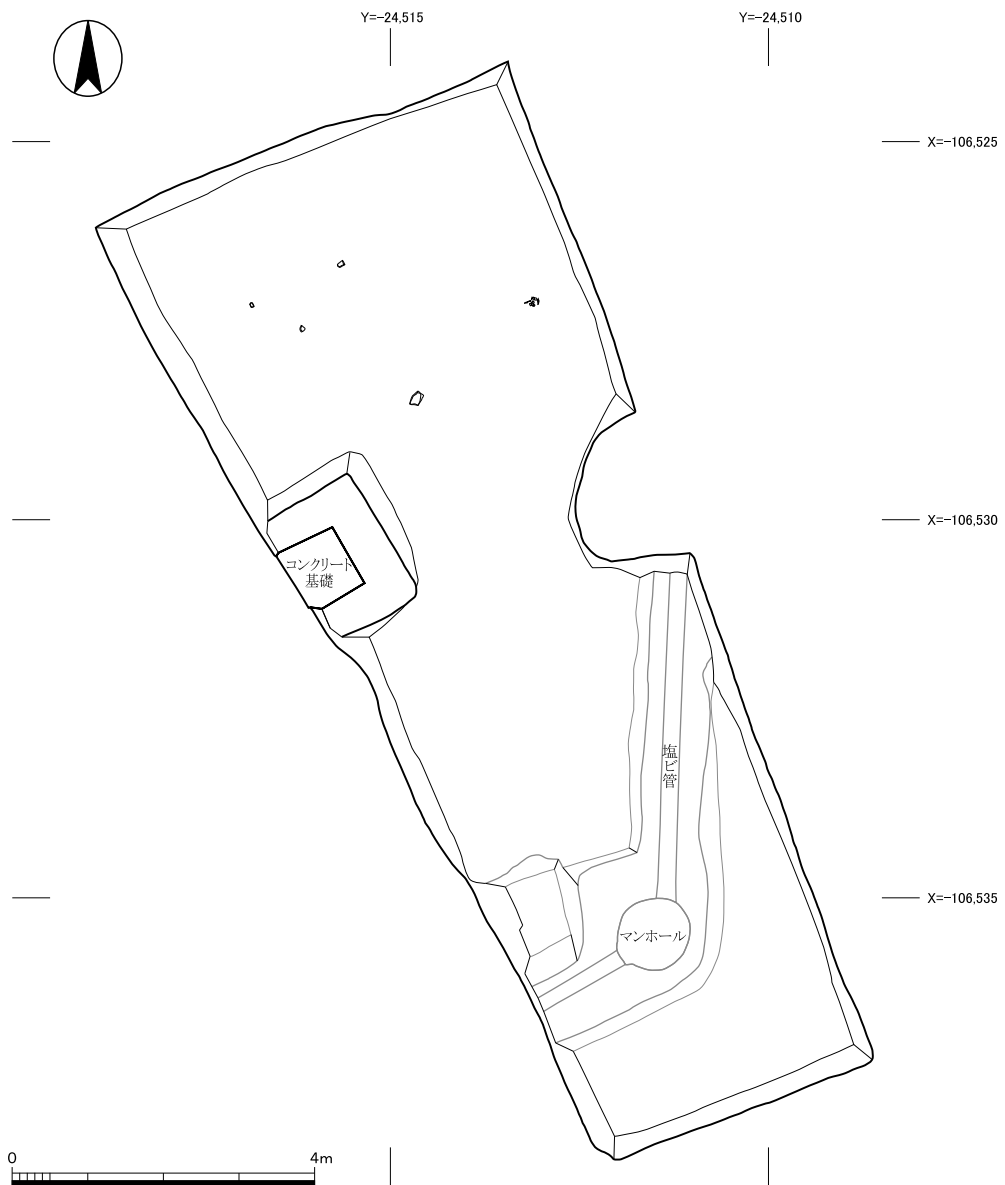


図29 第2面遺構平面図 (1:100)

した遺構は、埋土の相違から2時期に分かれる。平安時代後期に属するのは溝3、ピット4～6、土坑7・8、平安時代中期に属するのはピット10～13、溝17・19、土坑9・14～16・18である。

整地層 I 0.5～0.6mの厚さがあり、上面は灰白色粘土（6層）で、北側は平坦で0.05m程の厚さで薄く貼られている。南側は南西に向かって傾斜し0.4mの厚さがある。下面にも0.05～0.1mの厚さで明黄褐色粘土（8層）が貼られている。この間には0.4～0.6mの厚さで北側から南側へ向かって細かな単位で盛土され、丁寧な整地が行われている。

ピット4～6 調査区北側の断割り1で検出した。直径が0.3～0.4mの楕円形、深さ0.2m前後である。

土坑7 調査区北東の断割り1で検出した。一辺0.3m以上、深さ0.2mの方形である。埋土は灰褐色粘質土。

土坑8 調査区北西側の断割り1で検出した。直径0.6m、深さ0.2mで円形である。埋土は明褐色粘質土。

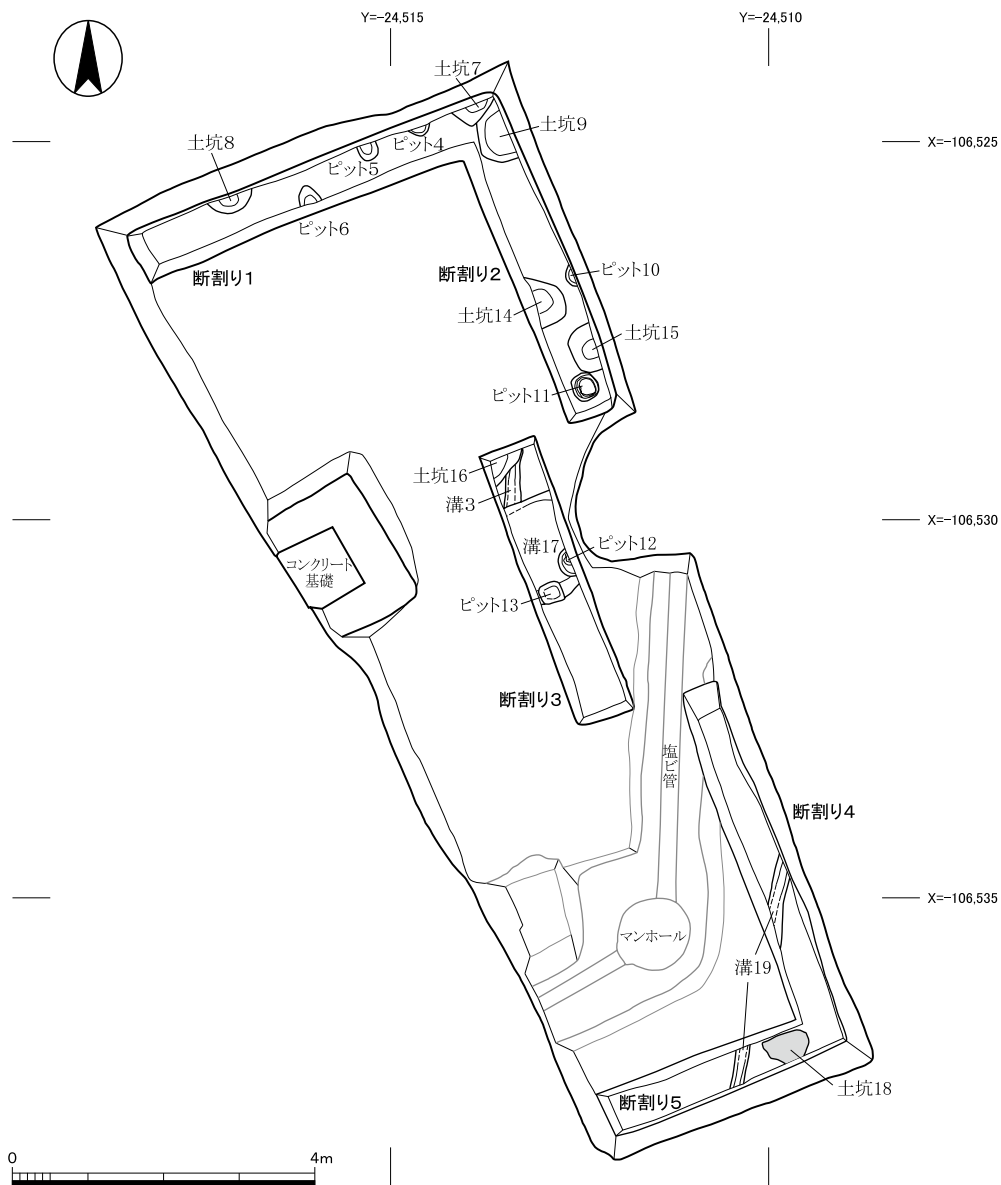


図30 第3面遺構平面図（1：100）

色粘質土、礫が混じる。

溝3 調査区中央の断割り3で検出した南北方向の溝である。検出長約1.0m、幅0.2m、深さ0.1mである。埋土は灰黄褐色泥砂、炭混じり。

土坑9 調査区北東の断割り2で検出した。直径0.8m、深さ0.2mで隅丸方形を呈す。埋土は褐色粘質土、炭混じり。

土坑14 調査区北東の断割り2で検出した。長軸0.7m、深さ0.1mで楕円形である。埋土はにぶい赤褐色粘質土、炭混じる。

土坑15 調査区北東の断割り2で検出した。一辺0.4m、深さ0.47mの方形である。幅0.3m、深さ0.3m程の柱当りが確認された。

土坑16 調査区中央の断割り3で検出した。長軸0.6m、深さ0.3mである。埋土はにぶい黄褐色泥砂、炭混じり。土坑15と形状や埋土が類似しており、土坑15は柱当りがあることから土坑16も柱穴になる可能性がある。

土坑18 調査区南側の断割り5で検出した。直径0.6m、深さ0.1mの楕円形である。埋土は暗褐色シルト、炭を多く含む。

ピット10 調査区北東の断割り2で検出した。直径0.3m、深さ0.1mの円形である。埋土は暗褐色粘質土、炭混じる。

ピット11 調査区北東の断割り2で検出した。直径0.35m、深さ0.1mの円形である。直径0.3m大の石が据えられている。

ピット12 調査区中央の断割り3で検出した。直径0.4m、深さ0.3mの円形である。底に直径0.2m大の石が据えられる。

ピット13 調査区中央の断割り3で検出した。一辺0.3m、深さ0.1mの方形である。埋土は暗褐色粘質土、炭混じる。

溝17 調査区中央の断割り3で検出した北東から南西方向の溝である。検出長0.6m、幅1.3m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色泥砂、炭を全体に含む。

溝19 調査区南東部の断割り4・5で検出した南北方向の溝。検出+長1.7m、深さ0.2mである。埋土は褐色泥砂、炭が混じる。

3. 遺 物

出土遺物は整理箱に4箱出土した。その内容は土器類、瓦類、銭貨、炉の壁土、金属などである。遺物の割合は土器類が9割占め、瓦類は1割程である。

出土土器の時期は、平安京・京都Ⅰ期～Ⅳ期の編年案に準拠する¹⁾。

(1) 土器類 (図31、図版12)

土器類は平安時代中期から江戸時代のものがある。内訳は土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、白色土器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、施釉陶器などがある。

溝17出土土器 (1～11) 1～4は土師器皿A。底部から口縁部の一部が残存する。いわゆる「て」の字状口縁で、口径は復元で10～11cm台、器高は低い。口縁部はヨコナデ調整、やや垂れきりで、端部は突起状に収まる。器壁は薄型である。5は土師器杯。体部から口縁部の一部が残存する。口径は復元で14～15cm台、器高は2～3cm台である。口縁部は外反し、屈曲して端部は小さく突起させて収まる。口縁部はヨコナデ調整、体部オサエである。6は白色土器皿B。高台底部が残存する。高台はやや高い。7は須恵器鉢。口縁部のみが残存する。口縁部が玉縁状を呈する。8～10は土師器甕。体部は丸み持って立ち上がり、口縁部は屈曲して外反し、端部は上向するものと内向するものがある。9は口縁部内外がハケメ調整される。11は土師器羽釜。内弯する体部に鏝を貼り付けて、口縁部をヨコナデ調整する。外面には粗いタテハケメ調整。胎土は粗く砂粒が混じる。京都Ⅲ期中段階に属する。

ピット11出土土器 (12・13) 12・13は土師器皿A。口縁部の一部が残存する。口径は復元できないが10cm台、器高は1cm前後である。口縁部はヨコナデ調整。図化できなかったが、他に土師器甕、緑釉陶器などがある。京都Ⅲ期新段階に属する。

整地層Ⅰ出土土器 (14～19) 14・15は緑釉陶器。底部のみが残存する。胎土は硬質で、淡緑色

表5 13次調査 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、白色土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、軒瓦、瓦、金属製品、壁土		土師器11点、須恵器2点、緑釉陶器2点、灰釉陶器1点、白色土器1点、軒平瓦1点		
鎌倉時代	土師器、瓦器、山茶椀、輸入陶磁器		山茶椀1点、輸入陶磁器1点		
室町時代	焼締陶器、瓦器、軒瓦、瓦		軒平瓦1点		
江戸時代	施釉陶器、瓦				
合 計		5箱	21点 (1箱)	4箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

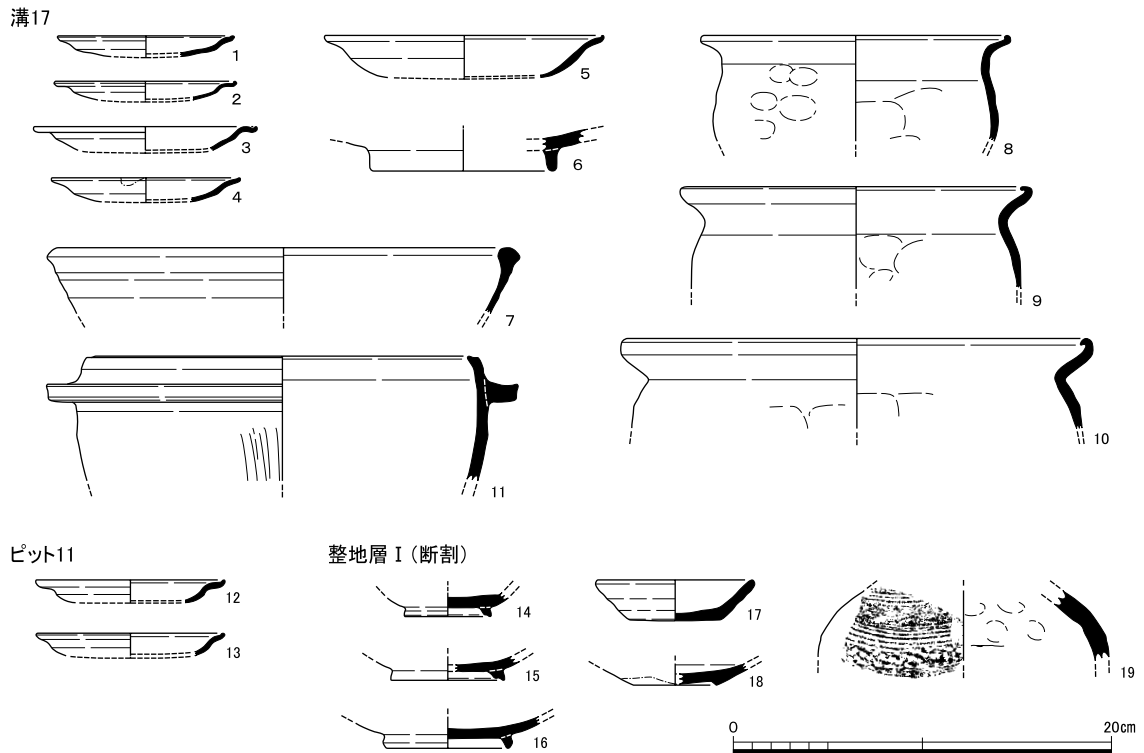


図31 土器実測図（1：4）

から黄緑色の釉が施釉される。高台は貼り付け高台。京都Ⅲ期中段階に属する。16は灰釉陶器碗。貼り付け高台。京都Ⅲ期中段階から新段階に属する。17は山茶碗。ロクロ成形、底部に糸切り痕を残す。京都Ⅴ期新段階に属する。18は輸入白磁皿。碁笥を有し、外面底部以外に施釉される。京都Ⅴ期新段階からⅥ期古段階に属する。19は須恵器壺。肩部が残存する。外面にはヨコハケメを施した後、ナデとタタキを施す。

(2) 瓦類（図版12）

瓦類は軒平瓦、丸瓦、平瓦である。軒瓦は平安時代と室町時代のものである。

瓦1は剣頭文軒平瓦である。瓦当は折り曲げ式。剣頭の縞は太い。磨滅が著しく、胎土はやや軟質で砂粒が混じる。

瓦2は半截菊花唐草文軒平瓦である。中心飾りは半截菊花文の凸線。唐草は中心飾りの下から延びて、回転する。瓦当面に離れ砂が見られる。瓦当裏面はナデ調整。胎土は硬質で微粒砂が混じる。いずれも整地層上面から出土。

(3) その他の遺物

銭貨は錆が激しく判読できない。整地層の上面から出土。

炉の壁土は5cm程の大きさで、内面は黒く変質し、金属が付着する。外側は土に籾殻が混ぜられている。

4. まとめ

今回調査で得た成果を遺構ごとに記述する。

整地層Ⅱは出土遺物から北山殿の造成に伴う整地であると想定される。整地は1 mの厚さで緩やかに南側へ傾斜しているが、ほぼ平坦に造成されている。この整地は調査区中央で東西方向に大量の礫が入れられている。これは西側の2012年度調査の2区にも続いており、意図的に入れられた可能性がある。

整地層Ⅰは下部に粘土を貼り、その上に整地土を積み、その上面に白色系粘土を貼り仕上げるという丁寧な作業が行われている。同様のものは2003年に総門の北東側で行われた調査でも確認されている。鎌倉時代前期の遺物が出土している。この時期は、神祇伯家から尾張国松枝庄と交換して手に入れた西園寺（藤原）公経が北山第の造営を開始した時と一致しており、これに関する造成の整地層と考えられる。

地山面で検出した下層遺構は、平安時代中期から後期のものと推定される。この時期の当地は、花山天皇の皇孫延信王が初代神祇官に任命された伯家の所有であったとされており、今回検出した遺構との関係が注目される。この時期の遺構は、鹿苑寺内で今回初めて検出され、今後の調査に期待したい。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年。なお、「平安京Ⅰ～Ⅴ期」「京都Ⅵ～ⅩⅣ期」を「京都Ⅰ～ⅩⅣ期」で統一した。

第4章 14次調査

1. 経 過

本年は金閣寺第1駐車場の西側に設置されていた便所跡とその周辺を対象とした。

調査区は、便所跡とその周囲に順次7箇所の調査区を府・市保護課の指導の下に設けた(図34)。南側に設けた5・6区と、7区の拡張部は、すべて人力で掘り下げて調査した。他の調査区では、近世以前の遺構面までは重機で掘削し、以降はすべて人力で遺構・遺物包含層などを掘り下げて調査した。各区の掘り下げごとに、府・市保護課による遺構確認と層位関係についての指示を受けた。

本報告に掲載している12次調査4～8区は、14次調査に先立つ調査で、旧便所解体前に行った調査である。6区で焼土面。7区で焼土で埋まった井戸や石組を検出している。井戸内の出土遺物から15世紀後半を下限とする時代が想定されている。また、8区では現存する池が南に広がっていたことが確認されている。

調査は平成27年4月1日に準備工を行い、2日から1区の重機掘削を開始した。1区に引き続き、4月28日には拡張区として2区・3区の重機掘削を開始した。5月7日には拡張区として4区の重機掘削、続けて11日に5区・6区の掘り下げを人力で開始した。1区で検出した礫敷は、池の洲浜跡の可能性があり、現地保存と決められたため、遺構面を不織布で覆い、その上に厚さ0.1mの砂を被せて保護・明示した。6月9日、1～6区の埋め戻しを終了した。翌週の6月16日には新たに7区南、6月22日には7区北の重機掘削を行い、小型の瓦窯や土坑を検出した。また、7区の瓦窯の全容を確認するため、西側を6月29日に人力で拡張した。瓦窯は半裁し、瓦窯構造を調べた上で、現地保存のため、瓦窯内に砂を充填し、瓦窯を不織布で覆い、その上に保護砂を厚さ0.1m被せ埋め戻した。7月21日に7区を重機で埋め戻し、すべての調査を終了した。

なお、5月18日には文化庁技官の視察を受けた。



図32 14次調査 調査前全景(東から)



図33 14次調査 作業風景(北東から)

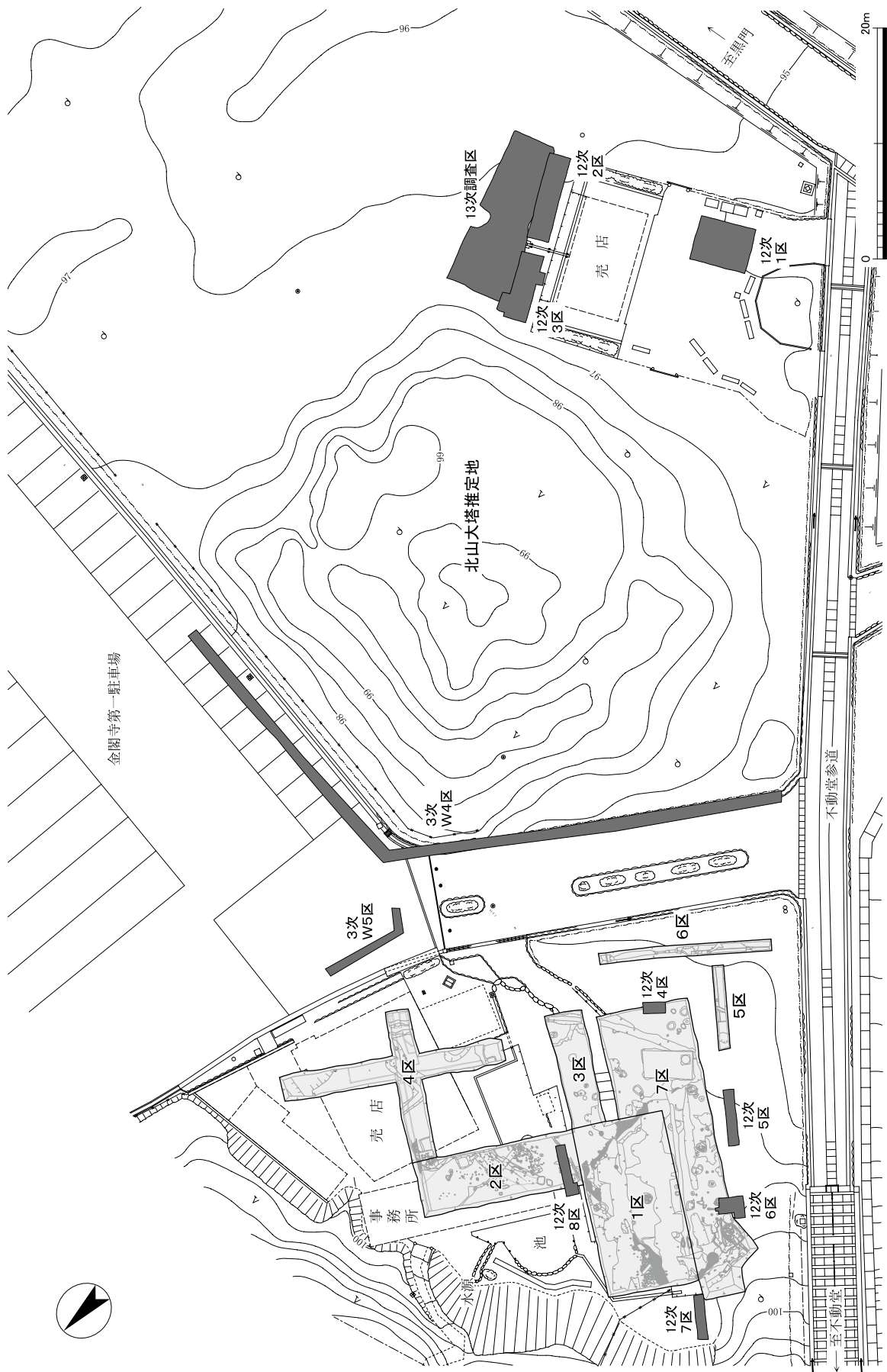


図34 14次調査区配置図 (1 : 500)

2. 遺 構

(1) 層序 (図35)

調査地は緩やかに南に下がる平坦地である。しかし、調査地北側は本来南へ張り出していた不動山の一部を東西方向に切り崩した険峻な崖面となっている。不動山はチャートの風化土から形成された粘質土～シルトで、崖面にはチャートの塊がまばらに混じっている。調査地の地山も風化土から形成されていた。また、崖の裾に小さな池が現存しており、この南に設けた12次調査8区で、池が南に広がっていたことが確認されている。池の水源は崖からの湧き水であり、雨が降れば現在でも水が崖面から吹き出すことから、不動山南面崖裾には水切りなどの溝や池などの排水施設が常に必要とされたと考えられる。また、調査地で検出した整地土層も一部を除いてほぼ地山を削った土を用いている。このことから地山と整地層との区分が困難であった。また、近世以降に掘削されたものは攪乱とした。

層序は調査区西の7区断面Aでは、室町時代後半代の土師器を含む遺物包含層（3～5層）が堆積している落込み3の上に、無遺物層の黄褐色砂泥（2層）が被さっており、その上に近世層の礫で厚く嵩上げされていた。調査区中央北側の2区断面Bは、現存する池を埋めた盛土（1層）と地山直上に先行する旧池堆積層である黒色粘質土（2層）が部分的に残存する。調査区東部の4区断面Cでは、盛土（1層）の下に中世後半以降の北山殿廃絶以降の旧表土である褐灰色砂質土（2層）が帯状に堆積し、その広がりには3区全面にまで及んでいた。その下に形成された落込み2は鎌倉時代から室町時代にかけての整地層と考える明黄褐色土（4層）で埋められていた。3層は宝輪（九

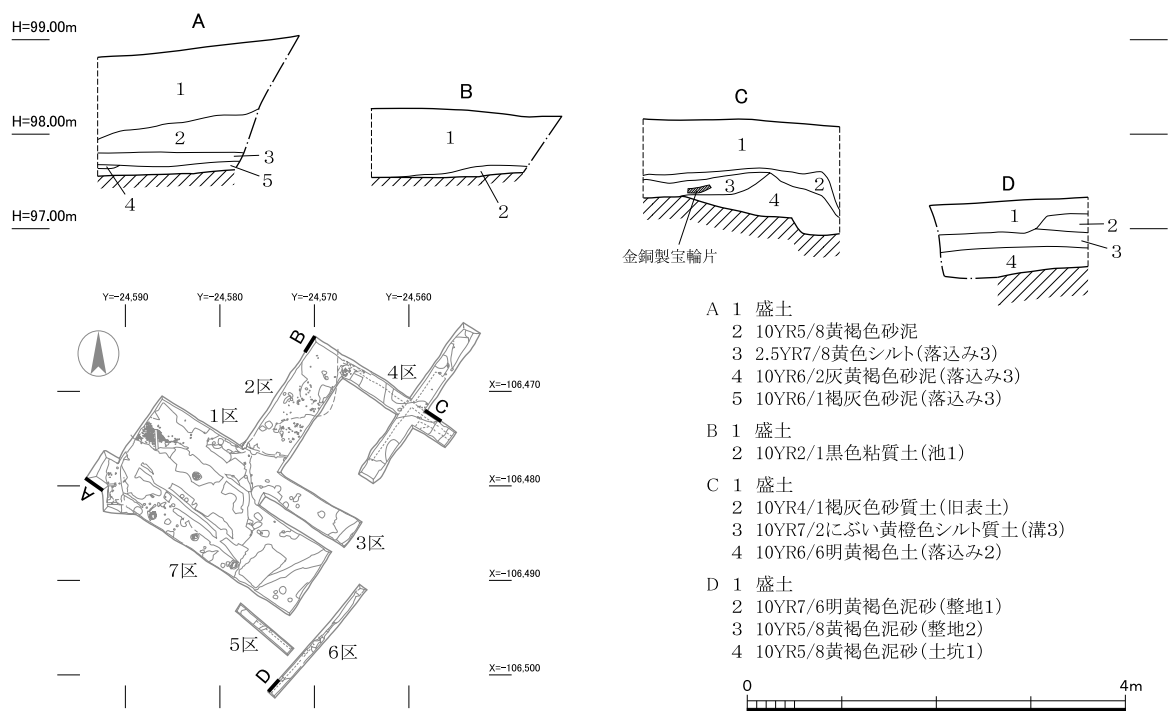


図35 層序 (1 : 80)

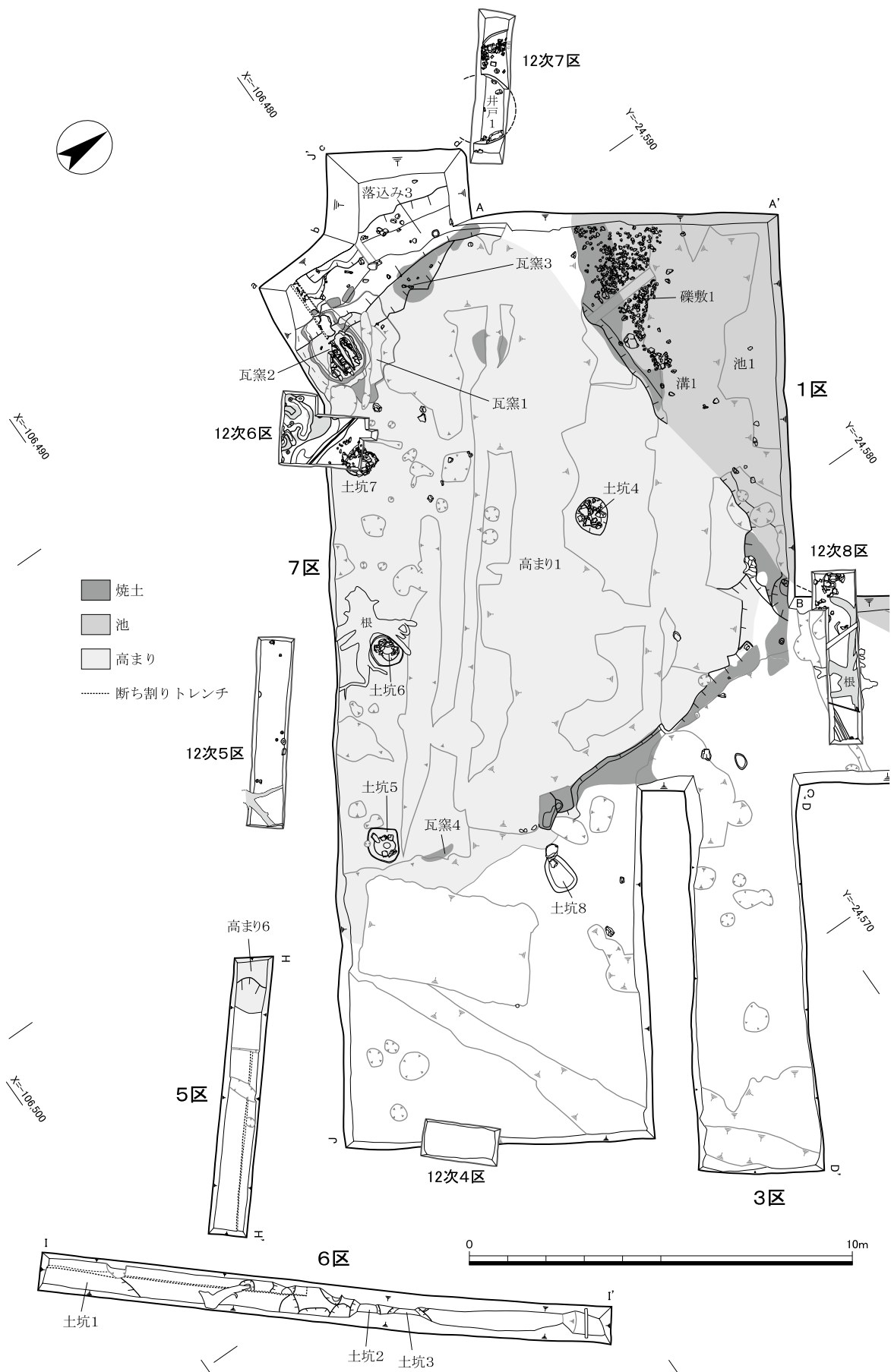


図36 調査区平面図1 (1 : 150)

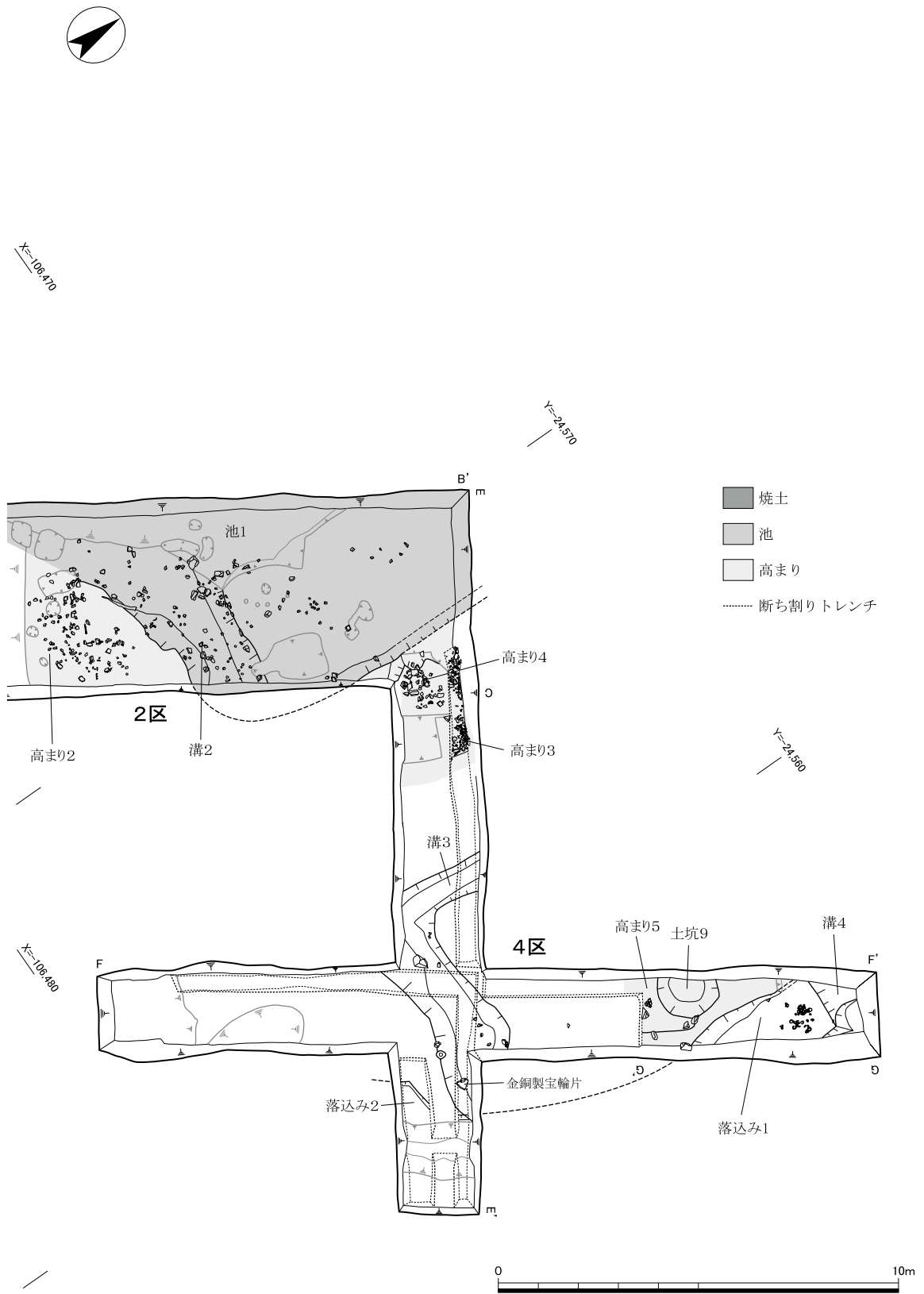


図37 調査区平面図2 (1:150)

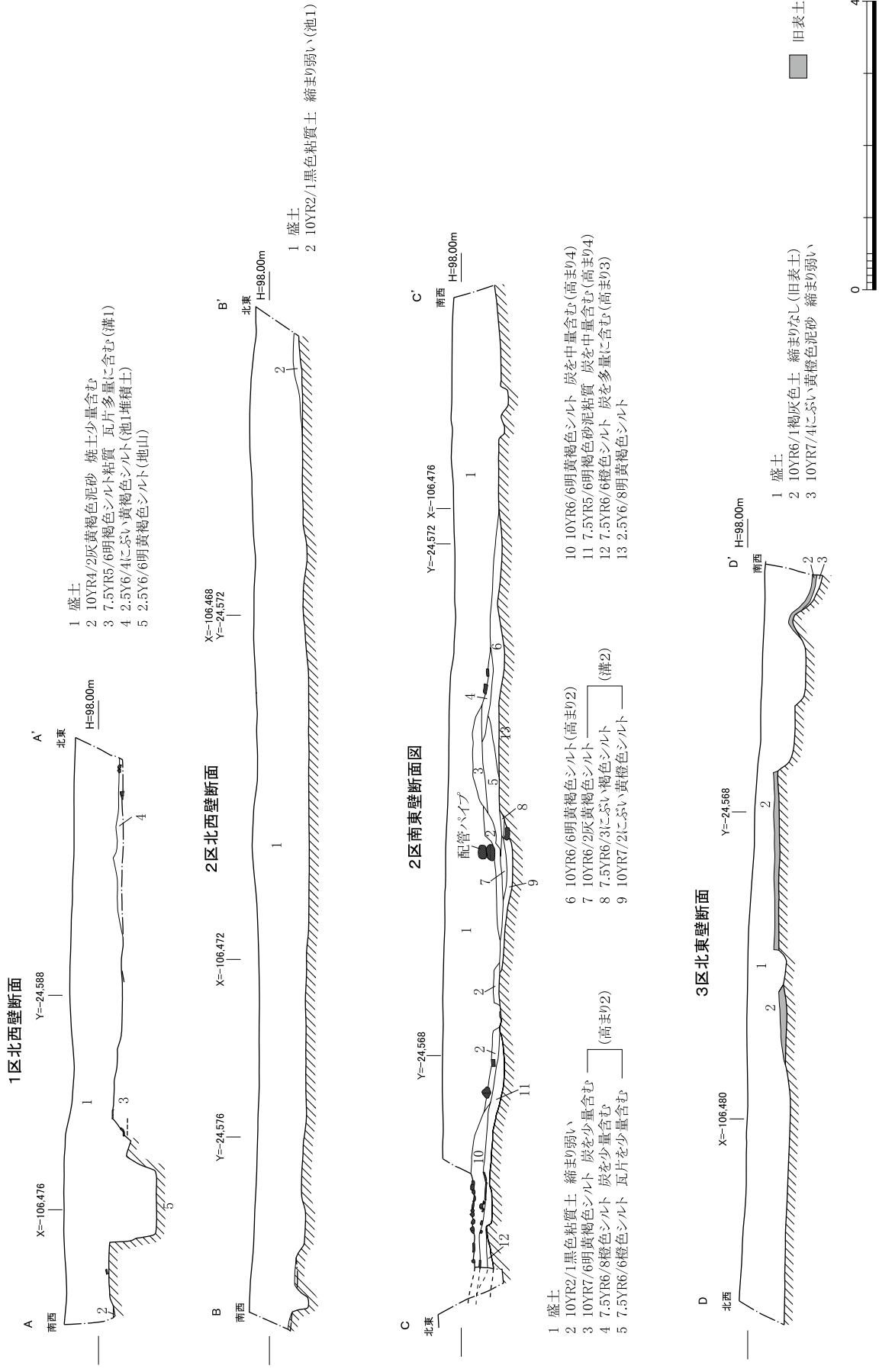


図38 1～3区断面図(1:80)

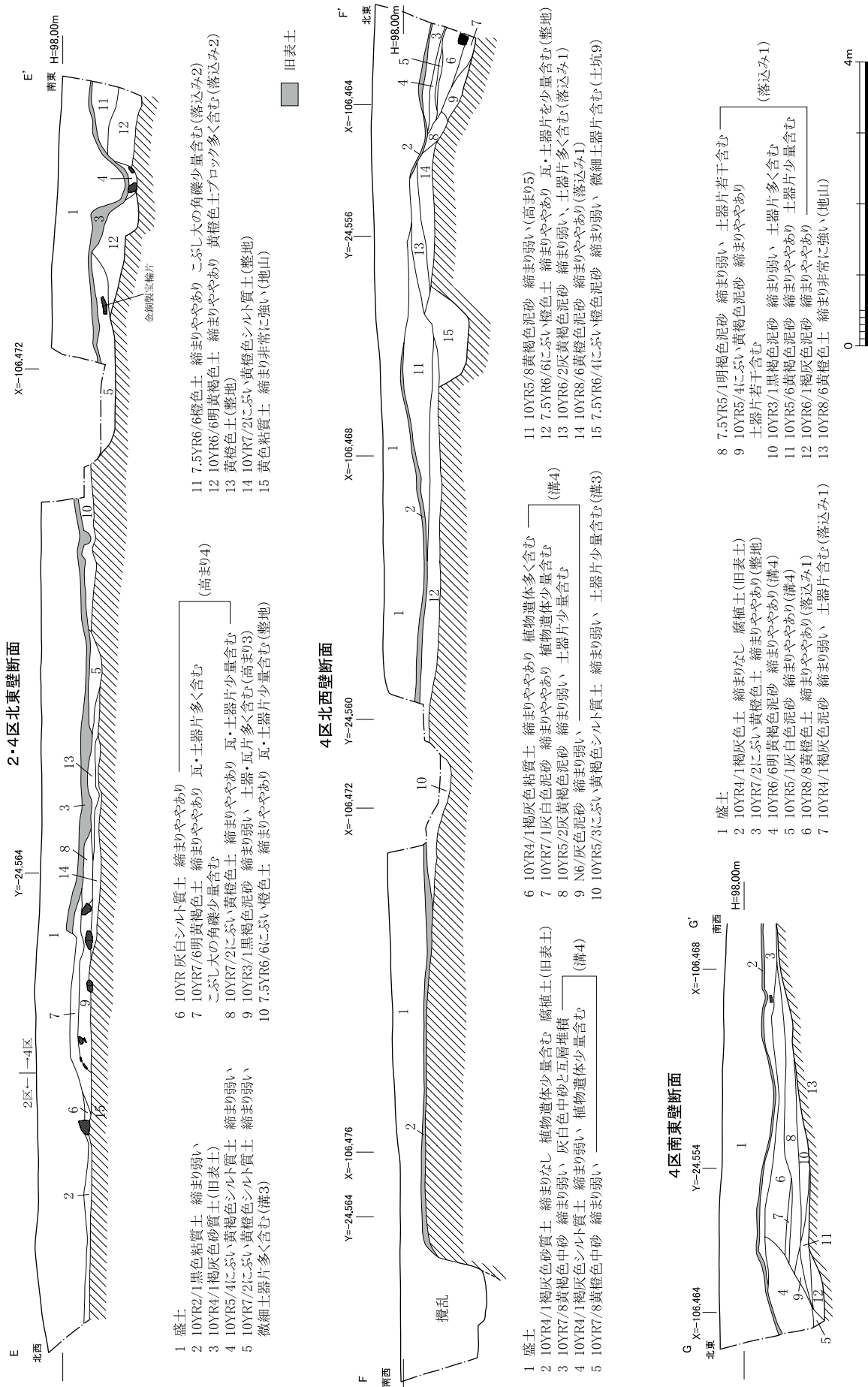


図39 4区断面図(1:80)

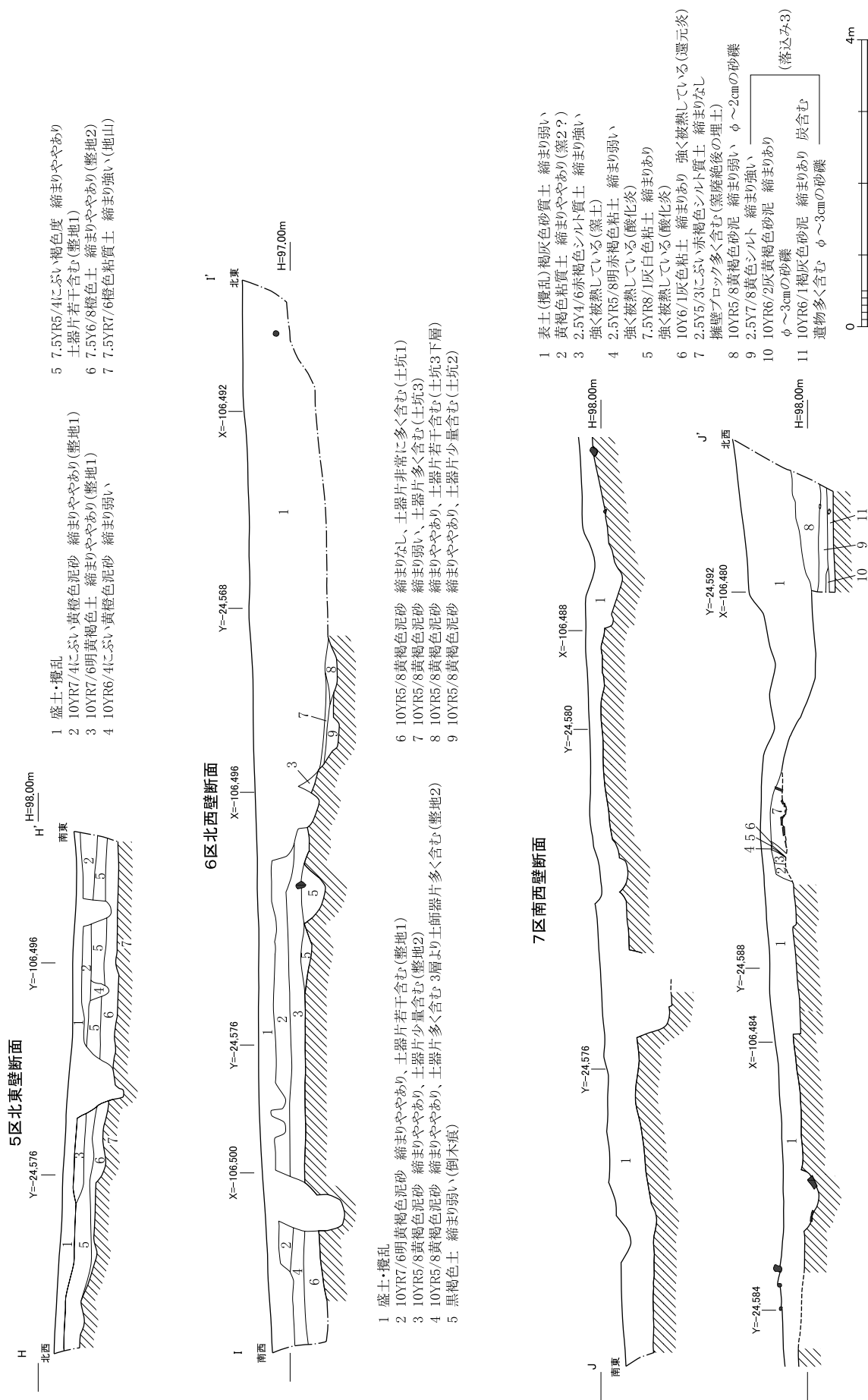


図40 5～7区断面図(1:80)

輪)片が出土した溝3の堆積土である。調査区南端となる6区断面Dでは、地表下0.2mの盛土(1層)に平安時代以降と考える明黄褐色泥砂の整地1(2層)と、その下に平安時代中期の黄褐色泥砂の整地2(3層)が堆積し、地山となる。4層は平安時代中期の土師器溜りとなっていた土坑1の堆積土で、3層と類似する。

(2) 遺構 (図36～45、図版13～21)

平安時代中期から室町時代の遺構を検出した。平安時代中期の土師器を破棄した土坑群、鎌倉時代の基壇状の高まりや落込みなど、室町時代の高まりや瓦窯・池などを検出した。1・3・7区は旧便所に該当し、コンクリート基礎・便槽タンクなどが多く削平を受けていた箇所が多い。また、2区は旧事務所、4区も旧売店の位置にあたり、削平を受けていた箇所が少ない。

以下時代順に遺構を述べるが、調査区最南端に設けた5・6区では他の調査区にはみられない平安時代の遺構を検出した。

平安時代

土坑1 6区南西端で検出した。検出長は2.6m以上、深さは0.2mを測る。平面形状は楕円形と考えられる。上面から破碎した土師器皿が一面に広がっており、部分的にトレンチを設けて掘削したにとどまったが、多量の土師器皿が破碎した状態で出土した。出土した土師器皿は油煙の付着したものが非常に多く、瓦が少量出土した。

土坑2・3 (図版16) 6区中央、地山に達する近世以降の攪乱の底面で検出した。土坑2は径1.05m、土坑3は径0.8mの楕円形の平面形と考えられる。いずれも完形の土師器皿を多量に廃棄しており、層状に重なって検出した。出土した土師器皿には油煙の付着したものが多く、ほかに瓦などが少量出土した。

鎌倉時代

落込み1 (図版17) 4区北東端で検出した。東に緩やかに下がる。北端は東方向に流れると考える溝4によって切られていた。底面で完形の土師器皿が投棄された状態で検出した。検出地点の南10mの3次調査W5区で検出されている落込みにつながるとすれば池の可能性もある。

土坑9 (図版16) 4区北東部、室町時代の整地層を掘り下げた地山面で検出した。一部調査区外へのびるが、平面形は円形で、径1.4m、深さ約0.5mを測る。埋土はにぶい橙色泥砂である。少量の土師器細片を含むが、時代を判別できるものはない。

表6 14次調査 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代	土坑1～3	
鎌倉時代	落込み1・2、高まり1・3・6、土坑4～9	
室町時代	落込み3、高まり2・4・5、礫敷1、溝1～4、池1、瓦窯1～4	

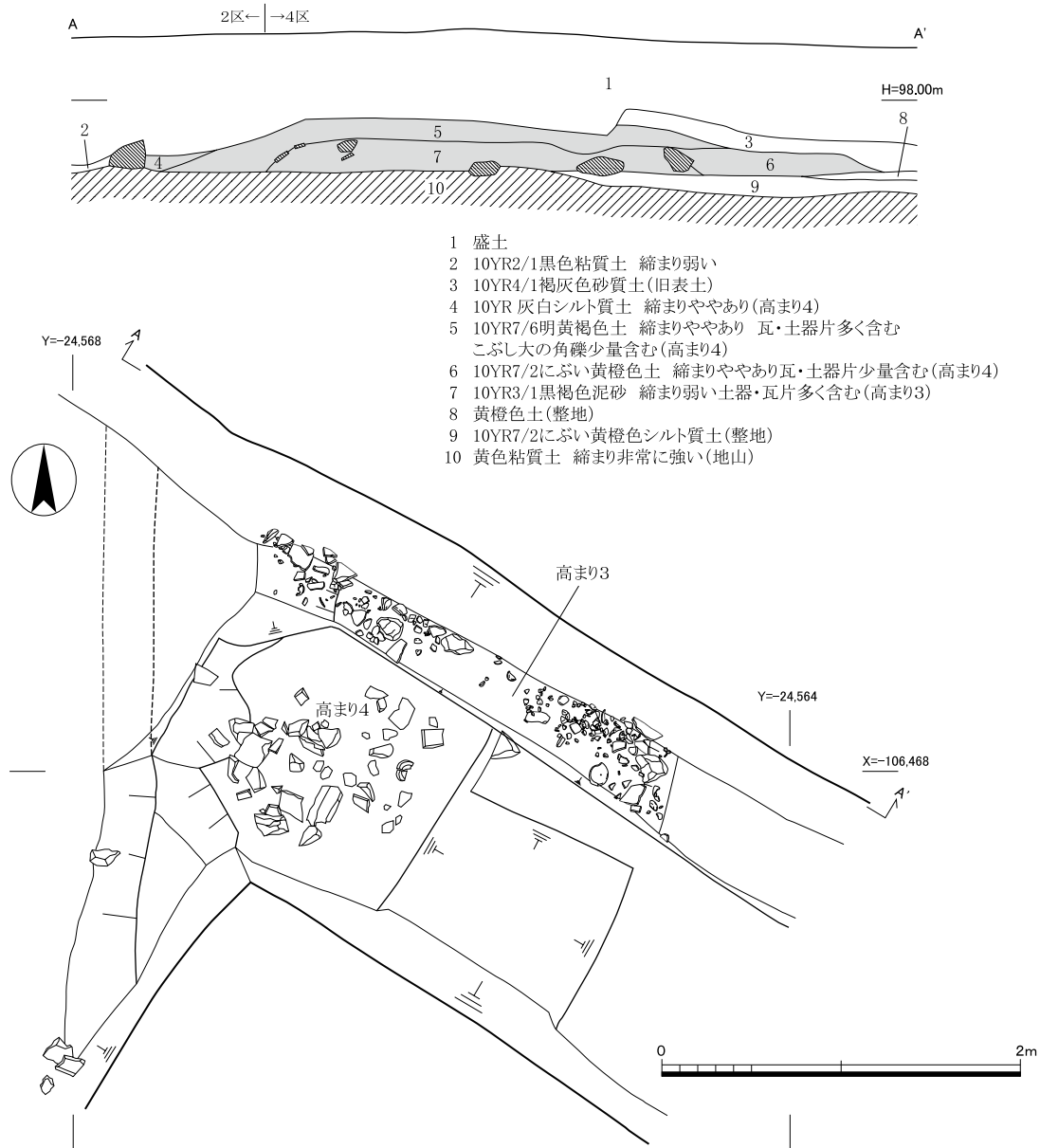


図41 高まり3・4実測図(1:40)

高まり3 (図41、図版18) 2区北東部・4区北西部で検出した高まり4を断ち割った下層で確認した。検出幅2.5m、厚さ約0.15mを測る。黒褐色泥砂層に径10cm程度の礫と鎌倉時代の土師器を多量に包含していた。

落込み2 4区南東端で整地土を半裁して検出した落込みである。近世以降の溝によって底部が掘り下げられていた。埋土は明黄褐色土で地山と酷似する。底部から鎌倉時代の土師器小片を検出した。この埋土は室町時代に埋まったと考える溝3が掘られた整地層を形成している。また、4区北東隅部で検出した鎌倉時代の落込み1が南に延びて落込み2まで連続する可能性がある。

高まり1 (図版17) 1区と7区にまたがる、主軸を正方位にあわせる方形の高まりである。北面・東面・西面の各斜面を検出しているが、上面は削平を受けている。高まりは地山を削り出して形成する。また、各斜面には焼土が堆積する。西面は落込み3によって現地表面より約1.1m掘り

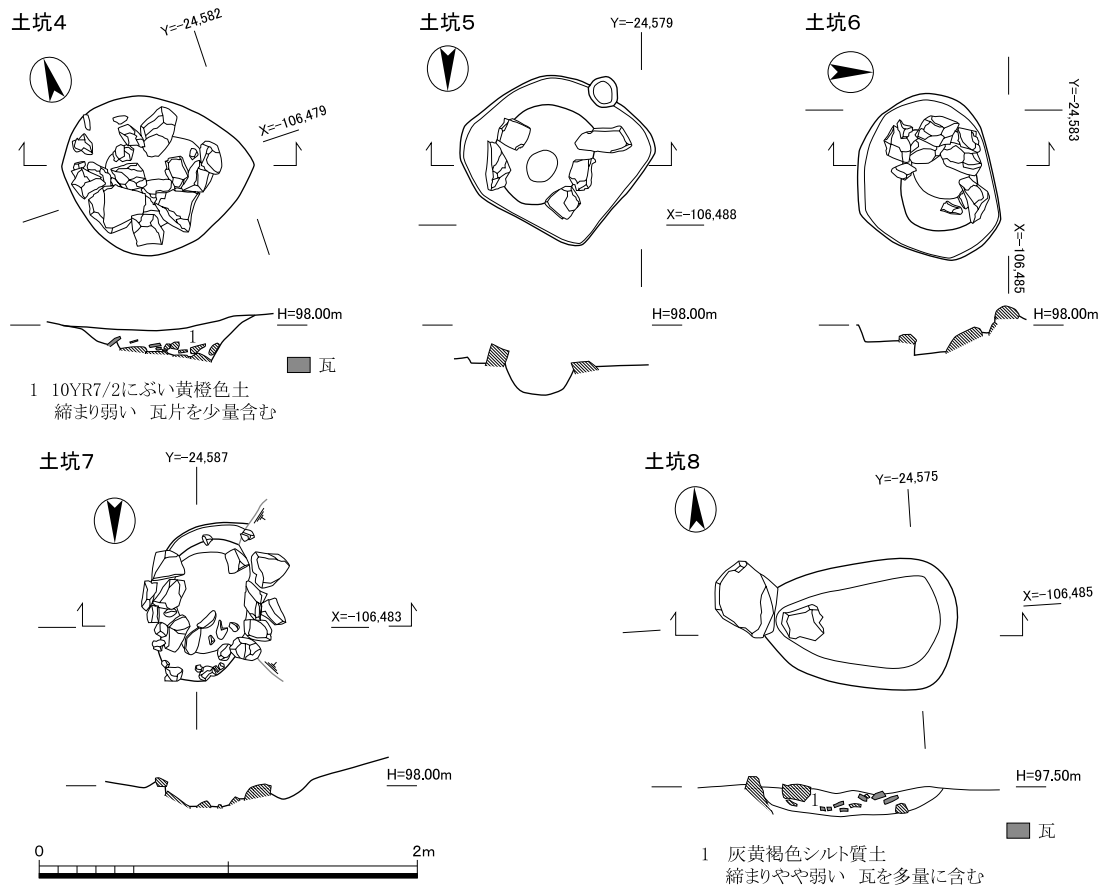


図42 土坑4～8実測図（1：40）

下げられており、この西斜面を利用して築かれた室町時代の瓦窯1～3を検出している。北面底端際に溝1が東西方向に穿たれ、その上に礫敷1を検出した。高まり1の東西幅は天端で13m。下端で14.5mを測る。南北幅は不明であるが、東面南延長線上に位置する5区で高まり6を検出している。この高まり6を高まり1の南東隅部と考えれば、北端から約18mとなり、南北に長い方形の高まりとなる。北肩部分から鎌倉時代の土師器皿が2個体分（33・34）出土している。

土坑4～7（図42、図版16）高まり1の上面で4基の土坑を検出した。これらの土坑は径約0.8mの掘形で、検出した標高や土坑の深さは一様ではない。しかし、底に拳大から人頭大の角礫を輪状に並べたように残存しており、礎石の根石と考えられる。礫上面には焼けた瓦や焼土が共通して混じっていた。焼け瓦は小片で表面が荒れているため時代を限定できないが、2区の池などから多量に出土した小型瓦と異なり、やや大型で厚さは約2cmで、鎌倉時代から室町時代にかけての瓦であろうと考えられる。高まり1の上に建っていた建物が火災によって焼失した際に、礎石が持ち去られ、根石の上に焼け瓦などが埋まった過程が考えられ、高まり1は建物の基壇であった可能性がある。

土坑8（図42）7区高まり1の東側に位置する。東西約1m、深さ0.1mのやや不定形な楕円形の土坑である。灰黄褐色シルトの埋土に凹面布目・凸面縄タタキの平瓦片や礫が含まれていた。

室町時代

池1（図版18）池1は南側を高まり2、東を高まり4によって区切られた池跡である。鎌倉時

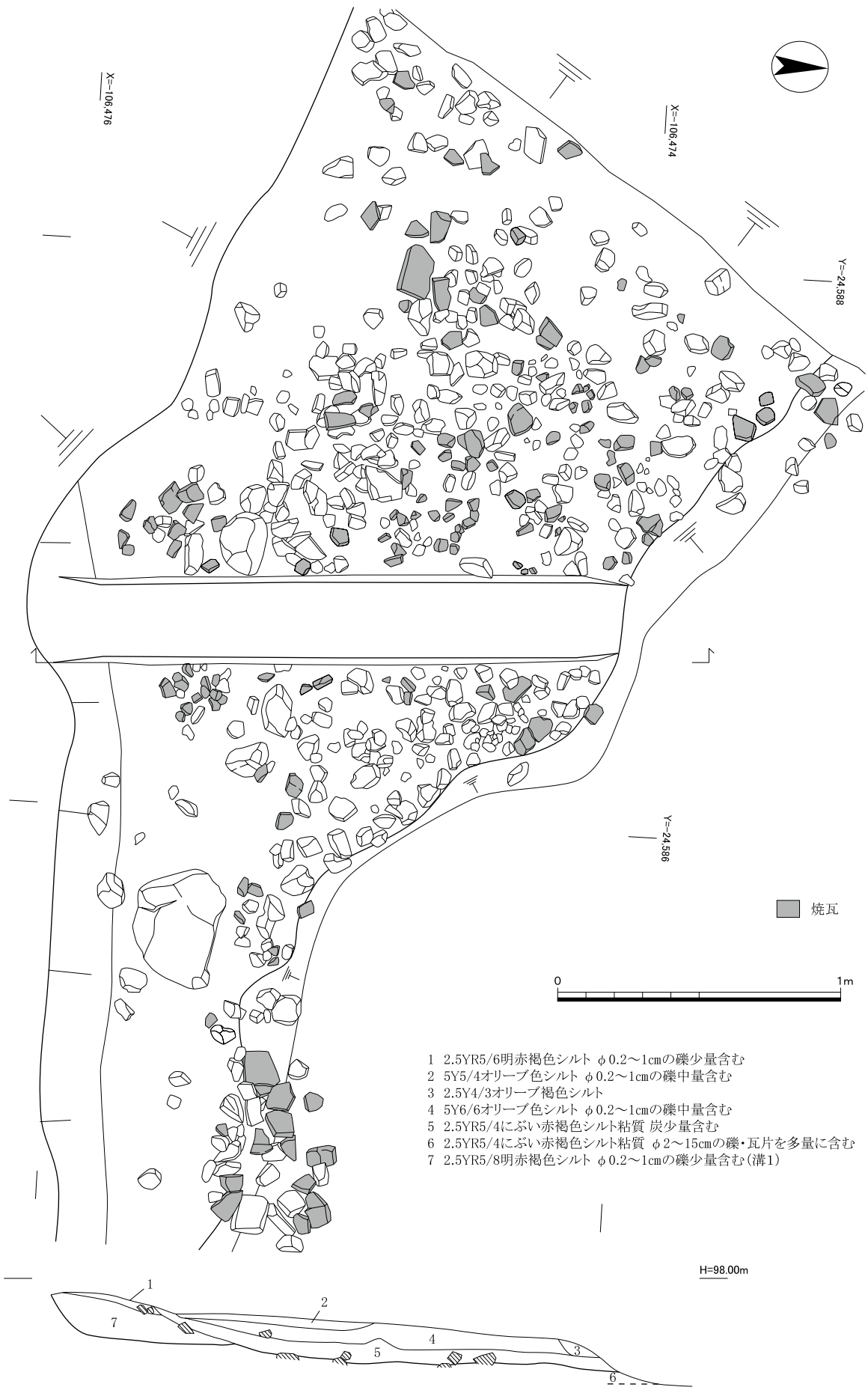


図43 礫敷1実測図 (1 : 20)

代から室町時代にかけての多量の瓦が池底に貼り付いた状態で出土した。また、2区の池底は標高87.40～87.50mでほぼ平地であるが、1区では南西方向に徐々に高くなっていて、北端では約87.70mである。池1の範囲は7区西側の落込み3までは及ばないものとする。池底は基本的に地山まで掘り下げられているが、2区東半部には厚さ0.1mの黒色粘土質が堆積しており、種子分析を行ったところ、カヤツツ草などの水生植物の種子を検出した。堆積土からは15世紀代と考えられる施釉陶器が出土した。

高まり2 (図版18) 2区で検出した。幅約3m、高さ約0.3mを測る東西方向の盛土による土手状の遺構である。検出面には室町時代の小型瓦が多く貼り付いていた。また、高まり2の上層に相当する明褐色シルトと橙色シルトには瓦の他に炭を含んでおり、下層の橙色シルトにも瓦片を少量含んでいた。これらの層は溝2埋没後に盛土されている。また、橙色シルト層から青銅製品の破片も出土しているため、この高まり2は義満の北山殿廃絶後に形成された可能性が高く、築地などが崩れて形成された可能性もある。

高まり4 (図41、図版18) 鎌倉時代の高まり3を包み込むように盛られた、南北方向に延びる土手状の高まりである。天端は上端部を既存建物で削平されているが、高まり3の上に礫や鎌倉時代から室町時代の瓦を多く含む厚さ0.1mの明黄褐色土が盛られていた。池1底面からは0.3m高く形成されている。検出幅は東西約3m。北山殿廃絶後に形成されたとする。

高まり5 4区落込み1と溝4の西側に位置するなだらかな高まりである。上部が既存建物の基礎などで飛ばされているため正確な形状などは不明である。

礫敷1 (図43、図版17) 1区高まり1北辺斜面の西部で検出した。北側にゆるやか下がる斜面に焼け瓦とこぶし大の礫からなる南北約1m、東西約3mの礫層面である。この礫層上にはオリブ色シルトが堆積していた。礫敷には室町時代と考えられる赤く変色した瓦片を多く含んでいた。礫敷は池1の汀の可能性が高い。しかし、礫層の下層にも深さ約0.1mの瓦や焼土を含むにぶい赤褐色シルトが堆積していた。

溝1 1区高まり1の北側裾に沿って掘られた幅約2m、深さ約0.2mの浅い溝状遺構である。直上には礫敷1が薄く堆積していた。既存建物の基礎による削平や保存された上層の礫敷のため範囲が明瞭ではない。

溝2 (図版18) 2区で検出した。1区溝1の東延長上に位置する東西方向の溝である。検出長は約10m、幅2.5m、深さ0.15mを測る。2区の北側では攪乱のため底まで削平を受けている。灰白色泥砂やにぶい黄橙色シルトが主体で、主に室町時代の熨斗瓦や小型半截菊花文軒平瓦が多く出土している。

溝3 (図版19) 4区中央で検出した。幅1.5m、深さ0.3mを測る断面逆台形の溝で、南北方向から東西方向に「L」字形に曲がる。溝埋没後の溝上面には4区全体を覆う旧表土が堆積する。東端の南肩部分で塔宝輪の破片とみられる金銅製品が出土した。また、溝が東方向に曲がる地点で塔相輪の破片と考えられる部位不明の薄い青銅製品が出土した。埋土は黄褐色系シルトで、2区の溝2埋土とは異なるが、東延長線上に位置していることから連続する可能性がある。

溝4 (図版19) 4区北東端で検出した。落込み1を切る東西方向に掘られた溝の南肩部と考えられる。幅1.4m以上、深さ0.5mを測る。東肩部が調査区外となるため幅は不明である。埋土上層は砂質土と粘質土の互層となっており、ラミナが認められることから、流水があったことは明らかである。崖の湧水処理溝の可能性が高い。下層は粘質土と泥砂で滞水して堆積したものと考えられる。西に比べ東の底面が約0.1m下がっていたので、東方向に流れていたと考えられる。調査区南東の3次調査W4区で多量の室町時代の大型瓦を検出した池や、3次調査W5区で検出した北に深く下がる時期不明の落込みと連続する可能性があるが、遺物が乏しく正確な埋没時代は不明である。

落込み3 (図44、図版19) 7区北西端で検出した。高まり1の西辺を形成しており、溝の可能性もある。深さは最も高い北側の地表面から地山面まで約1.4mを測る。地山の標高は約87.50mで、12次調査7区と比べ0.3m低い。上層は棧瓦を含む角礫によって約1m嵩上げされていた。その下に無遺物層で時期不明の締まりの悪い均一な黄褐色砂泥が厚く堆積している。この層と地山上の間には数層の黄色シルト層が堆積する。後述する瓦窯の灰原残存らしき焼土を含む灰層は、このシルト層間に間欠的に見られた。しかし、灰層は薄く調査区北西まで及ばず、灰原としては薄すぎ瓦片も少ない。操業ごとに整理されてシルト層が堆積した可能性もある。最下層の厚さ0.1mの褐灰色砂泥には炭を含み15世紀代の瓦などの他に15世紀後半と考えられる土師器などが出土しているので、落込み3は次に述べる西側斜面を利用して構築された瓦窯焚口を下方に設定するために新たに掘り込まれた可能性も残す。

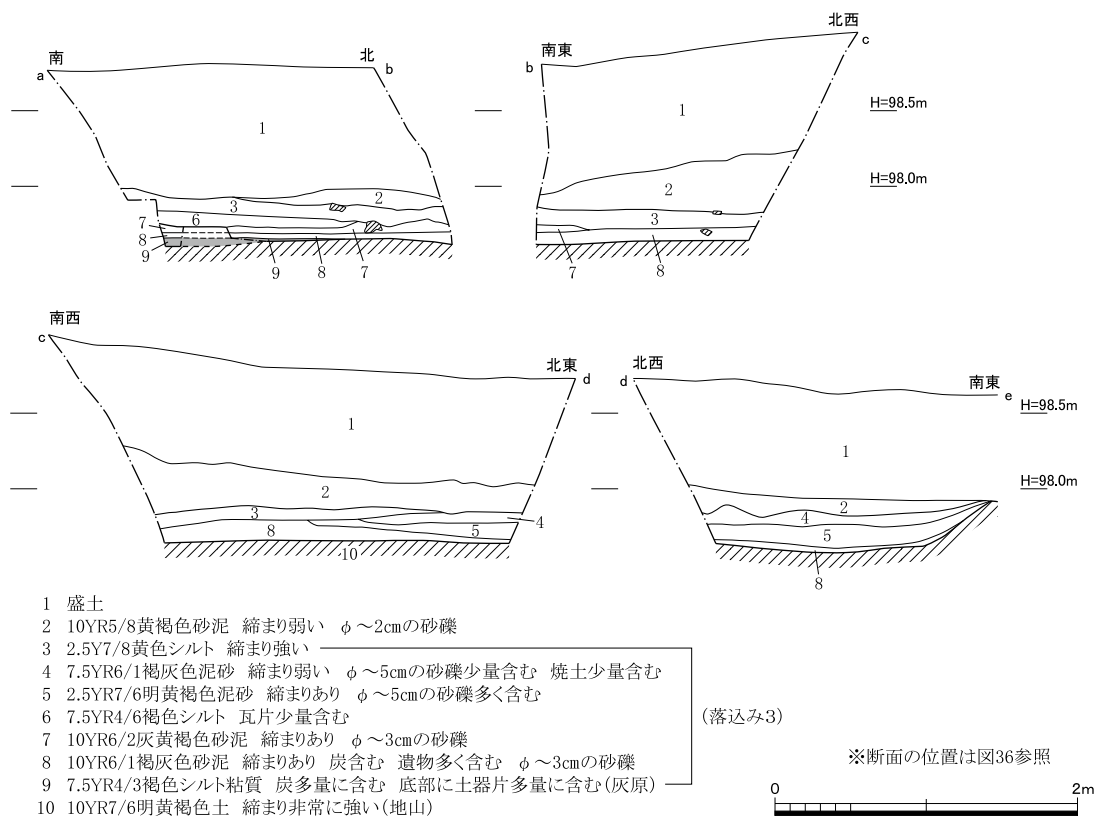


図44 落込み3断面図 (1:50)

瓦窯1（図45、図版20・21） 7区で検出した。高まり1の西辺の段差を利用して斜面に築かれた瓦窯の残欠である。完全に壊して瓦窯2が構築されたため、窯構造などは不明である。瓦窯2の外側に被熱のために赤色化した部分が、幅0.05mの明瞭な馬蹄形の輪郭線として残存している。南北で2.4m、西端は調査区外に出るが、東西2.5m分検出しており、12次調査6区で検出した被熱部分はこの窯の南東隅部となる可能性もある。特に東側では東に突出する被熱による赤化部分を0.7m認めた。煙道などの可能性がある。被熱した部分の内側は暗褐色の土で埋められ、さらに周囲と比べて0.1m盛り上げられていた。また、瓦窯2の焚口前面の断割り調査の際に、瓦窯2焚口底より0.15m下に焼土層があり、瓦窯1に対応するものと考えられる。

瓦窯2（図45、図版20・21） 7区で検出した。瓦窯1の直上に長軸を東西方向に、焚口を西側の落込み3に向けて築かれていた。製品を焼く焼成室は内法東西1m、南北1mの隅丸方形で、3本の分炎棚（ロストル）を備える。焼成室内は黄褐色の焼土で埋まっていた。燃焼室最下層には、にぶい赤褐色シルトが溜まっていた。窯壁の内側には幅約0.08mのスサ入りの粗い粘土が塗りこめられていた。壁内側は酸化還元されて白灰色で固く焼き締まっており、表面に炭素が吸着して黒色化していた。窯壁の外側は被熱によって幅0.1mほど赤く変色していた。

床底は、低い焚口底から焼成室奥にかけて約12度の傾斜でつくる。燃焼室側と焼成室の境に約0.1mの2段の低い段差を設ける。

焼成室は分炎棚上面まで残存していた。幅約0.15mの製品を上を並べる3本の分炎棚と4筋の谷となる幅約0.2mの火道を備え、分炎棚の天端は積み重ねられた平瓦の上をスサ入り粘土でかまぼこ状に覆い、分炎棚天端と側面は表面に炭素が付着して黒色化し、内面は酸化還元されて白色化していた。分炎棚の横断面形は、中央のものは上辺水平の鈍角三角形であるが、西端のものは上辺水平の直角三角形である。中央分炎棚は西端分炎棚よりやや燃焼室側に突き出て、燃焼室と焼成室の境付近上に平瓦を1枚立ててスサ入り粘土で固定していた。この中央分炎棚上部とつながる比較的固い天井部が北側の窯壁までアーチ状に残存していた。中央分炎棚底部が脇の分炎棚より燃焼室に突出していることを考えると、火道4本のうち中央分炎棚端部の燃焼室に近い部分で火を二分している可能性がある。また、中央分炎棚端部が、分炎柱として天井部を支えた可能性もある。奥壁の火道底にスサ入り粘土で上塗りした箇所を認めた。また、火道底部に焼土で詰まった径3cmの円形の穴が3箇所あり、窯を造る際に天井部を支える添え木が燃えて焼土が溜まった可能性がある。焼成室両脇の南北窯壁には製品の瓦端を立て掛ける棚は検出されなかった。

燃焼室は東西約0.7m、南北0.7mで、焼成室よりやや小さく西側に焚口を作る。焚口からなだらかに西側へ落ち込み、炭や焼土を多く含む黒褐色シルトが堆積していた。

なお、分炎棚に積まれた平瓦や天井部アーチの芯に使用された半裁された平瓦は、コビキAの瓦類に分類できる。ただし、再利用瓦の可能性や窯が小型であることから、1枚ごとに切るタタラであった可能性もある。分炎棚上には製品は残されていなかった。

瓦窯3（図版21） 7区で検出した。瓦窯2の北約2mで検出した径約2mの瓦窯で、被熱で赤く変色した地山部分と中心部の凹みで窯壁の残骸を検出したにとどまる。分炎棚を検出していな

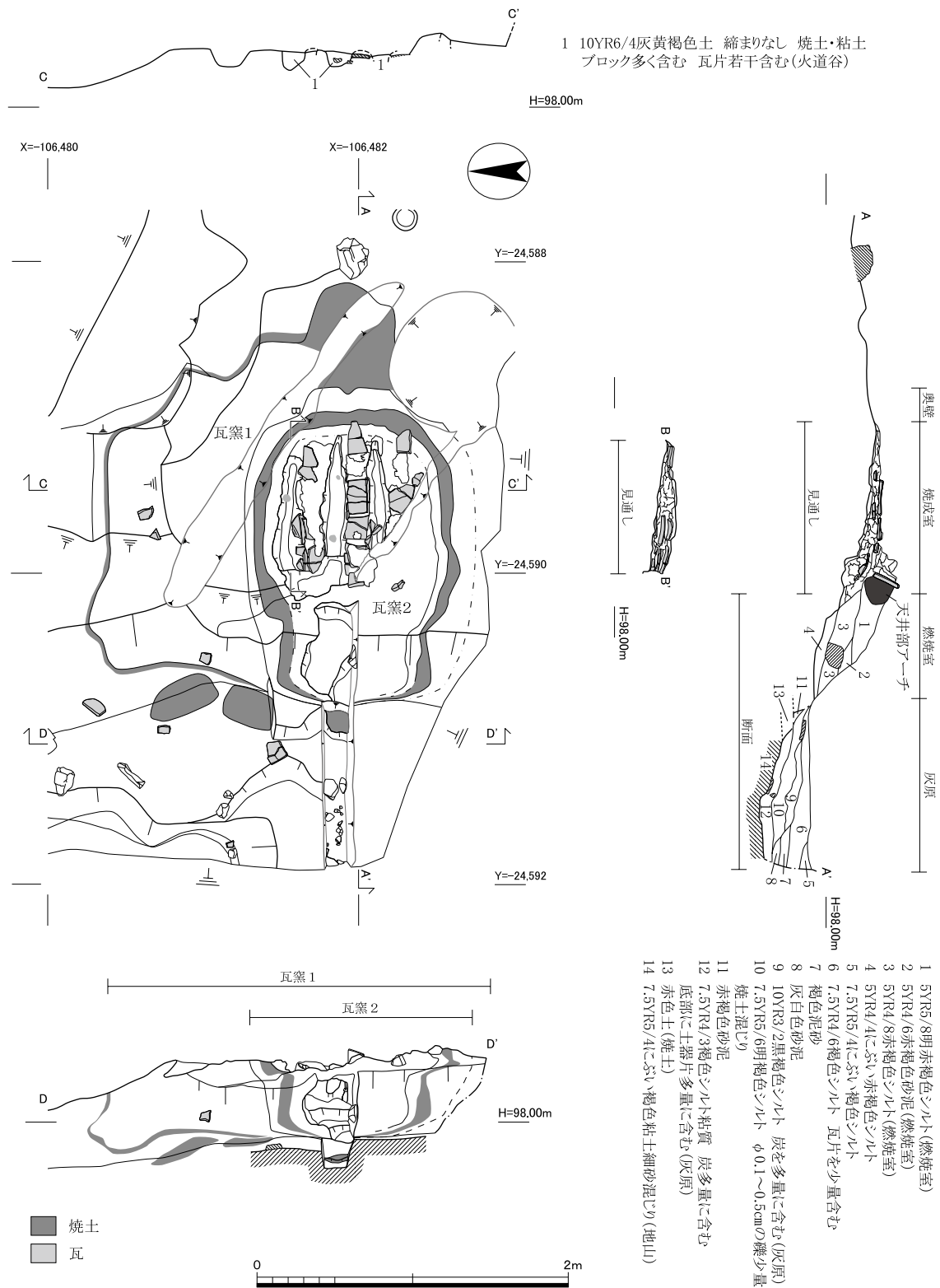


図45 瓦窯1・2実測図(1:40)

いので、燃焼室底の可能性がある。

瓦窯4(図版21) 7区高まり1の東辺斜面肩部で検出した。被熱で赤く変色している範囲は南北0.8m、幅0.15mで、窯壁残骸を検出したにとどまる。

3. 遺物

(1) 遺物の概要

5区の土坑1～3から灯明皿に使用されたと考える油煙が付着する10世紀代の土師器皿が多量に出土した。鎌倉時代の土器類が高まり3と落込み1から出土した。出土土器の時期は、平安京・京都Ⅰ期～Ⅳ期の編年案に準拠する¹⁾。

今回出土した遺物は瓦類が最も多い。瓦類は平安時代、鎌倉時代、室町時代の瓦に分類できる。平安時代は土師器皿が多量に破棄された5区から平瓦片が少量出土している。鎌倉時代のものは京都産と和泉産とに分類できる。落込み1や高まり3の他に池1底や高まり2・4などでも室町時代の瓦に混じって出土する。また、土坑9からも鎌倉時代の瓦が出土している。室町時代は池1底や高まり2の検出面と埋土に集中している。軒平瓦はいずれも小型ないし中型の半截菊花文を中心飾りとする瓦当貼り付け式瓦で北山殿所用瓦群である。離れ砂が瓦当表面に付着する三巴軒丸瓦とセット関係にある。室町時代の丸瓦の出土比率が少ないため棟か塀などに使用されていた可能性が高い²⁾。

注目すべき遺物として、室町時代の溝3から塔宝輪の破片と考えられる金銅製品が出土した。また、5区の攪乱から賢瓶下半部が出土した。

(2) 土器類 (図46～48、図版22・23)

土坑1出土土器 (図46、図版22) 1～5は土師器皿である。口径10.6～11.7cmの小型と13.7～13.9cmの中型に分かれる。器厚が薄く、口縁部を「て」の字状に作る。内面に油煙が付着し、黒色化している部分が多い。平安時代中期の10世紀半ば後半 (京都Ⅲ期中段階) の土師器皿群である。6は緑釉陶器の脚部である。脚部径は10cmを測る。体部が失われているため器種は不明である。胎土が淡黄色、釉調がオリーブ灰色である。内面に釉はかけていない。平安時代前期に遡る可能性がある。

表7 14次調査 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦		土師器19点、緑釉陶器1点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦、金属製品		土師器27点、瓦器1点、軒平瓦8点、軒丸瓦6点、金属製品1点		
室町時代	土師器、瓦質土器、施釉陶器、瓦、金属製品		土師器2点、瓦質土器1点、施釉陶器4点、軒平瓦12点、軒丸瓦4点、熨斗瓦4点、金属製品3点		
合計		36箱	93点 (8箱)	28箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より5箱多くなっている。

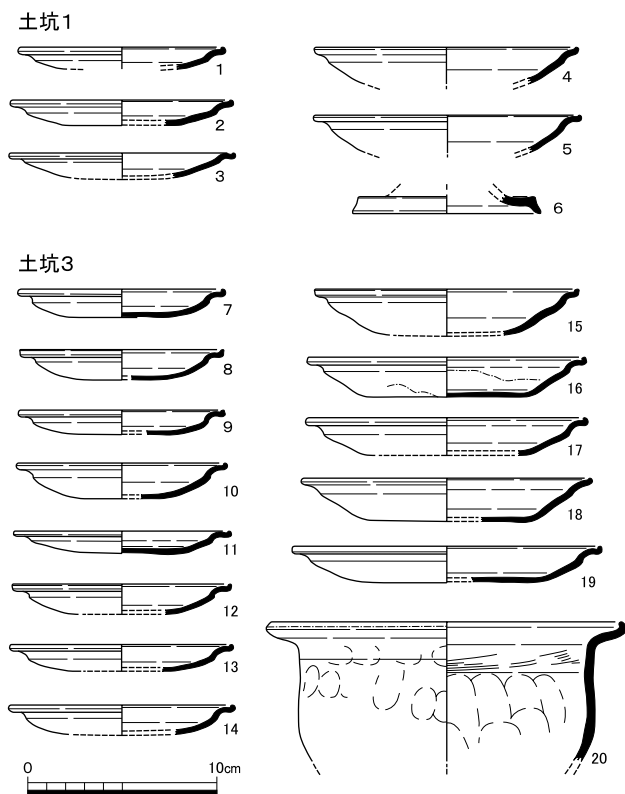


図46 平安時代土器実測図（1：4）

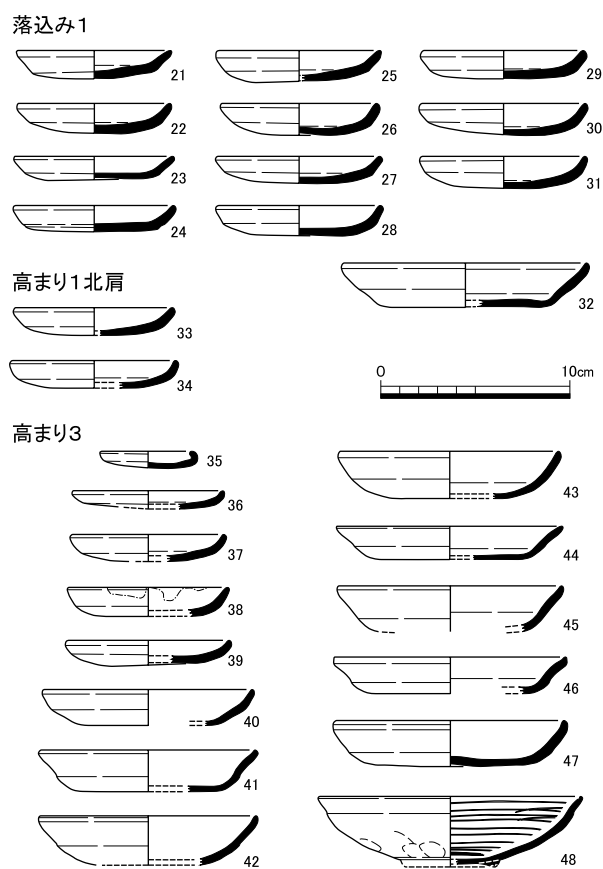


図47 鎌倉時代土器実測図（1：4）

土坑3出土土器（図46、図版22） 7～19は土師器皿である。口径10.6～11.7cmの小型と14.0～15.1cmの中型に分かれる。しかし、復元口径16.3cmの大型の皿がある。ほとんどの個体の内面には黒色の油煙などが付着している。時期も土坑1と変わらないと考える。20は口径18.5cmの土師器甕である。この甕も口縁部をナデで「て」の字状に作る。内面頸部に横方向のハケ目痕がある。胴部に内外ともオサエの痕跡がつく。胎土は密で淡い橙色。焼成も良い。煮炊きによる煤が外面に付着する。

落込み1出土土器（図47、図版22） 21～32は土師器皿で、口径8.2～9.0cm小型と口径13.1cmの大型に分かれる。口縁部を三角形状に作る。時期は鎌倉時代前半代の13世紀前半（京都VI期中段階）に比定できる。

高まり1出土土器（図47、図版22） 33・34は高まり1北肩で出土した土師器皿である。口径は33が8.3cm、34が8.6cmを測る。鎌倉時代の13世紀後半代（京都VI期からVII期）に比定できる。

高まり3出土土器（図47、図版22） 35はコースター形土師器皿で、口径4.8cmを測る。口縁部は内側に折り込む。胎土は白色である。36～47は土師器皿である。口径8～8.8cmの小型と10～12.5cmの大型に分かれ、42・43・45・47は白色系である。落込み1の土師器群に比べ全体に小型化が進行している。鎌倉時代中期の13世紀半ばより後半（京都VI期新段階からVII期古段階）の土師器皿群に比定できる。38と39には口縁部に油煙が付着している。48は口径13.8cm、高さ3.7cmの瓦器碗である。腰を持ち器高も低い。内面にヘラミガキ。端部を

つまみ上げ、先端内面に沈線を廻らす。樟葉産で13世紀後半に比定できる。

池1 関連遺構出土土器(図48、図版23) 49～52は施釉陶器平椀である。池1底から49・50、磔敷1から51、高まり4から52が出土した。焼成が硬く、胎土は灰白色である。淡緑色の透明感のある灰釉をかけている。49～51の口径は15～16cmであるが、52は口径17.4cmを測る。口縁部はやや窄ませて外反させ、天目茶椀に似た口縁部である。高台脇も水平に削り出し角をつけ、腰部もケズリで調整する。すべて高台部を欠落している。51は見込にトチンの痕跡がある。池1範囲内から他にも小片が数点出土している。15世紀代半ばの古瀬戸平椀である可能性が高い。

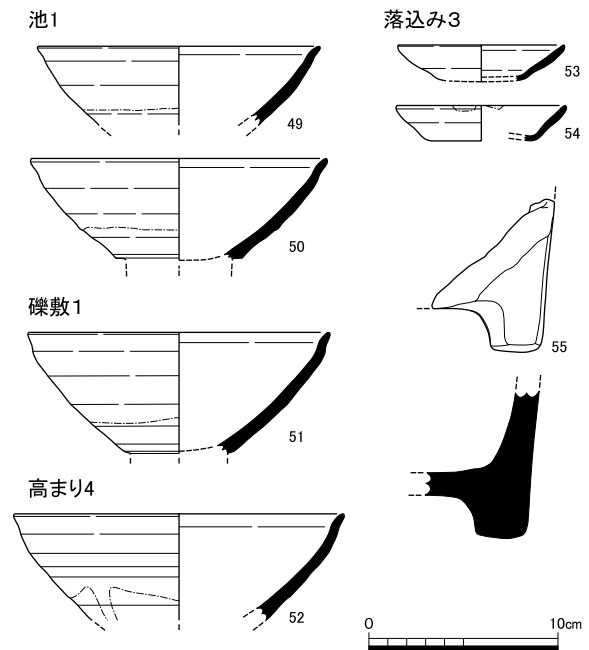


図48 室町時代土器実測図(1:4)

落込み3 出土土器(図48、図版23) 53・54は土師器皿である。高まり1西側の落込み3最下層から出土した。復元値であるが、口径は白色系の53が8.8cm、赤色系の54が9.3cmである。54の口縁部には油煙が吸着し、灯明の痕跡がある。室町時代の15世紀後半(京都Ⅸ期新段階)である可能性が高い。55は上記の土師器とはほぼ同一地点で出土した瓦質土器の方形火鉢の脚部である。表面に炭素が吸着する。15世紀代である。

(3) 瓦類(図49～51、図版24)

瓦1は剣頭文軒平瓦である。胎土は軟質である。京都産。鎌倉時代の可能性が高い。4区黄橙色の整地土から出土した。瓦2・3は折り曲げ式の剣頭文軒平瓦である。鎌倉時代。落込み1から出土した。瓦4は折り曲げ式の剣頭文軒平瓦である。鎌倉時代。高まり2から出土した。瓦5は折り曲げ式の剣頭文軒平瓦である。瓦当面幅が薄く2.2cmである。鎌倉時代。落込み2を切る近世以降の溝から出土した。瓦6～8は和泉産の軒平瓦である。連珠文を囲う隔線が巡る。胎土は淡灰色で密で軟質。表面は炭素を吸着させ黒い。すべて顎貼り付け式で平瓦部との剥離痕が上面に付着する。剥離面にカキメなどの痕跡はない。瓦6は高まり3、瓦7は4区落込み1、瓦8は土坑9から出土した。

瓦9は京都産の巴文軒丸瓦で、剣頭文軒平瓦とセット関係にある。鎌倉時代。高まり2から出土した。瓦10は巴文軒丸瓦である。瓦当厚が薄い。産地不明。鎌倉時代。高まり3から出土した。瓦11～14は和泉産の三巴文軒丸瓦で、瓦6～8の和泉産の軒平瓦とセット関係にある。胎土や表面は軒平瓦と同じであるが、瓦13は火を受けたためか胎土が褐色化している。瓦11・12は珠文が小さいタイプ、瓦13・14は珠文が大きいタイプである。鎌倉時代。瓦11・12・14は高まり3、瓦13

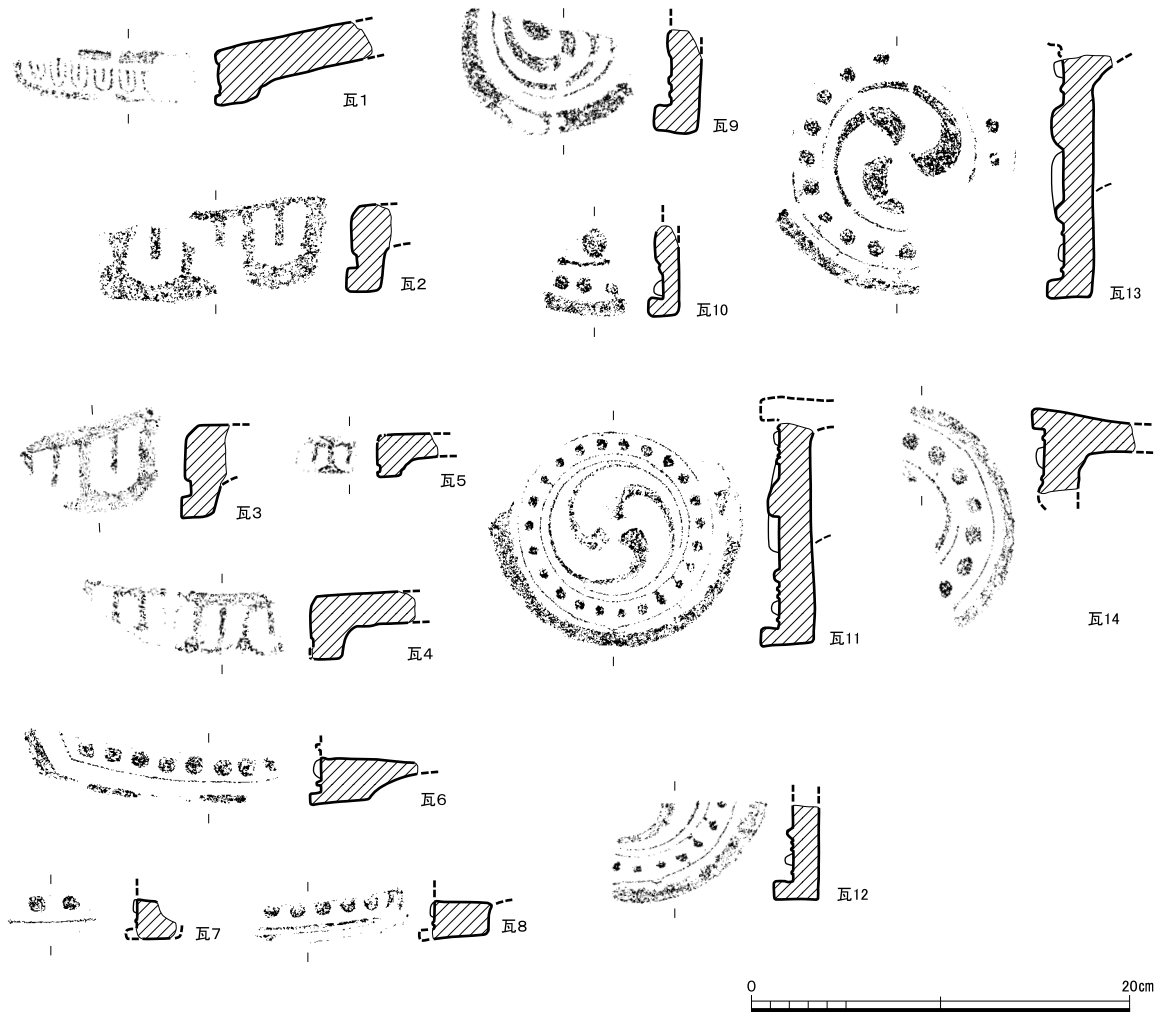


図49 鎌倉時代瓦拓影及び実測図（1：4）

は5区北端の傾斜部から出土した。

瓦15～26は半截菊花唐草文軒平瓦である。足利氏が関連した寺社や北山殿から出土する室町時代を代表する瓦である。今日までの研究では1380～1430年代までとされている瓦群で、足利義満の北山殿の他に京都臨濟五山関係や鶴岡八幡宮・足利市の樺崎寺などで出土している。今回の調査では1997年「報告書」に掲載された小型の三反転唐草文の他に、五反転の軒平瓦（瓦26）が出土した。すべて中型から小型に分類でき大型はない。すべて瓦当貼り付け式で瓦当上端部をケズリで面を作る。瓦当下端部もかすかにケズリが施されているものが多いが、表面の荒れで確認できない瓦がある。両端が上に巻き上がる三反転と五反転唐草文は小型のためか焼成が良好である。胎土・表面とも淡灰色である。凹面に布目の痕跡が付着する。瓦15～22は三反転唐草文である。瓦23～25は唐草両端が上に巻き上がるタイプである。瓦15は瓦当貼り付け式特有の斜め方向の剥離面が瓦当裏に付着する。瓦25は全長17.8cmを測る。尻側凹面に方形の釘穴を焼成前から穿っているが、貫通していない。凹面に布目の痕跡がある。瓦26は瓦当貼り付け式軒平瓦である。唐草文を圏線で囲む。同範瓦と考えられる瓦が本報告12次調査及び相国寺から出土している。中心飾りを欠くが、相国寺例では5反転の半截菊花唐草文軒平瓦に該当し、中心飾りの菊花を単線で表す。単

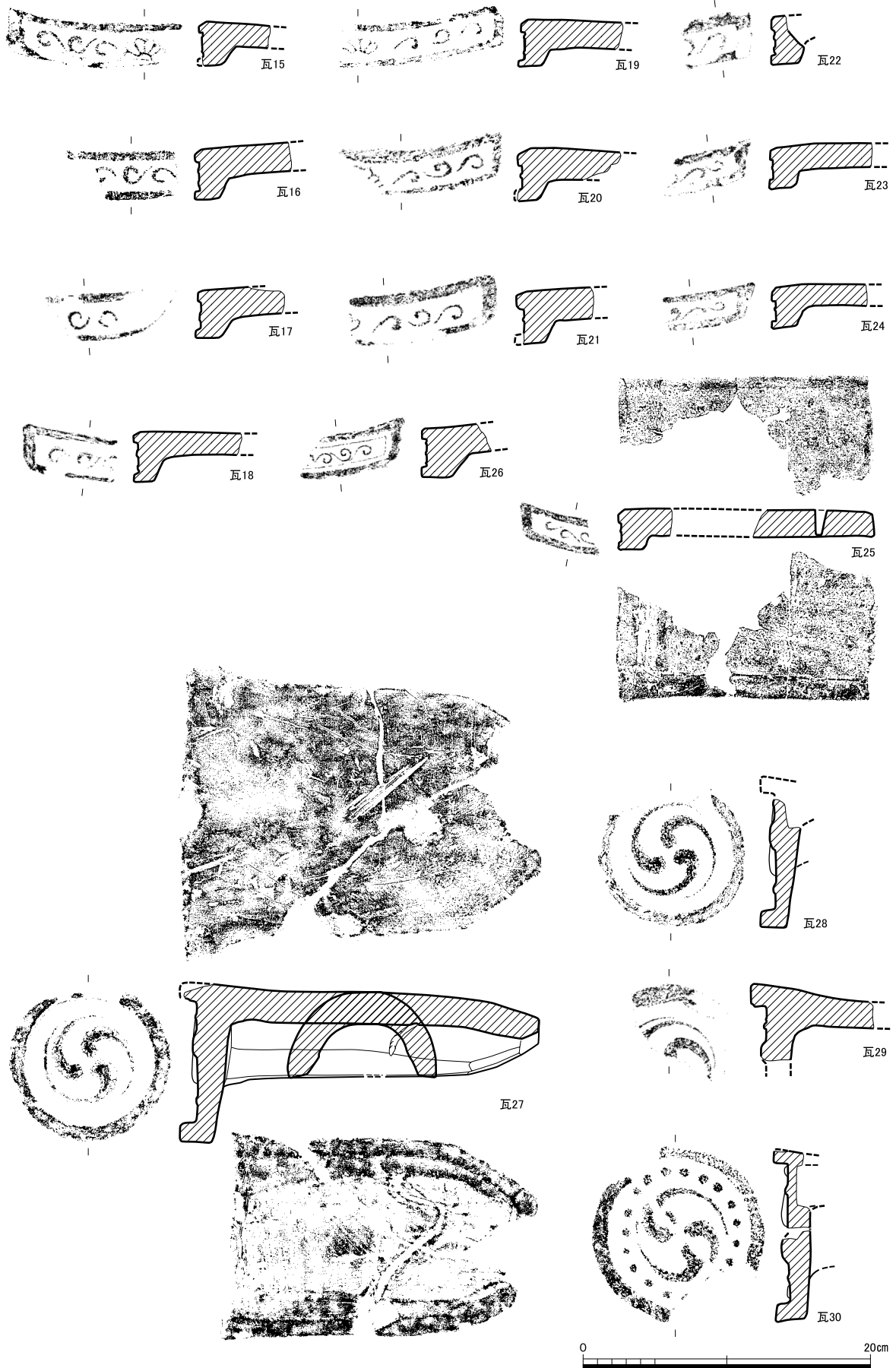
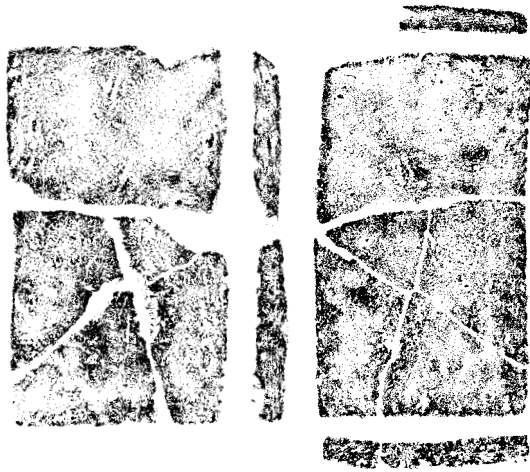
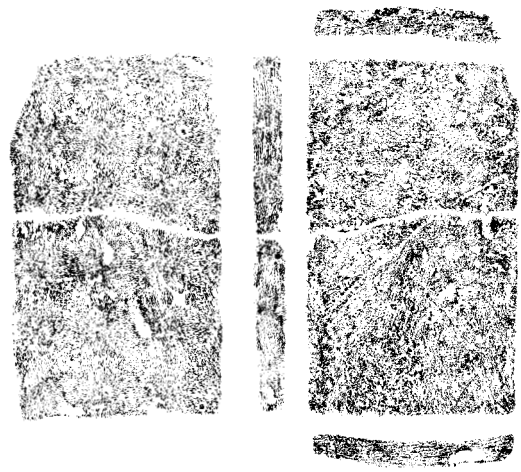


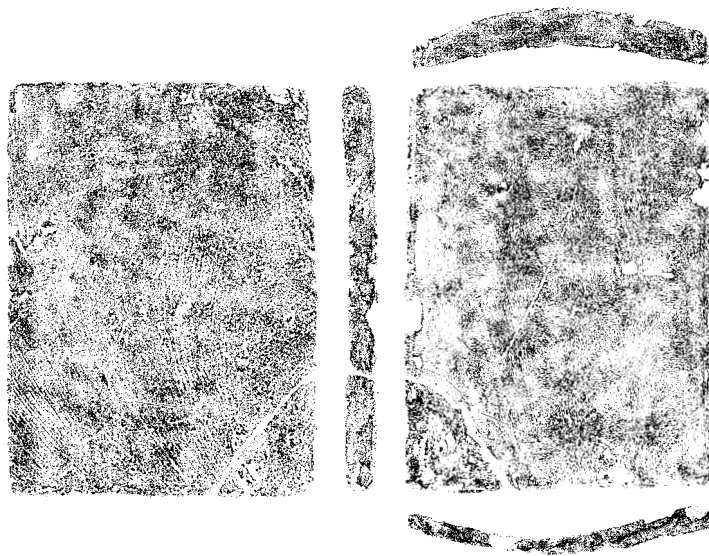
图50 室町時代瓦拓影及び実測図1 (1 : 4)



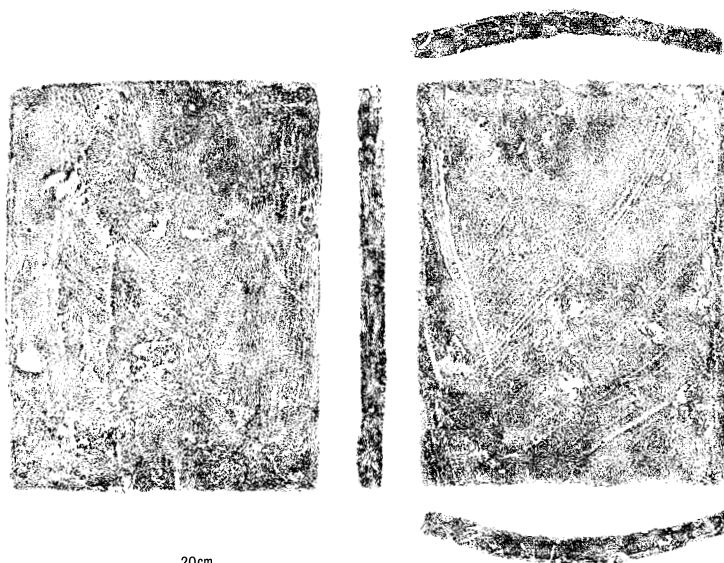
瓦31



瓦32



瓦33



瓦34



図51 室町時代瓦拓影及び実測図2 (1 : 4)

線で表す中心飾りは相国寺創建期（1382～1394）とされ、菊花を輪郭線で表現するものより古いと考えられている。また、この瓦には瓦当下縁にかすかに面取りを施しているが、相国寺創建期には面取りはないとされている。この瓦は焼きが固く模様も鮮明である。瓦15～17・19は池1、瓦18・20～22・24・25は高まり2、瓦23は落込み3の黄褐色泥砂層、瓦26は高まり4から出土した。

瓦27は全長25cmの尻が窄まる行基式小型三巴文軒丸瓦である。ほぼ完形で置かれたような状態で出土した。瓦当面に離れ砂が付着する。内面に布目と吊り紐の痕跡がある。半截菊花文唐草軒平瓦とセットになる軒丸瓦と考える。落込み3最下層で検出した。瓦28・29は瓦27と同じタイプの三巴文軒丸瓦である。高まり2から出土した。瓦30は珠文を廻らす中型タイプの三巴文軒丸瓦である。池1から出土した。

瓦31～34は熨斗瓦である。小型と中型に分類したが、幅が異なるだけである。平瓦にある狭端面と広端面の区別はない。また、凹凸両面にコビキAの弧線と離れ砂が付着し、布目の痕跡はない。凹面に軽いナデと端部に面取りを施す。小型の瓦31は長さ20.0cm、幅11.3cm、厚さ1.8cm。瓦32は長さ19.5cm、幅11.4cm、厚さ2.0cmを測る。中型の瓦33は長さ22.1cm、幅16.4cm、厚さ2.0cm。瓦34は長さ21.9cm、幅17.2cm、厚さ1.8cmを測る。池1から出土した。

（4）金属製品・木製品（図52～54、図版23）

金1は金銅製塔宝輪（九輪）の破片である（図52参照）。溝3の東端南肩部で出土した。筒状の残片で、残存横幅37.4cm、残存高さ24.6cm。重量は8.2kgである。復元径は2.4mとなる。肩部となる上部がやや内弯する。外面と内面上端部に面取りの痕跡がある。外面の面取り下端に0.1cmの段が横方向に巡る。上面内側に心柱に通された擦管上に乗せる輪部と繋がる枝が取りつく。枝は肩部から約5cmで折れて欠落している。枝は断面台形で、四隅に0.5～1cmの面取りを施す。枝上端の面取りは輪部内面上端の面取りとつながる。内面面取り下端はやや尖っており、面取り下端が上部鑄型の接合痕跡の可能性はある。蛍光X線分析で外面表面に鍍金が施されていたことが判明した（「金属製品の分析」参照）。また、外面右側に縦方向の鑄型で多用される寄型の接合部に似た段がつくが、この縦方向の段右側では鍍金痕跡が検出されていない。外面には横方向に15cmの右下がりの沈線がある。内面は外面より器壁の仕上げがやや粗く凹凸がある。

金2は青銅製板片である。溝3コーナー部で検出した。残存幅10.3cm、厚さ0.5cmを測り、重さは89gである。下端部は円弧をもち、端部は徐々に薄くなり丸く収めている。器面は調整が荒い面と滑らかな面がある。塔相輪の露盤部か風鐸の一部の可能性はある。

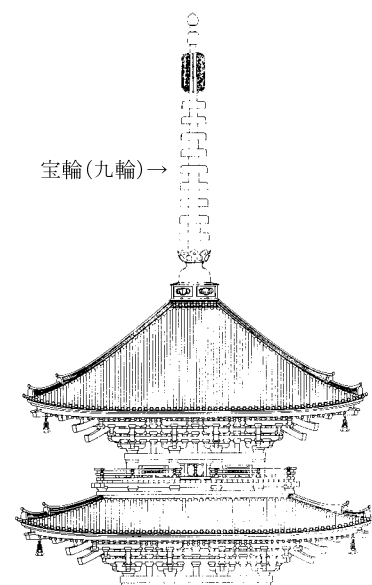


図52 宝輪参考図

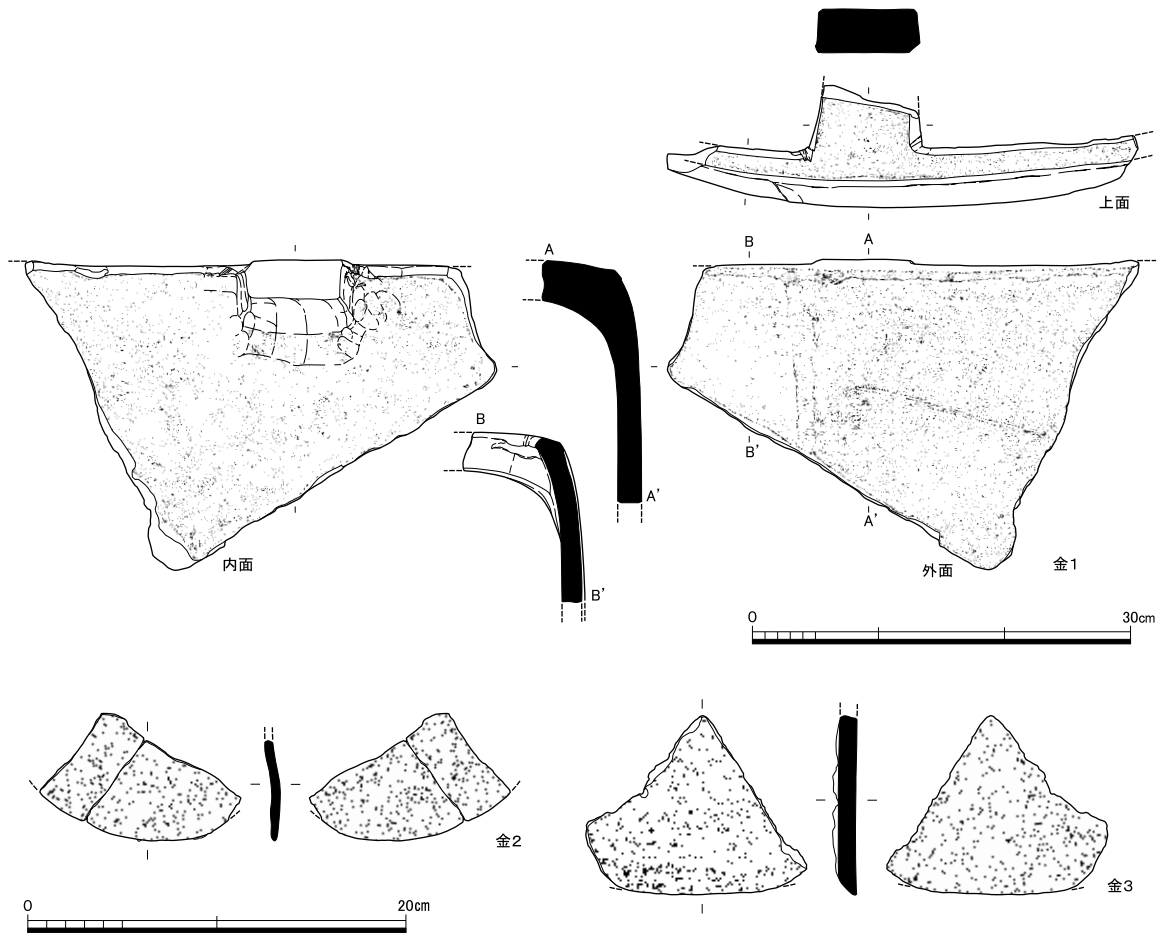


図53 金属製品実測図（金1は1：6、金2・3は1：4）

金3は青銅製板片である。高まり2盛土から出土した。残存幅11.7cm、厚さ1cmである。端部に緩やかな曲線があり、先端を片刃にするが、金2とは逆に斜面の端部が見えるように凸凹が多い。

金4は青銅製賢瓶（宝瓶）の下半部、木1は木栓である。5区攪乱から出土した。金4は脚部径5cm、残存高8.2cmで、上半部は押し潰されて欠損している。脚部と胴部の間に突起状の腰を作り、腰下部を窄めている。窄まった中空の内側に径2.3cm、厚さ1.1cmの木栓（木1）を詰めて瓶部の底としていた。脚部と腰部の器厚は約0.2cmであるが、胴部は0.1cmで薄い。脚部と腰部外面に各2条の沈線を廻らす。木1の側面には底に詰めた際の圧痕が残る。栓で塞がれた瓶内側に残存していた

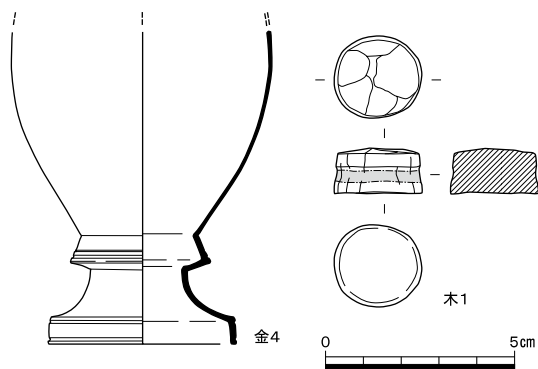


図54 金属製品・木製品実測図（1：2）

土からはガラス・水晶・砂金・粉殻などを検出した（「金属製品の分析」参照）。上部の欠損状態から原位置からは移動しているが、近辺で建物地鎮具として埋納されていた可能性がある。木栓で底を塞ぐ賢瓶は平安時代末に類例が多い。外面にやや黒色化した銀色に光る部分が残存していることから、青銅器鏡の鏡面のようにミョウバンと水銀で磨いて銀化させていた可能性もある。

4. 金属製品の分析

(1) 「宝輪」の分析 (図55)

相輪は仏塔の最上部を装飾していた部分。今回、その相輪の中間部分を構成する宝輪の一部と考えられる破片が出土した。相輪の多くは鍍金が施された金銅製である。しかしこの破片は目視では鍍金の痕跡は明確には確認できなかった。そこでこの宝輪を可搬型蛍光X線分析装置で材質調査した³⁾。



図55 宝輪の蛍光X線分析箇所

分析方法

弯曲している外面を表面と考え、その内破片の一部が剥離している状況が見られた場所の3箇所を含む、計10箇所分析した。

分析結果

材質成分として、表面では銅 (Cu)・スズ (Sn)・鉛 (Pb)・金 (Au)・銀 (Ag)・ヒ素 (As) が検出された。青銅に鍍金した金銅製であることが確認できた。剥離面では銅 (Cu)・スズ (Sn)・鉛 (Pb) が検出され、青銅だけであることが確認された。したがって剥離は製品完成後に起きたことが明らかとなった。

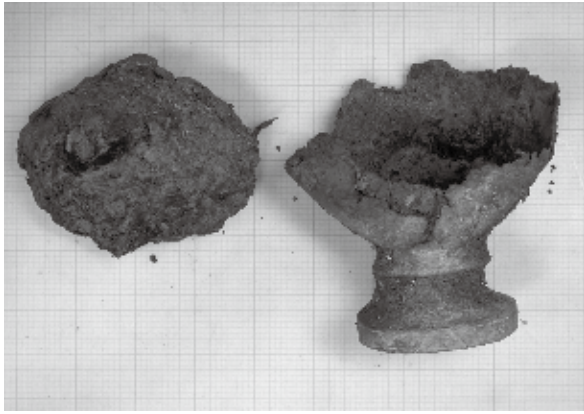
(2) 「賢瓶」について (図56、表8・9)

この華瓶型製品 (賢瓶) は攪乱残土の中より出土した。下半部のみ残存する。上半部欠損して出土しており、体部中央を横から押しつぶしたような損壊状態を呈していた。切断部には黄褐色粘土が入っており、切断後に陥入したものであると思われる。その下には暗灰色泥砂があり、これが当初に混入した土だと思われる。この土を取り除くと底部木栓の周囲の凹部にイネ籾殻と大きめの砂金が視認できた。暗灰色泥砂と凹部のイネ籾殻と大きめの砂金以外の洗い出したものを実体顕微鏡で選別・同定した。

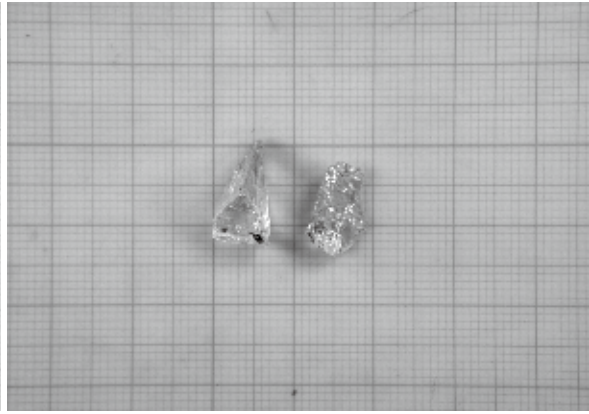
賢瓶本体

賢瓶本体の蛍光X線による成分分析では、銅 (Cu)・錫 (Sn)・鉛 (Pb) を検出した⁴⁾。青銅製である。鑄造による製品であるが、胴部の器厚は約1mmと極端に薄い。底を木栓で塞いでいる。木栓の材質は針葉樹である。胴部と高台の接点に節帯があり、節帯下端に一条の凸線が廻る。

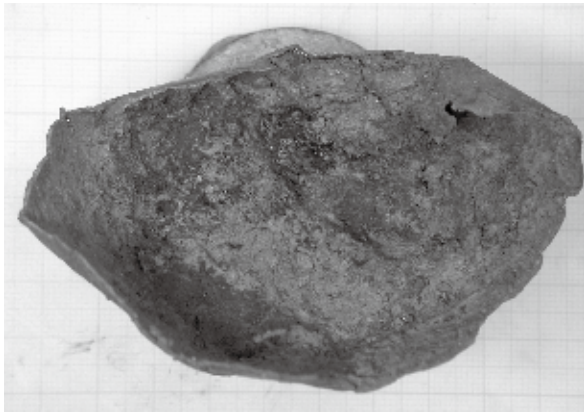
この節帯を持つタイプは真言密教系の「東密」の史料である「覚禅鈔」に記載されており、この華瓶型製品は真言密教系の地鎮・鎮壇具として使用されている「賢瓶」である。この節帯を持つタイプの賢瓶の出土例は、興福寺大御堂・石山寺多宝塔・奈良市須川町があり、興福寺と石山寺は底が木栓で須川町は銅板を蠟付けしている。埋納時期はいずれも12世紀末葉頃とされている⁵⁾。今回



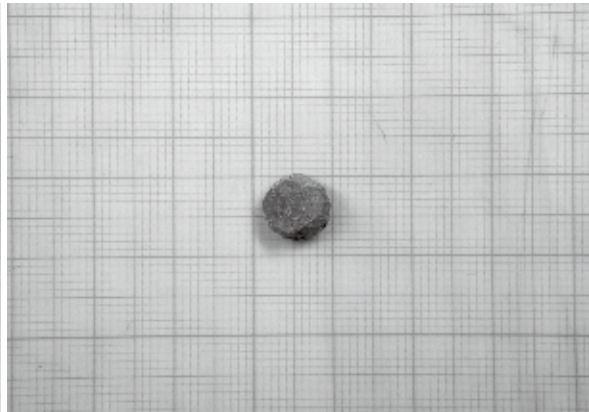
賢瓶と土 洗浄前



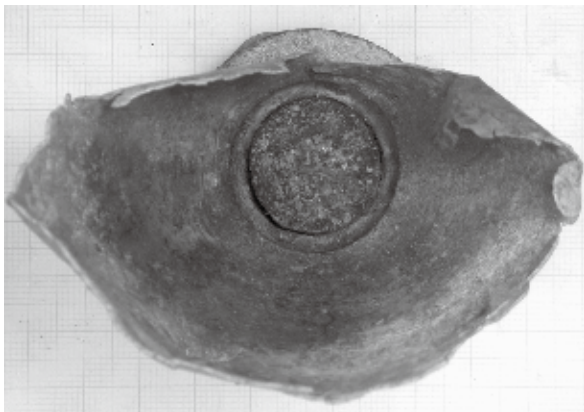
内容物 水晶



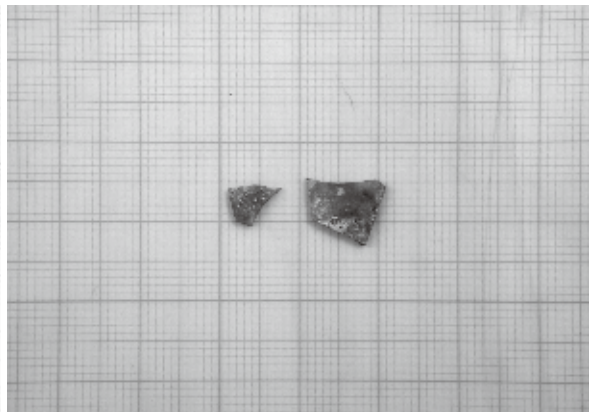
賢瓶 洗浄前



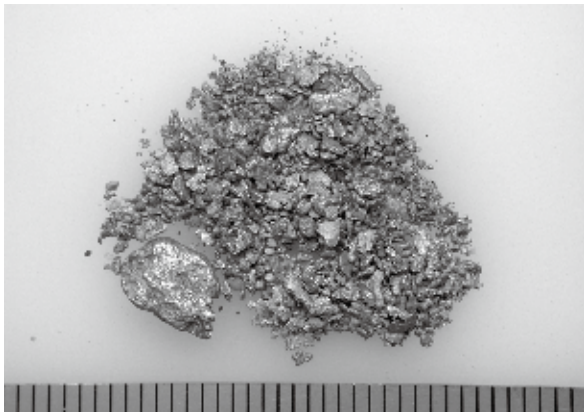
内容物 ガラス (円形)



賢瓶 洗浄後 木栓内側



内容物 ガラス (薄板)



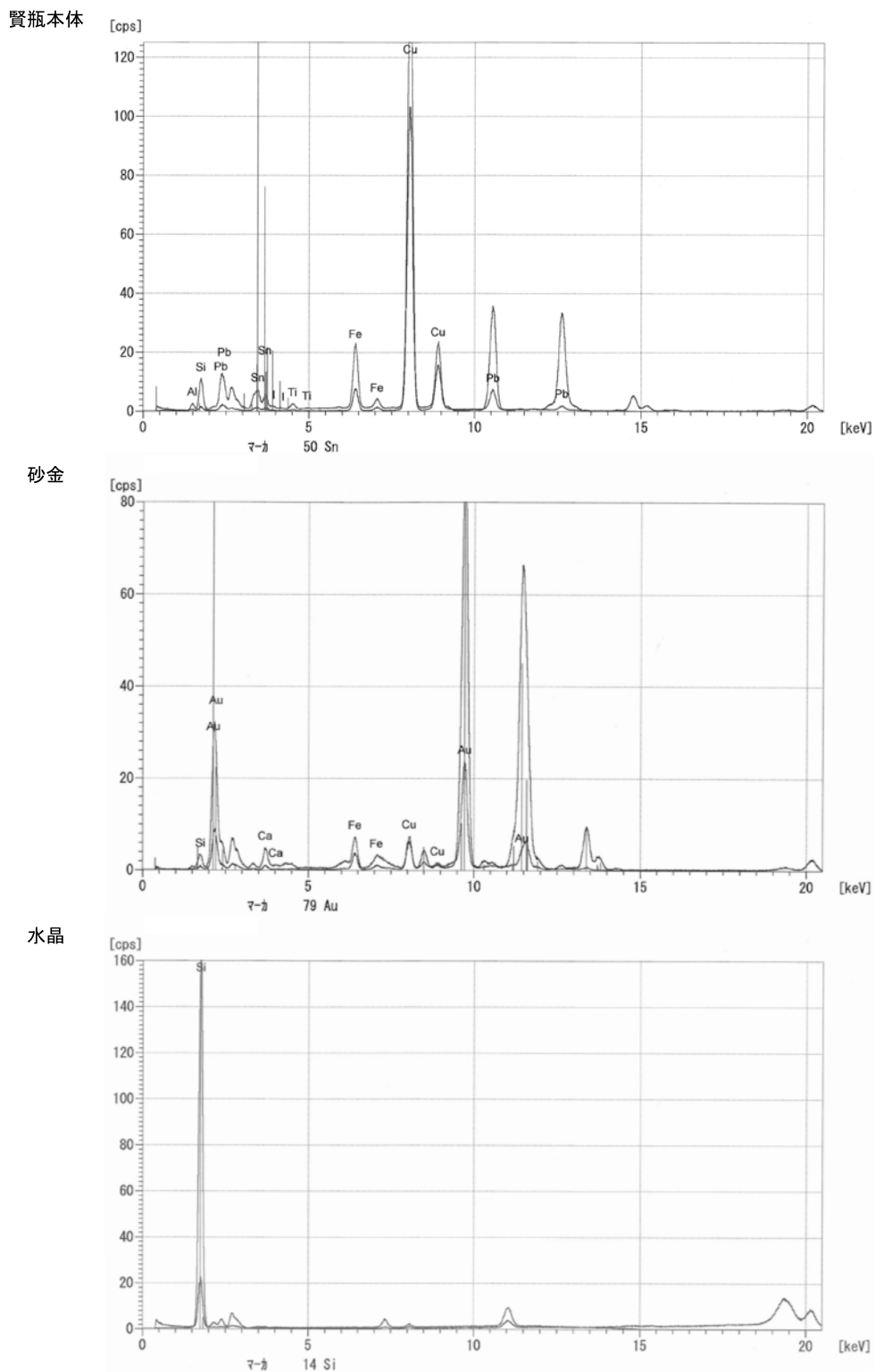
内容物 砂金



内容物 イネ籾殻

図56 賢瓶及び内容物

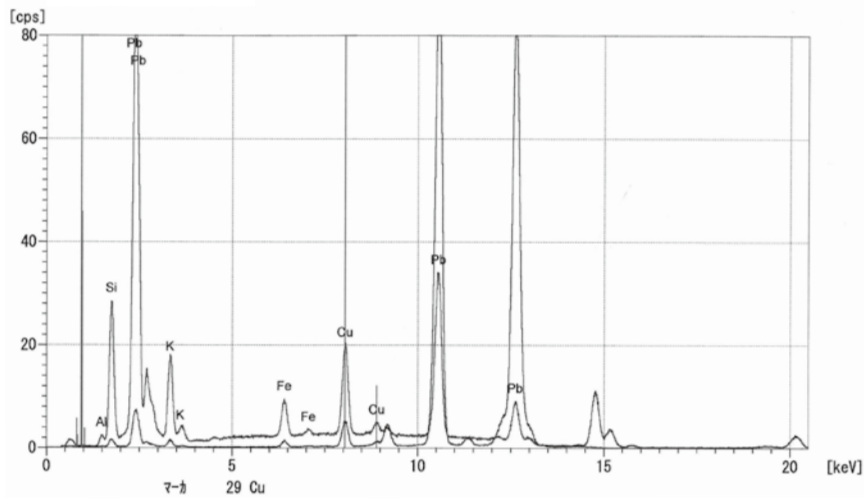
表8 賢瓶の蛍光X線分析表1



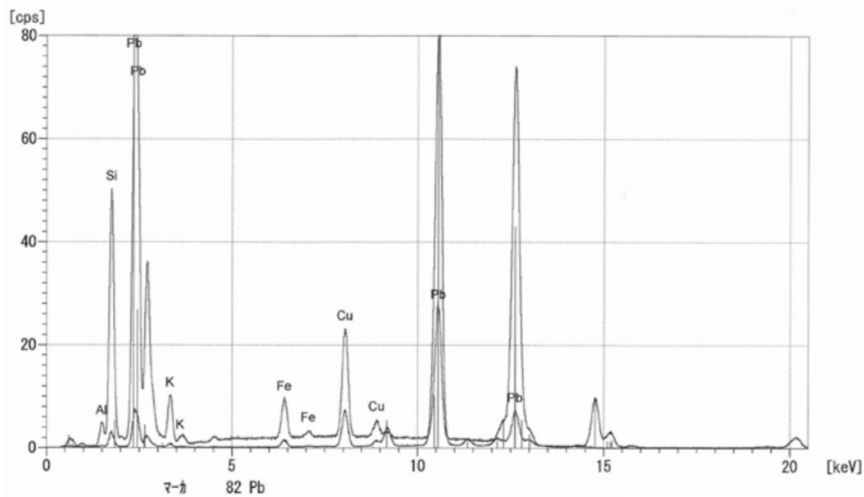
の資料は高台径5 cm、高台から胴部最大径までの高さから推定した器高は12～13cmで、興福寺大御堂・奈良市須川町のものに類似している。しかし節帯からすぐ開き高台となり、腰部の凸線が見られない。15世紀以降の根来寺、高野山や京都市公家町⁶⁾で出土している賢瓶は節帯が簡素化され凸帯になっており、今回の遺物は12世紀末葉頃に近い時期を想定させる。

表9 賢瓶の蛍光X線分析表2

ガラス
(円形)



ガラス
(薄板)



内容物

五宝

砂金－蛍光X線分析では金（Au）を検出。不定型な粒状を呈す。重量2.05 g。

水晶－蛍光X線分析ではシリカ（Si）を検出。破片2片。大は0.88 g、小は0.28 g。

ガラス（円形）－蛍光X線分析ではカリウム（K）・鉛（Pb）・銅（Cu）を検出。カリ鉛ガラス。周囲を粗く打ち欠いて径8.6～8.1mmの円盤状に整形している。青味がかかった緑色を呈する。全体に軽く弯曲し、外面はやや屈曲し稜線があり、内面は気泡が抜けた穴が数個みられる。両端部で厚みが1.6mmと2.8mmと異なることから考えて、曲面を持つガラス器の一部であろう。重量0.41 g。

ガラス（薄板）－蛍光X線分析ではカリウム（K）・鉛（Pb）・銅（Cu）を検出。カリ鉛ガラス。軽く弯曲した薄い板状のもの2片。同一個体である。大は0.14 g、小は0.04 g。両面とも平滑な面を持ち、厚さは約0.8mmで均一。青味がかかった緑色を呈する。

五穀

イネ－イネ籾殻。30粒以上。

5. まとめ (図57・58)

今回の調査では平安時代中期・鎌倉時代・室町時代の各遺構・遺物を検出した。

平安時代中期の灯明皿 5区で検出した3基の土坑から多量(コンテナ約3箱分)に出土した一括遺物である平安時代中期の土師器皿は、ほとんどの個体に油煙が付着しており、灯明皿が一括破棄されたものと考えられる。平安京外の単独遺構としては出土量の多い例となろう。出土地点は「北山野」の最北端の山際に位置し、時期的に平安時代中期(10世紀代)の文献にみられる北山靈巖寺が当地付近に比定される。御所からも眺望できることから、そこで「御燈」が行われ、その際に用いられた灯明皿の可能性はある。

池1と高まり 池1底や土手状の高まり2・4から室町時代の瓦や15世紀代の古瀬戸平椀片が出土しており、現在の池よりも広がった可能性が高い。高まり2・4に関しては盛土に室町時代の瓦が含まれることから義満の北山殿廃絶後に土手状に形成され、池となった可能性はある。

金銅製宝輪(九輪)片 今回出土した宝輪片は残存弧から復元径2.4mを測る。東大寺大仏殿の東七重塔九輪の記録であるが、『東大寺要録 卷七』に「撰一上東塔露盤事・露盤一具(高八丈三尺、第一盤径一丈二尺)」とあり、宝輪径が3.6mであったことがわかる⁷⁾。本調査の宝輪径は3mに及ばないが、かなり大きいもので、当地にあった北山七重大塔の宝輪破片と考えてよいであろう。

北山七重大塔 図34に示した今回の調査地と12次1～3区・13次調査区との間に存在する正方形で一辺約30～40m、高さ約1.5mの正方位の基壇状高まりが、北山七重大塔の基壇である可能性が高まった。

北山七重大塔の消失については、大塔消失を詳しく書き留めた『看聞日記』応永二十三年(1416)正月九日条の他に、『醍醐寺文書・二百一函』に「九日、遂而北山大塔上雷落、懸火出来塔婆、片時其残焼失、塔本辺不断言广愛染王堂焼失、本尊奉出也、塔本之木屋已下悉無残、但北山御所無為、此大塔御建立已及十四年カ年、去年大略九輪等上之、当年可周備之处、凡無念、無力事繫歟、」とする記録が残っている。「去年大略九輪等上之」とあることから、開眼供養を待つばかりとなっていた応永二十三年(1416)正月九日の焼失前に「九輪」が上っていたことは確実であろう。

北山七重大塔の前身である相国寺七重大塔は、相国寺の南東に現在もある「塔ノ段町」付近と推定されている。しかし、焼亡後、新たに北山殿で再建された北山大塔については専論がない⁸⁾。相国寺七重大塔について高橋康夫氏が今日までの研究を踏まえて、「応永二年(1395)」には太政大臣を辞して出家するが、このころより法皇として振る舞うようになり、応永四年(1397)に院御所というべき北山殿を営み、翌年応永五年移徙している。応永六年(1399)に完成した相国寺七重大塔は、高さ三六〇尺といわれ、法勝寺八角九重塔の高さ二七〇尺(推定)をはるかに超えている。義満は白河院政を凌駕しようとする意志のもとに相国寺を建設したといえそうであるが、寺地の外、上京の入口に聳えたつ相国寺七重大塔は、室町幕府政権の拠点としての地位を獲得した上京の、その地域的性格を最も端的に示すランドマーク的な存在であった⁹⁾。と総括されている。であるならば、相国寺・室町殿を超えて洛中洛外を眺望する北山で再建された義満の明確な意図を想定でき

よう。図57は細川武稔氏作成の「北山新都心復元図」に北山七重大塔推定地をプロットしたものである。¹⁰⁾この図から理解できるように大塔跡とする基壇状高まりの位置は、中世都市北山殿を構成していた「八町柳町」を貫く、平安京右京道祖大路の北延長路を中軸線に金閣（舍利殿）とほぼ左右対称の位置にあることが注目できる。

高まり1が基壇である可能性 正方位の方形基壇状の高まり1は残存高さが約0.5m、東西幅が天場で約13.5m、下場で約14.5mを測る。5区北端で検出した高まり6も高まり1の南東隅部とすれば南北約22mを測ることから、南北に長い長方形の平面形となる。最も高い北側で残存高さは約0.7mで、南ほど低く削平を受けている。地山が方形に切り出され、上面が平らに成形されていること、礎石の据え付け痕と考えられる土坑（土坑4～7）を上面で検出していることから、この高まり1は建物の基壇として造成されたものと判断した。なお、高まりの周囲では焼土層の分布が認められる。一部は後世に築造された瓦窯のものともみられるが、東・西・北裾にまんべんなく分布している状況から、基壇上の建物が火災で焼失したことに伴う焼土と考えられる。上記の『醍醐寺文書』にある大塔と共に類焼した「塔本辺不断護摩愛染王堂」の基壇跡である可能性もあり、応永二十三年（1416）の「愛染王堂」焼失後に基壇の高まりを利用して瓦窯が築かれたと考えることも可能であろう。



図57 北山七重大塔位置復元案
（細川武稔「北山新都心復元図」に一部加筆）

高まり1の上面で検出された土坑4～7及び石材を礎石の据え付け穴や礎石と仮定し、高まり1の方位に沿って建物の復元を試みたのが図58である。柱痕跡が確認できない箇所も多いが、東西10.5m、南北13.0m以上の南北棟建物が推定できる。

『醍醐寺文書』に記す「塔本辺」の「不断護摩愛染堂」については鎌倉時代初頭の藤原定家『明月記』嘉禄元年（1225）十月二十四日条に「北山不動愛染王尊造被安置、各有一堂」とあり、既に不動堂とは別に「愛染王尊」が一つの堂に安置されていた。また後の南北朝時代に成立したとされる『増鏡』にも「成就心院と云うは愛染王の座さまさぬ秘法とりおこなはせらる。供僧もこうはい（紅梅・引用者）の衣・けさ・すすのいとまておなし色にぞ侍める」とある。義満亡き後まで

西園寺時代の「成就心院」が「不斷護摩愛染王堂」として呼称され存続していた可能性が高い。また、池1や高まり2・4から義満の北山殿時代の小型瓦の他に鎌倉時代の軒瓦も出土している。今回調査地近辺に西園寺時代から存続した小型熨斗瓦などを葺いた檜皮葺建物や区画などが存在した可能性が大きくなった。

他方「本尊奉出」とされた愛染明王像が応仁の乱を超えた『実隆公記』文明十七年（1485）十一月十五日条に「抑今日未刻許回祿、後聞、北山鹿苑寺護摩堂云々、本尊愛染明王化燼了、不動尊（生髮尊也）者適奉出移金閣云々」とあることから、愛染明王を本尊とする「愛染王堂」が存続していたかのように受け取れる記録もあるが、この「護摩堂」に関しては焼失以前に鹿苑寺住持瑞溪周鳳の『臥雲日件抜尤』文安五年（1448）八月十九日条に「今寺南西、有護摩堂」とあり、今回検出した位置とほぼ正反対の寺の西南にあったとし、また、西園寺の建物群を復元された川上貢氏は「成就心院」を「愛染堂」であるとした上で、「五壇法」や「七仏薬師法」が勤行された「五大堂は七間四面東広庇付の大堂であったことが『門葉記』の修法記録の指図から知られる。」とされている。¹¹⁾今回検出した正方位の基壇状高まり1は方七間以下で、同じ護摩を焚く密教空間でも「五大堂」よ

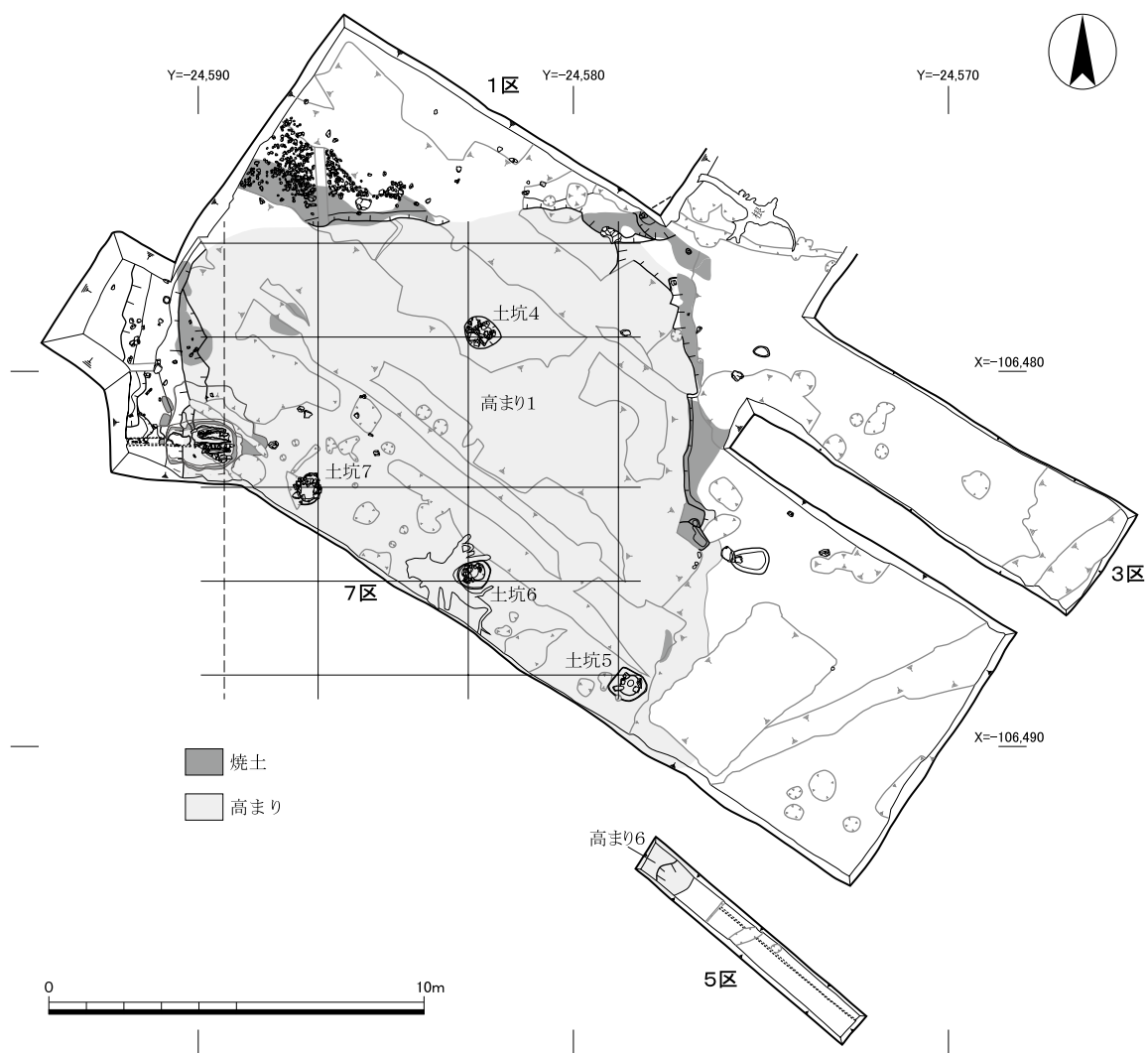


図58 高まり1建物復元案（1：200）

り小規模である。このことから塔の類焼の時「奉出」された「愛染王尊」が、同じ密教空間の「五大堂」に合祀され、その堂を禅宗の鹿苑寺となってから「護摩堂」と呼んだ可能性がある。文明十七年（1485）「護摩堂」焼失の際に「愛染明王」の他に「不動尊（生髮尊也）者適奉出移金閣云々」とある記事からもうかがえる。この「奉出」された不動尊が鹿苑寺明王院石不動堂本尊石造不動尊の脇に安置されている重要文化財指定木彫不動尊である。因みに「五大堂」の本尊は不動明王で他の四明王（降三世・大威徳・軍荼利・金剛夜叉）が配置されるが、同じ明王でも愛染明王は四明王に含めない。南北朝時代に書かれた前出の『竹むきが記』には「所々に建て置かれ侍御堂は・・・勅願寺にて・・・諸堂数多く、御願繁ければ…大方は怠らぬ様なり・・・殊に成就心院は座をさまざまぬ不断の勤め、嚴重の御願なれば、安貞二年十一月に始をかれけるより今貞和五に至るまで一時も退転ある事なし。」と書き記していることから、西園寺中でも特別の扱いを受けていたようである。天皇に后を多く輩出すことによって権勢を極めた西園寺家にとっては愛欲をつなぎとめる愛染明王に特別の意味が加わっていたことがうかがわれる。五明王を安置する「五大堂」に「愛染堂」が応永二十三年（1416）に焼失した際に「奉出」された愛染明王も加わり、さらに「護摩堂」本尊と誤認されたのも由緒ある愛染明王像が合祀されていたからではなかろうか。なお、今回出土した賢瓶については愛染明王の台座が蓮華座の下に賢瓶（宝瓶）を置き、宝珠・仏舎利を意味しているとされており、¹²⁾ 修法に必須の法具であることから「愛染王堂」との強い関連もうかがわれる。

また、7区北端に近い12次調査7区では地表下1.1mの地山面で成立する応仁・文明の乱後に焼土で埋まったとされる井戸を検出している。今回調査の高まり1が応永二十三年（1416）に類焼した「愛染王堂」の基壇であるならば、井戸は「愛染王堂」付属の閼伽井の可能性も残り、この火災焼土を処理するために埋めたと考えることも可能となる。

瓦窯 7区の高まり1北辺で検出した瓦窯は、高まりの傾斜面の高低差を利用して構築されていた。それらの窯の年代を決定することは難しいが、瓦窯2の分炎棚の芯に使われた平瓦はコビキAである。室町時代瓦の再利用の可能性もあるが、コビキAは畿内では城郭建築が盛んになる16世紀末にコビキBにほぼ変化するとされている。¹³⁾

今回の調査で検出した瓦窯は、形態からすれば焚口が二口の地上式のダルマ窯と異なり、小型の片口で、登り窯のように斜面を利用している。瓦窯は室町時代に最も小型化するとされており、ダルマ窯移行直前の形態を示している。¹⁴⁾ 瓦窯2は燃焼室から斜めに上がっていく分炎棚・火道を除いて焼成室は地上に築かれているが、燃焼室や焚口は下方に設定されており、従来から存在した登り窯や以前の地下式の平窯・穴窯などと類似性がみられる点に過渡的要素を見ることができる。窯内に製品が残存せず、時代確定に困難が伴うが、高まり北側の落込み3最下層で出土した土師器が15世紀後半であるので、応仁・文明の乱以降に鹿苑寺方丈や客殿が再建されており、寺再建時の窯である可能性がある。また、瓦窯2は小型で瓦窯1の上に重複して築いているので、後の修理用瓦窯の可能性も残す。

寺院の基壇跡を利用して鎌倉時代に半地下式の瓦窯を設けることは、伊丹廃寺金堂跡で確認されている。また、火道を斜めに設定する鎌倉時代の半地下式の瓦窯が法隆寺境内で検出されてい

る。これらの瓦窯はいずれも小型で焼成室の幅は1m前後である。前者が火道を水平に作るのに対し、後者は斜めに作っている点で類似している。また、後者は焼成室奥壁を1.1m掘り下げて形成された半地下式であるが、瓦窯2は火道より上の焼成室は地上に構築されている。従来の半地下式穴窯系焼成室の平面形は方形が主流であり、瓦窯2は隅丸方形である。また、分炎棚・火道の廻らし方や分炎柱の有無などに違いがある。今回検出した瓦窯は不明な点が多い瓦窯のダルマ窯成立期¹⁵⁾までの過渡期形態として注目に値する。

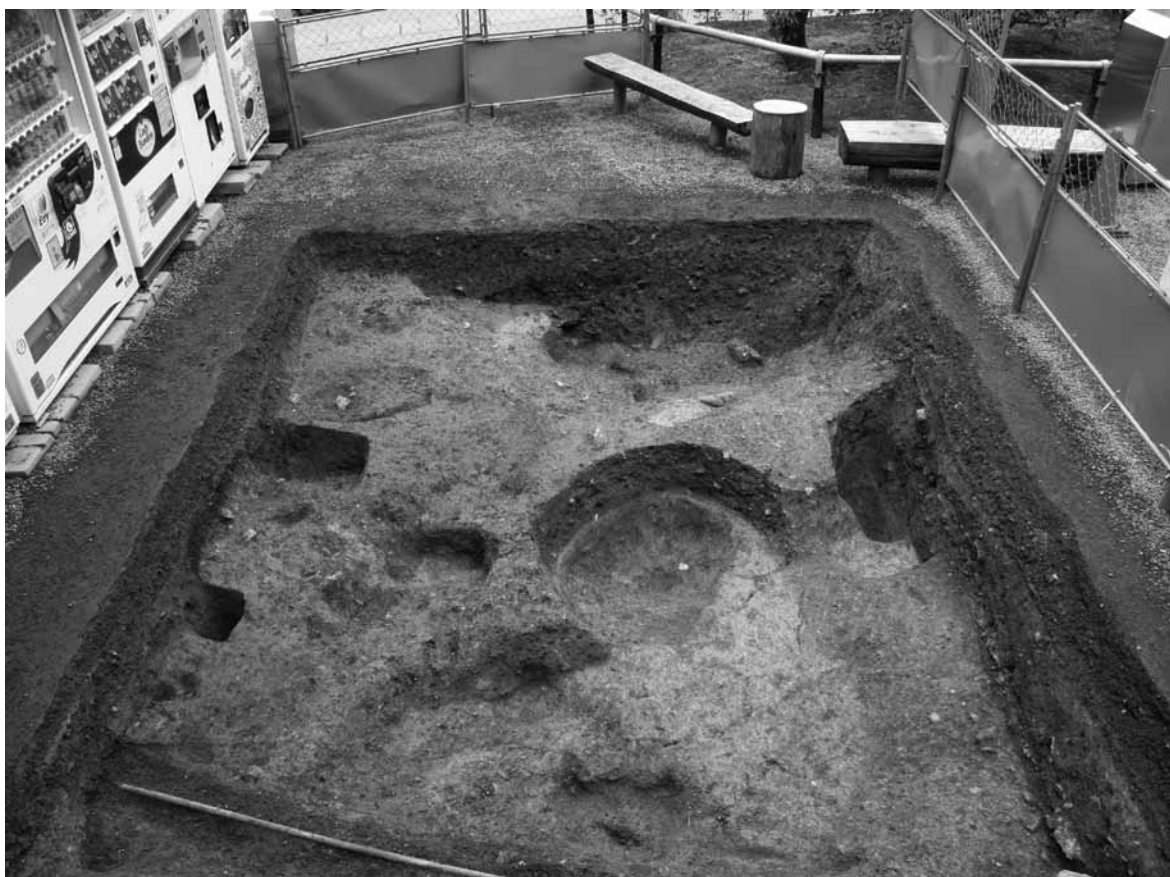
現場調査に当たっては京都大学の西山良平氏、京都産業大学の鈴木久男氏・松枝しげ美氏、立命館大学の木立雅朗氏・高正龍氏・三枝暁子氏・美川圭氏、同志社大学の鋤柄俊夫氏、京都女子大学の早島大祐氏、元吹田市立博物館の藤原学氏、元京都府京都文化博物館の植山茂氏、庭園研究室の重森千青氏、浅田製瓦工場の浅田晶久氏、元伏見工業高校の中村隆氏の御教示を得た。また、文献では伊丹市立博物館館長の亀田浩氏、奈良市埋蔵文化財センターの池田裕英氏、飯田道夫氏から御配慮を得た。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年。なお、「平安京Ⅰ～Ⅴ期」「京都Ⅵ～ⅩⅣ期」を「京都Ⅰ～ⅩⅣ期」で統一した。
- 2) 中世の瓦については山崎信二『中世瓦の研究』雄山閣 2000年、同『瓦が語る日本史』吉川弘文館 2012年を基準にした。義満期の瓦については東洋一「平瓦製作における技術革新について」『研究紀要』第1号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年、同「平瓦製作における技術革新について(第2部)」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年。また、京都では鎌倉時代初頭ごろと想定されている瓦窯に南ノ庄田瓦窯跡(『南ノ庄田瓦窯跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年)があり両面離れ砂の平瓦が出土している。
- 3) 蛍光X線分析は独立行政法人東京文化財研究所の北野信彦氏に測定していただいた。
- 4) 註3に同じ。
- 5) 森郁夫「奈良市須川町発見の鎮壇具」『学叢 第9号』京都国立博物館 1987年
- 6) 菅原正明「重要文化財高野山金剛三昧院客殿の発掘調査」『金剛三昧院客殿及び台所ほか一基保存修理事業報告』公益財団法人高野山文化財保存会
- 7) 東大寺七重塔九輪径については、箱崎和久「東大寺七重塔考」『論集東大寺創建前後』東大寺 2004年参照。箱崎氏は古代の七重塔級基壇の平面を比較しているが、ここでは岩と粘土で地形を行っていた直径30m強の院政期の白河天皇法勝寺八角九重塔の基壇平面比較で十分である。
- 8) 東洋一「西園寺四十五尺瀑布瀧と北山七重大塔(上)」『研究紀要』第7号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2001年の(図1)に所在地だけは示しておいた。また、北山七重大塔の造営過程については早島大祐『室町幕府論』講談社 2010年が詳しい。
- 9) 高橋康夫『海の「京都」』京都大学学術出版会 2015年。相国寺「別郭」に建立された相国寺七重大塔そのものの顕密的な建築学・宗教史的意義については富島義幸「相国寺七重塔」『日本宗教文化史研究』第5巻第1号 日本宗教文化史学会 2001年を参照。

- 10) 細川武稔「足利義満の北山新都心構想」『都市を区切る・中世都市研究15号』山川出版 2010年参照。
ただし、「八町柳町」を貫く中軸路は細川氏復元図よりやや西に傾くものと考えられる。
- 11) 川上 貢『日本中世住宅の研究・新訂』中央公論美術出版 2012年
- 12) 愛染明王の台座と宝瓶については根立研介・山本ひろ子『日本の美術 376 愛染明王像』至文堂
1997年参照。愛染明王と宝珠・仏舎利・不動明王との関係については阿部泰郎「宝珠と王権・中世王
権と密教儀礼」『岩波講座・日本の思想第四巻』岩波書店 2013年参照。
- 13) 山崎信二『近世瓦の研究』同成社 2008年による。
- 14) 藤原 学『達磨窯の研究』2001年参照。また、中村 隆「『だるま窯の研究』」『日本の産業遺産－産
業考古学研究』玉川大学出版部 1986年がダルマ窯研究の先駆的業績に上げられる。
- 15) 『伊丹廃寺－金堂跡に築かれた瓦窯跡資料を中心に』伊丹市立博物館 2013年。『法隆寺防災施設工
事・発掘調査報告書』法隆寺 1985年。および藤原 学前掲書参照。

圖 版



1 1区全景（北東から）



2 1区断割り（南から）



3 1区断割り壁面（南西から）



4 1区断割り壁面（北西から）



1 2区全景（南東から）



2 3区全景（拡張後、北から）



1 4区全景（南西から）



2 4区全景（北から）



3 5区全景（南東から）



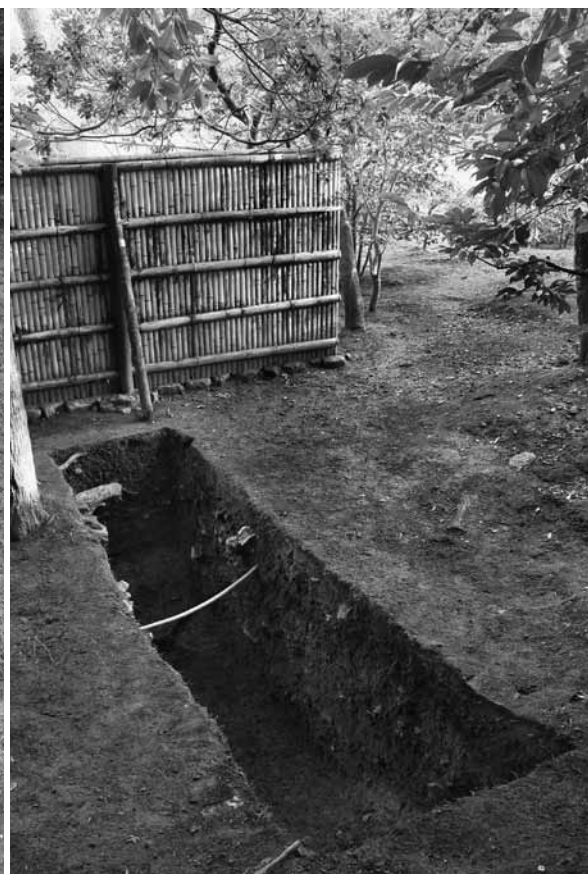
4 5区全景（北西から）



1 6区全景（拡張後、東から）



2 6区落込み（拡張後、北から）



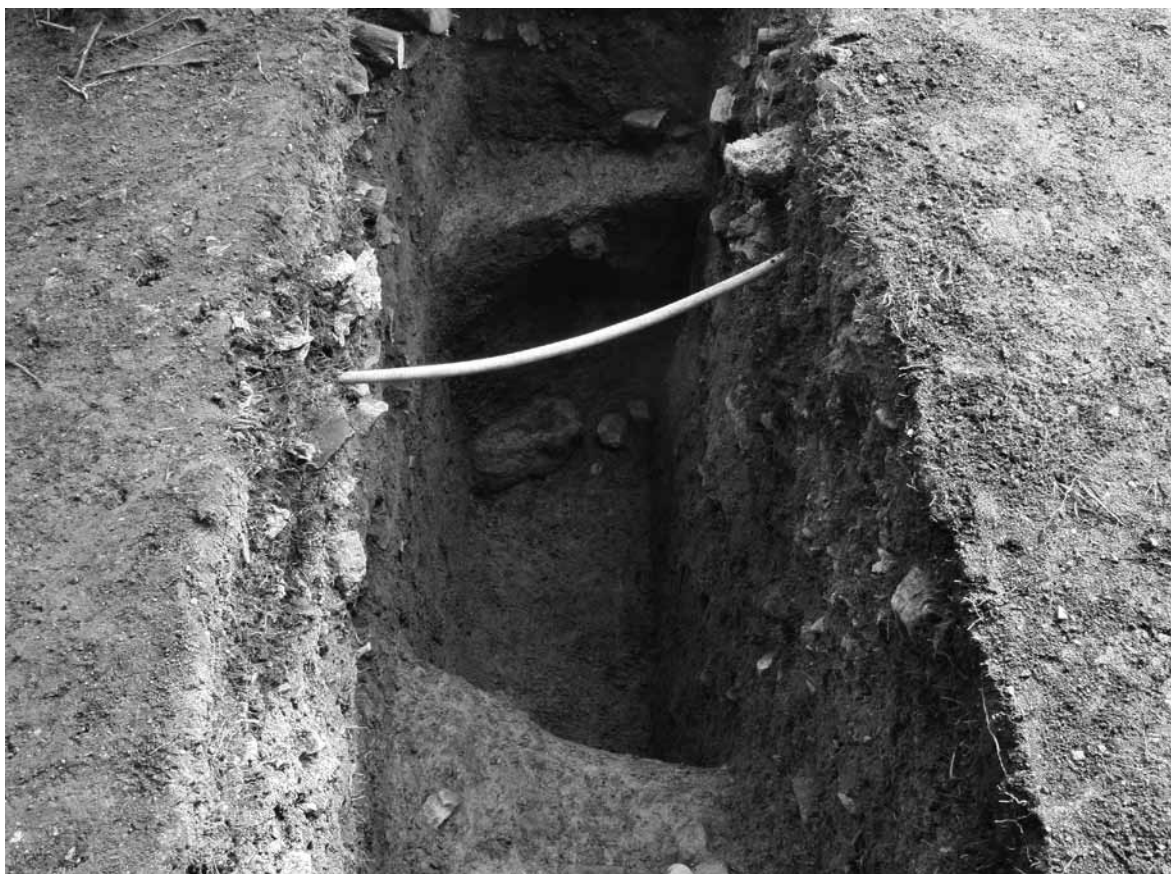
3 7区全景（北から）



1 7区井戸1 検出状況（北西から）



2 7区石組検出状況（北から）



3 7区井戸1（北西から）



1 8区全景（南東から）



2 8区石組検出状況（南東から）



3 8区石組検出状況（拡張後、東から）



土器類



瓦1



瓦2



瓦3



瓦4



瓦5



瓦6



瓦7



瓦10



瓦8



瓦11



瓦9



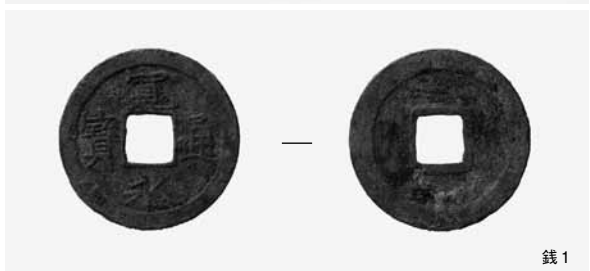
瓦12



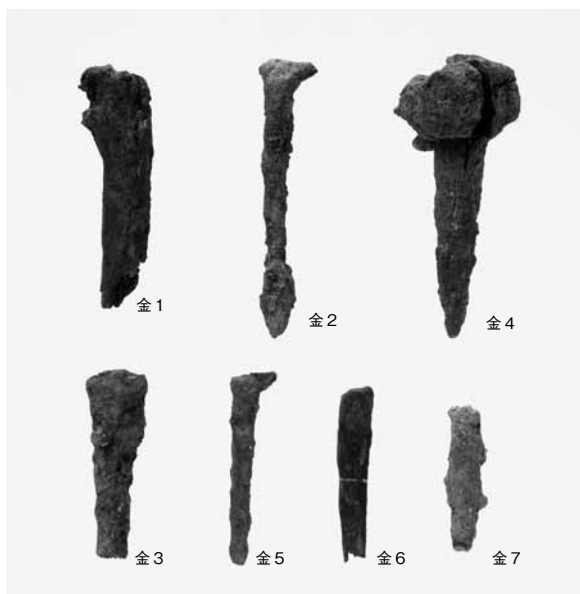
瓦13



瓦14



錢1



石1



壁土



1 第1面全景（北西から）



2 第2面全景（北西から）



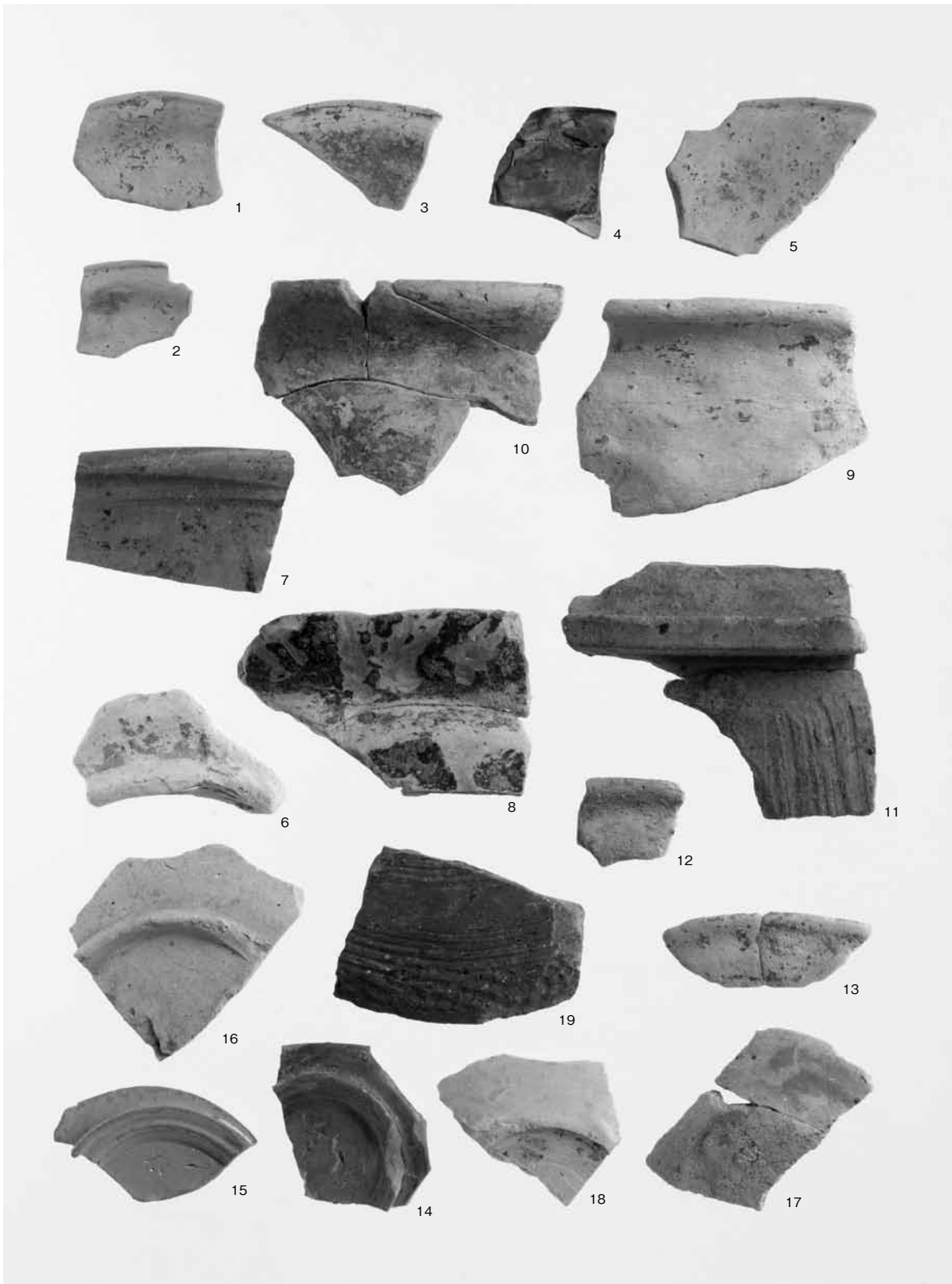
1 第3面全景（北西から）



2 断割り2（北西から）



3 断割り3（北西から）





1 1区全景（北西から）



2 7区全景（北西から）



1 2区全景（東から）



2 4区全景（北から）



3 3区全景（東から）



1 5区全景（南から）



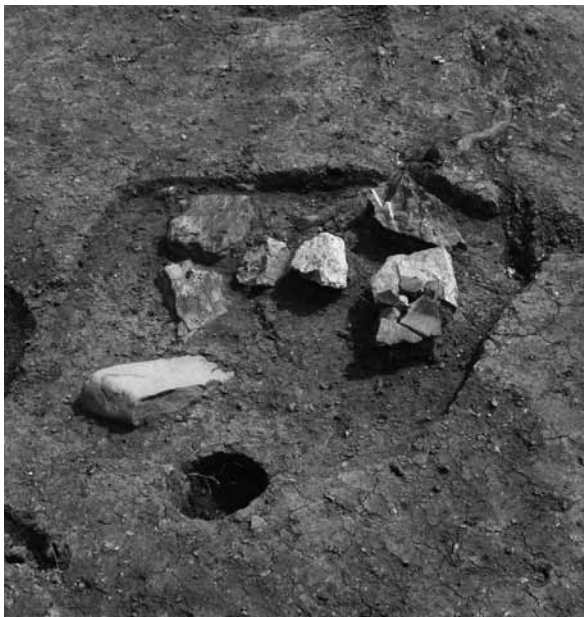
2 6区全景（北東から）



1 土坑3 土師器出土状況（北西から）



2 土坑4（南南西から）



3 土坑5（南西から）



4 土坑6（北東から）



5 土坑7（北から）



6 土坑9（南西から）



1 落込み1 (北東から)



2 磔敷1・高まり1 (北東から)



1 高まり3 (北西から)



2 高まり4 (北西から)



3 池1・溝2・高まり2 (西から)



1 落込み3 (北東から)



2 溝3 金銅製宝輪片出土状況 (南西から)



3 溝4 (南東から)



1 瓦窯1・2（西から）



2 瓦窯1・2（東から）



3 瓦窯2 隔壁部窯内側（東から）



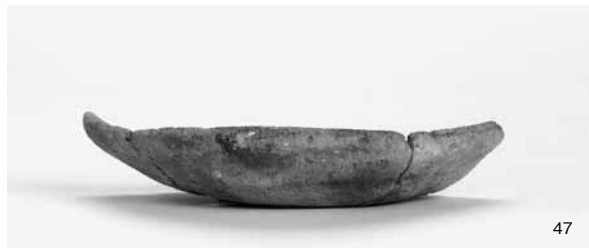
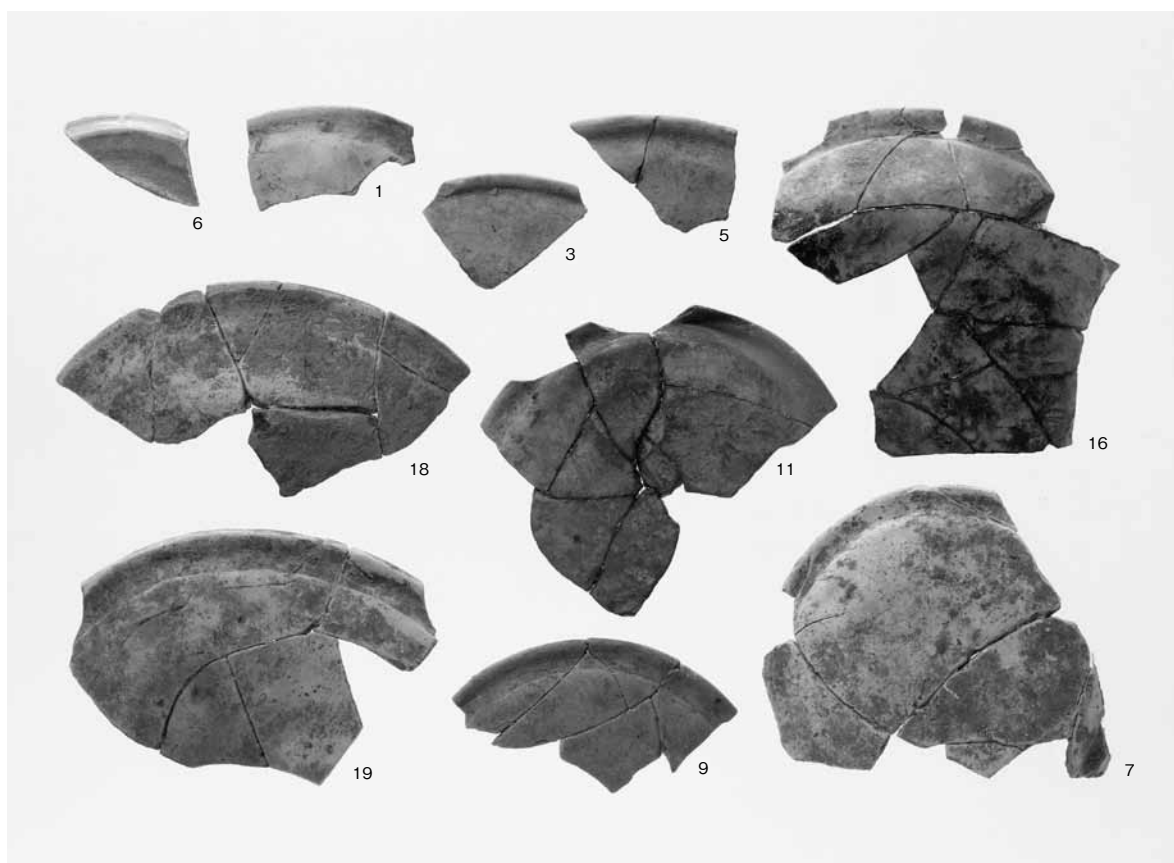
1 瓦窯1・2 灰原断割（北から）



2 瓦窯3（北から）



3 瓦窯4（東から）





土器類・金属製品



報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせき・とくべつめいしょう ろくおんじ (きんかくじ) ていえん							
書名	特別史跡・特別名勝 鹿苑寺 (金閣寺) 庭園							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2015-9							
編著者名	丸川義広・小松武彦・東 洋一・竜子正彦							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2016年1月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とくべつしせき・とくべつ 特別史跡・特別 めいしょう ろくおんじ 名勝 鹿苑寺 (きんかくじ) ていえん (金閣寺) 庭園	きょうとしきたく 京都市北区 きんかくじちやう 金閣寺町 1 番地	26100	A105	35度 02分 10秒	135度 44分 00秒	2012年12月 17日～2013 年2月1日	64㎡	便所改築 工事
						2013年8月 1日～2013 年9月7日	65㎡	
						2015年4月 1日～2015 年7月21日	447㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
特別史跡・特別 名勝 鹿苑寺 (金閣寺) 庭園	特別史跡 ・ 特別名勝	平安時代	整地層、溝、土坑、 ピット	土師器、須恵器、白色 土器、黒色土器、緑釉 陶器、灰釉陶器、輸入 陶磁器、瓦類、壁土、 金属製品	平安時代後期から 鎌倉時代及び室町 時代の2つの整地 層を確認した。 中世の正方位で方 形の基壇状高まり、 その西側傾斜で瓦 窯を検出した。 室町時代の溝より 金銅製宝輪片が出 土した。			
		鎌倉・ 室町時代	井戸、土坑、整地 層、焼土面、落込 み、高まり、礫敷、 溝、池、瓦窯	土師器、須恵器、瓦器、 山茶椀、施釉陶器、焼 締陶器、輸入陶磁器、 瓦類、石製品、金属製 品、壁土、漆器椀、炭				
		江戸時代	道路状の高まり、 土坑	土師器、施釉陶器、焼 締陶器、国産磁器、瓦 類、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-9

特別史跡・特別名勝
鹿苑寺（金閣寺）庭園

発行日 2016年1月29日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961